

「きもの」文化の伝承と発信のための 授業実践研究最終報告書



文部科学省委託事業「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」

服飾文化共同研究拠点における採択課題

『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発
－「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信－』研究グループ
(平成 21-23 年度)

目 次

I. はじめに	1
II. 「きものの着装」を取り入れた授業のバリエーション	
1. 和文化に親しむための技能習得	
【1】 ゆかたを一人で着ることができる	2
【2】 きものについて学び、友だちといっしょにゆかたを着てみる	10
2. 少人数制を導入した授業の展開	20
3. ゆかたの着装を通して和の文化に触れる授業	28
4. 文化伝承を手がかりとする衣生活学習 ——体験を重視したゆかたの着装実習	35
5. ゆかたの着装体験から夏休みのテーマ学習につなげた授業実践	50
6. 大学生のアシスタントティーチャー(AT)を活用した附属中学校での授業実践	60
III. 教員研修を担当して	78
IV. 「きもの」文化に関する学習の意義と課題	86
資料 ゆかた着装のポイント—— 着くずれを直してきれいに着こなす	89
正しい着装について学ぼう	90
V. 「きもの」文化の海外発信をめざしたイギリスでのゆかた着装ワークショップ	
1. 2009年度の実施内容・・・英国在住の学生や社会人を対象のワークショップ	94
2. 2010年度の実施内容 現地中学生対象のワークショップ	99
3. 2011年度の実施内容 英語版パンフを用いた現地中学生・大学生対象ワークショップ	105

VI. 「きもの」文化の海外発信をめざした中国でのゆかた着装ワークショップ・・・・	111
VII. 海外でのゆかたワークショップの意義と課題・・・・	117
謝辞　　・・・・	119

I. はじめに

日本の「きもの」文化は、これまで日常着あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら育まれてきた伝統文化の一つである。「きもの」文化は、その染色、織、縫製、着装に関わる技術に支えられ形成されてきたが、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、これらの技術や文化が若者を中心に理解されなくなりつつある。

一方、2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。この規程を受け、2008年3月の学習指導要領告示では、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。そして、中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれた。

日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育、すなわち「きもの」文化を伝えるための教育内容、方法の検討といった、新しい教育デザインの構築が求められている。

また、政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化を伝え、発信する方法についての検討は十分ではない。

このような「きもの」文化をめぐる様々な状況を背景に、本研究では、「ゆかたの着装を含む体験的学習を通して、日本の「きもの」文化を次世代に伝承し、世界へ発信するための教育プログラムを開発することを目的に中学校、高等学校の生徒を対象として「きもの」の内でも最も身近なゆかたを取り上げ、その着装方法を学び、「きもの」文化について、理解を深める体験型の授業実践研究を行ってきた。

具体的には教材面の整備として、ゆかたの着装およびたたみ方の日本語版、英語版、中国語版のDVD作成を行った。「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切り口としたテーマ学習の教材を作成するとともに、インターネットによるe-learning教育環境を整備した。さらに、男女のゆかたについて、サイズのバリエーションが必要であるため、日本の身体サイズのデータベースを参考に、特に、中学校における男物のゆかたのサイズについて検討し、ゆかたと小物の準備を整えた。

これらの教材を利用しながら、授業実践の指導案のマスタープランを作成し、協力校（千葉県立流山南高等学校、吉祥女子中学高等学校、洗足学園中学高等学校、埼玉大学教育学部附属中学校、川崎市立金程中学校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校、同横浜中学校）の授業担当者が各校の生徒の実態に合わせた授業を実施した。さらにプロジェクトメンバーが、本教育プログラムを題材とした教員研修を免許更新講習と認定講習の中で実施した。また、海外発信の試みとして英国や中国で社会人や中学生対象のゆかたのワークショップも実施した。

本報告書では、3年間にわたる数多くの授業実践の授業内容、方法等を詳細に報告した。家庭科を中心した先生方に参考にしていただき、そして実践していただくことにより、「きもの」文化の伝承と発信のための、新しい教育プログラム構築の礎となれば幸いである。

プロジェクトメンバー一同

和文化に親しむための技能習得【1】「ゆかたを一人で着ることができる」

埼玉大学教育学部 川端博子

吉祥女子中学校高等学校 樋浦陽子・山根晶子

1. 吉祥女子高等学校の特徴と実施体制

東京都内にある私立吉祥女子高等学校は、中高一貫校である。中学校では「技術・家庭」を3年間学習し、高等学校では2年次に週2時間、家庭基礎を学んでいる。全7組のうち、夏休み前に授業時間の多くとれる4組(有効生徒数138名)から4時間ずつの協力を得た。事前調査によれば、生徒たちは、きものやゆかたに関する興味・関心は高い。着付けが女子のみに限定でき、教育設備面にも恵まれている。試みの最初ではあるが、一定レベルを目ざせると考えて、「ゆかたを一人で着ることができる」を学習の目標とした。

2010年4月初旬に協力校の教師と懇談し、装備品・教材などの準備品について相談した。5月に再度訪問し、具体的な内容について確認し、6月17日より2時間続きで2週間、4時間の授業実践を行った。会議室を借りて、広いテーブル、プロジェクターとマイク、空調が整った環境下で授業を実施することができた。

2人1組で着装できるよう、S、M、L、LLサイズを取り揃えたゆかたと小物セット(半幅帯、腰ひも2本、伊達締め)約30着分をプロジェクトが貸し出した。プロジェクトメンバー1名と学生で適宜グループを組み、2名体制で総ての授業を観察した。必要に応じて視聴覚関連機器の操作、着付けと片づけの補佐および着付けの写真撮影を担当した。夏休みを挟んで9月中旬、振り返り調査の協力を得た。

2. 授業の流れ

実践の内容は、以下のとおりである。

1時間目 きものについて知ろう。(事前調査)

2時間目 ゆかたにふれてみよう。

3・4時間目 一人でゆかたを着てみよう。(自己評価・他者評価)

夏休み明け(振り返り調査)

時間	学習活動	・指導の実際と◎生徒の活動 (配付資料)
1	きものについて知ろう ○きものの種類を知る。 きものの格付けとTPO 通過儀礼ときもの ○ゆかたについて知る。 必要な小物(男女) 部位名称	・きものの説明をスライドで示す。 ワークシート 着物の語源 振り袖と留袖、黒留袖、色留袖、振袖、訪問着、紋付羽織袴 など 宮参り、七五三、成人式、結婚式 ワークシート 起源、どんな時に着るか 半幅帯、腰ひも、伊達締め、下駄(素足) えり、袖、前見頃、おくみ など

	○和服と洋服の違いを知る。 ○男物・女物の違いを知る。 ○生徒の実態を把握する。	平面構成と立体構成 袖の形、おはしより、帯の位置 (ゆかたのたたみ方プリント) ・たたみ方を示範する。 (共通の事前調査記入)
2	<u>ゆかたにふれてみよう</u> ○文庫結びを練習する。 帯のたたみ方 ○ゆかたのたたみ方を知る。 ○変わり結びについて知る。 ○次週の予告をする。	・帯の結び方を DVD で見せる。 (文庫結びの仕方プリント) <u>2人1組帯セット</u> ◎ペアの一方が教師の演示をみながら結んでみる。 ・帯結び DVD を無音で流しておく。 ◎ペアの他方が結んでみる。 ・一人でできるまで、繰り返し練習させる。 ◎しわを伸ばして帯をたたむ。 (ゆかたのたたみ方プリント) ・2組に分け、半数には変わり結びの DVD を見せる。もう半数にはたたみ方を教え、代表者にたたませる。交代して繰り返す。 ・ゆかたを着て、撮影をすること、体操着の準備や髪を結ぶことを知らせる。
3 ・ 4	<u>一人でゆかたを着てみよう</u> ○ゆかたの着方を知る。(1) ○ゆかたを一人で着てみる。(2) ○着付けを自己評価・他者評価する。(3) ○ゆかたをたたむ。(4) ○(1)～(4)を繰り返す。 ○片付けをする。	・DVD で着付けのやり方を示す (ゆかたの着方プリント)、<u>ゆかたと小物セット</u>、<u>他者評価・自己評価調査用紙</u> ・半数を集めて着方を示範する。 衣紋を抜く、おくみ線がまっすぐになるおはしよりがごろごろしない、ひもの結び方、伊達締め巻き方 ・通しで着てみるように指示する。残りの半数にはアドバイスと他者評価をするよう指示する。 ◎着終えた者は、前・後から写真撮影する。その後、鏡を見て着付けの出来ばえを自己評価する。時間が許す限り着続けて過ごし、きものの気分を味わう。 ◎着物を脱いでたたみ方を復習し、次の人のためにゆかたをたたむ。残りの生徒が同様の手順で着てみる。 ・着物セット、評価調査用紙を回収する。

3. 授業観察

初回、教師がゆかたを着装して授業に現れたので、生徒はいつもと違う先生に、素敵、可愛いといって近づき興味を示した。授業は 100 名以上収容可能な広い会議室（床は絨毯敷き）で、6 人がけテーブルに対面式に着席させて行った。いつもと異なる雰囲気も、気持ちを高める上で効果をもたらしたように思う。

きもに関する基礎的知識の学習では、ワークシートに記入させて要点をチェックする方式で行った。着付けに先立ち、部位名称の把握を試みたが、生徒たちはなかなか馴染めないようであった。

たたみ方は、平面構成の理解と部位名称を知る上で有効であり、片付け・収納にも必要である。教師や代表者がたたみ方を示すと多くの生徒が感動した様子で、拍手が起こるなど予想外の反響があった。しかし、実際には習得できたとはいえない現状で、着付け後の片付けは大変であった。

帯結びと着付けの説明においては、DVD をプロジェクターで投影し、最初に流れを理解させた。DVD 視聴の後、教師が演示して見せるなど、繰り返しを心がけ、理解の深まりと定着を図った。

帯結びについては、平成 21 年度横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校の実践を踏まえ、難航の予想される文庫結びを制服の上から事前に練習させた。洋服の上から帯を結んで、リボンの違いを比較したり、出来ばえを相互評価したりする様子が見受けられた。リボンを腹に巻いて見せ合う姿はこっけいにも見えたが、大変楽しそうであった。

生徒たちの中には「テンション上がった、鏡で出来ばえを見たいのでトイレに行っているですか」という積極的な声、「これではきつ過ぎます、ゆる過ぎますか」などのやり方に関する質問があったり、変わり結びに挑戦したりする生徒もあるなど、次週の着付けに向けて興味を喚起させたといえる。

一方、体をこまのように回転させて帯を解く、色がいやだと言い出す者やふざける生徒もいた。教師の判断により、練習時間を短縮して、6 人の代表者が前に出て結んだクラスもあった。全体としてやり方は理解した様子であった。

翌週 3・4 時間目には、身長に近い者がペアを組んで、交互に着付けをした。ゆかたは身長に合わせて配付した。「一人で着ることができる」を目標とするので、友だちが困った時に助けるよう指示し、指導の行き渡らない部分を補う工夫とした。



2 時間目 たたみ方の練習



2 時間目 帯結びの練習

着装後には、三面鏡で着方について自己評価するとともに、ペアの相手による他者評価を組み込んで相互的・客観的に評価できるようにした。着付けを個別的に観察させたが、生徒たちは必ずしも正確に評価できていないようであった。特に、他者評価が甘い傾向であった。



3・4 時間目 ペアを組んで着付けに挑戦

一回の学習で着付け技能の

習得に至らないまでも、着付けの出来ばえを正しく評価し、上達を目ざして取り組む姿勢を育むことが課題である。

夏休み後の振り返り調査では、3・4時間目に行った、友だちからの評価（他者評価）と自己評価シートに写真を添付したもの一式を返却した。これらを見ながら、各人が本授業の内容を振り返り、生活への取り入れの状況について調査した。振り返り調査用紙には、ゆかたの良さを多面的に味わう記述がみられ、また、生徒の3割が着用したと回答したことから、本実践によって、ゆかたとの距離を縮めたといえる。

4. 授業者の感想

食物が専門の私にとって被服はどちらかというと不得手な分野で、中学生を対象に、「手縫いの基礎縫い」「エプロンの製作」といった洋裁を中心に指導をしています。そのような私がゆかたの着付けを生徒に指導するのは、正直、ハードルの高いことでした。本来であれば、日本における和服の歴史や文化・基礎知識（和裁も含む）を十分理解した上での指導であって然るべきですが、それでも何とか終了できたのは、「生徒分のゆかたセット」「着付けのDVD」「大学生のお手伝い」があったからだと思います。

ただ、私は若い頃にお茶を少々嗜んだことがあって、きものを着るのが大好きでした。そこで和服を装う楽しさだけでも生徒に伝えられたらいいなと思って取り組みました。内容を十分こなせぬまま、未熟なアプローチでありましたが、そのような授業サンプルもあってよいのではないかと思います。

本学の生徒の毎日は、大学受験を目指した教室での勉強づくしです。授業で友だちとワイワイ言いながらゆかたを着たことは楽しく、良い思い出になったことと思います。9月になって何人かの生徒が、「夏休みにみんなでゆかたを着て庭で花火をしました。」「先生、ゆかたを着て花火大会に行きました。」のように話してくれました。授業をきっかけに自分で着てみようという意識も生まれたのではないかと思います。

最後に、昨年度、楽しい授業に関われたことに感謝します。しかし、今年度は、残念なことにカリキュラムに取り入れることができませんでした。ゆかたの着装には小物が多く必要です。セットがきちんと用意できれば、今後、充実した授業に組み立てていけると思います。一般校での実施のためには、装備をどうするか、一人の教師でも実現可能な方法を模索していくことが求められると思います。

浴衣を自分で着る

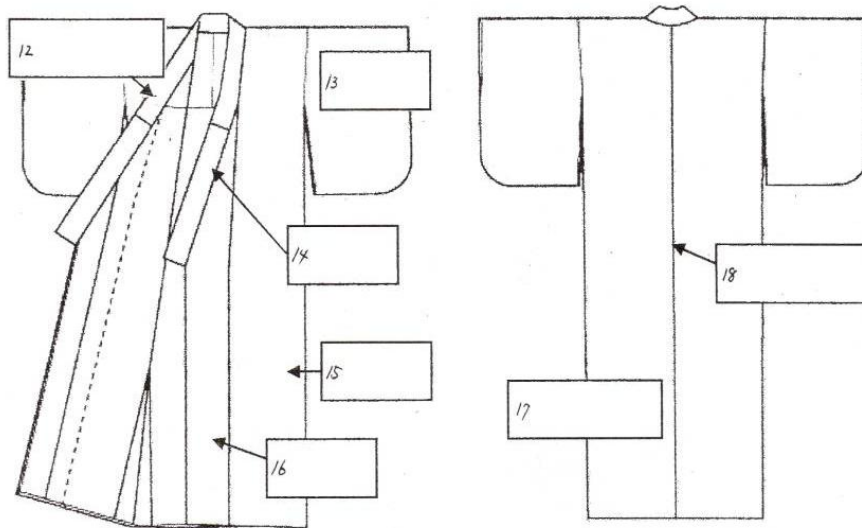
1 きものについて

- ① (1)) 既婚女性が着る第一礼装。
- ② (2)) 慶事用の第一礼装。未婚の女性も着用することが可能。
- ③ (3)) 未婚女性の第一礼装。袖が長いほど礼装になる。大振袖>中振袖>小振袖
- ④ (4)) 準礼装や晴れ着になるもの。
- ⑤ (5)) 男性の第一礼装。
- ⑥ (6)) 夏のくつろぎ着。貴人が入浴のときに用いた麻の湯帷子がルーツ。

2 浴衣の着用に必要な小物(女子)

(7) (8) (9) (10) (11) が2本)

3 浴衣の部位の名称をおぼえよう！



4 平面構成と立体構成

構成	平面構成	立体構成
裁断	(19) 裁断	(20) 裁断
縫製	(21) 縫製	(22) 縫製
例	(23)	(24)

5 男物と女物の違い

	男物	女物
袖	袖が縫い (25) じてある	振りが (26) いている
帯結びの位置	(27) い	(28) い
おはしより	おはしよりが (29)	おはしよりが (30)

記入日 6 月 日

他者評価シート

年 組 番

あなたの名前 _____

一人で着られるようになることを目標としています。最初から手助けしないで、困ったことがあったときに助けてあげましょう。

きものを着た友だちの名前 _____

友だちの着方をチェックしよう！	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1. 腰紐（こしひも）をきちんと結べている	4	3	2	1
2. おはしよりをきれいに整えられている（女子）	4	3	2	1
3. 上半身の背中心がまっすぐになっている	4	3	2	1
4. 胸元（えり）の合わせ具合がちょうど良い	4	3	2	1
5. うしろすそが地面と平行になっている	4	3	2	1
6. 帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない	4	3	2	1
7. 帯のリボンの形が整えられている（女子）	4	3	2	1
8. 帯結びの形が整えられている（男子）	4	3	2	1
9. 時間が経っても着くずれず維持できた	4	3	2	1

	手伝った	相談を受けた	ひとりで
10. 腰紐を結ぶ	3	2	1
11. おはしよりを整える（女子）	3	2	1
12. 帯を巻く	3	2	1
13. 帯を結ぶ	3	2	1
14. その他（具体的に	3	2	1

友だちの良かったところ

友だちへのアドバイス

自己評価調査用紙

自己評価シート

一人で着られるようになることを目標としています。困ったことがあれば、ペアの人に助けてもらいましょう。

着付けをした日 6 月 日

着付けをした順番は（前半・後半）

年 組 番

あなたの名前_____

鏡を見て着方をチェックしよう！

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1. 腰紐（こしひも）をきちんと結べている	4	3	2	1
2. おはしよりをきれいに整えられている（女子）	4	3	2	1
3. 上半身の背中心がまっすぐになっている	4	3	2	1
4. 胸元（えり）の合わせ具合がちょうど良い	4	3	2	1
5. うしろすそが地面と平行になっている	4	3	2	1
6. 帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない	4	3	2	1
7. 帯のリボンの形が整えられている（女子）	4	3	2	1
8. 帯結びの形が整えられている（男子）	4	3	2	1
9. 時間が経っても着くずれず維持できた	4	3	2	1
10. 一人で着つけができる	4	3	2	1
11. もっと練習したい	4	3	2	1
12. 楽しかった	4	3	2	1
13. 難しかった	4	3	2	1
	（どのような点）			
14. 着付けの技を 100 点満点で採点してください。	点			

写真を貼りましょう

名前 _____

- ・夏休み中にゆかたを着てみましたか
はい いいえ

- ・授業でゆかたを着てみてどう感じましたか。あてはまるものに○をつけてください

	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
ゆかたやきものに関心が持てましたか	1	2	3	4
ゆかたを着ると普段と違う気持ちになりますか	1	2	3	4
ペアの相手の印象は変わりましたか	1	2	3	4
またゆかたを着てみたいですか	1	2	3	4

- ・授業でゆかたを着たときの気持ちはどうでしたか（あてはまるものに○をつけてください）

	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
①気持ちが高まった	1	2	3	4
②優雅な気分だった	1	2	3	4
③うれしかった	1	2	3	4
④帯がきつかった	1	2	3	4
⑤歩きにくかった	1	2	3	4
⑥姿勢がよくなった	1	2	3	4
⑦身のこなしが変化した	1	2	3	4

- ・授業での着付けの理解度についてあてはまるものに○をつけてください

	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
腰紐の結び方が理解できましたか	1	2	3	4
帯の結び方が理解できましたか	1	2	3	4
たたみ方が理解できましたか	1	2	3	4
ひとりでゆかたを着ることが出来ますか	1	2	3	4

- ・もっと着付けを練習したいですか

① ② ③ ④
そう思わない あまりそう思わない ややそう思う そう思う

- ・あなたが感じたゆかたの優れている点と欠点を教えてください

優れている点 [		]
欠点 [		]

和文化に親しむための技能習得

【2】きものについて学び、友だちといっしょにゆかたを着てみる

埼玉大学教育学部 川端 博子
洗足学園中学校・高等学校 山口 香

1. 洗足学園中学校・高等学校の特徴と実施体制

実践校は、神奈川県川崎市にある中学・高校一貫の私立の女子校である。英語教育及び国際教育に力を入れ、各学年に 20 名以上の帰国生が在学している。並立する音楽大学の影響もあり音楽教育にも熱心である。技術・家庭科は、1 コマ 60 分で、中 1 で 2 コマ、中 2 と中 3 で各 1 コマが設置されている。本実践に協力を得たのは、中学 2 年次 A～F 組の 6 クラス（有効生徒数 249 名）である。

2010 年 5 月中旬に、教師との打ち合わせ・実習室の確認のため協力校を訪問し、装備品・教材などの協力体制について説明した。被服実習室は、十分な広さがあり、三面鏡・空調設備も整い、視聴覚教材（スライド資料・DVD）の利用も可能であった。授業の実施期間は、2010 年 6 月 21 日～7 月 1 日に 2 コマ、夏休みを挟んで 8 月 26 日～9 月 6 日に 2 コマである。

実施内容・流れは吉祥女子中学高等学校とほぼ同様である。中学生の発達レベル、1 時間区切りの実習、夏休みを挟んでの実施という中断の影響も心配された。以上のことから、一人で着るのは難しいと考え、「きものについて学び、友だちといっしょにゆかたを着てみる」を学習の目標とした。帯結び終了後は夏休みとなるため、夏休みの課題の選択肢として「ゆかたの帯結び実践レポート」を設定した。

S～LL サイズを取り揃えたゆかたと小物セット（半幅帯、腰ひも 2 本、伊達締め）約 30 着分、下駄 10 組をプロジェクトが貸し出した。前半 2 コマでは、プロジェクトメンバー 1 名と学生が可能な限り授業を参観し、必要に応じて視聴覚機器の操作と帯結び実習補佐をした。後半の着付け実習では、プロジェクトメンバー 1～2 名と研究室の学生が全クラスを補佐し、着付けの写真撮影と準備・片付けを行った。

翌週、担当教師より、振り返り授業と調査の協力を得た。

2. 授業の流れ

実践の内容は、以下のとおりである。

1 時間目 （事前調査）きものについて知ろう。

2 時間目 帯を結んでみよう。

夏休み課題： バジルを利用した料理レポートまたはゆかたの帯結び実践レポート

3・4 時間目 友だちといっしょにゆかたを着てみよう。（自己評価・他者評価）

5 時間目 学習を振り返ろう。（振り返り調査）

時間	学習活動	・指導の実際と◎生徒の活動 (プリント資料)
1	<u>きものについて知ろう</u> ○生徒の実態を把握する。 ○きものについて知る。 ○きものの構成を知る。 <u>きものの構成を紙で再現してみよう</u>	・和服について着付けをしながら 4 時間で学んでいく。 (事前調査 2 校共通) の記入 <u>ワークシート</u> ・きものの説明をスライド資料で示す。 ・きものの意味 (和服とは) ・きものの種類・特徴と格付けを説明 黒留袖、色留袖、振袖、訪問着 紋があること、袖の長さについて 紋付羽織袴 仙台平の袴 ・きものの部位名称 かけ衿の役割、男女の袖の違い 袖の振り、たもとと身八つ口 ・平面構成と立体構成 反物による直線裁ちと洋服の曲線裁ち パーツ <u>ミニチュアのきもの裁断図</u> のり、はさみ、<u>台紙</u> グループごとに完成見本 ・反物と裁断について説明する。 ◎紙でミニチュアのきものを組み立てる。
2	<u>帯を結んでみよう</u> ○ゆかたについて知る。 ○帯の結び方を知る。 ○帯を一人で結んでみる。	着付けの前段階として、帯結びを練習する ・ゆかたについてスライド資料で示す。 <u>ワークシート</u> ゆかたの由来、小物と下着、柄、男物と女物の違い(袖・丈・人形)、帯の位置、おはしよりの由来、帯の種類(半幅帯、角帯、兵児帯) (文庫結びの仕方プリント)、<u>2 人 1 組で帯セット</u> ・教師が文庫結びを胴に巻いて示範する。 ・DVD で再確認する。 ◎ペアの一人が帯を結んでみる。終了後、交代して練習する。 ◎代表者が前に出て実演し、帯結びの感想を発表する。

	○帯をたたみ、片付けをする。	・帯をたたみ、セットを回収する。
3 ・ 4	友だちと一緒にゆかたを着てみよう ○着方について知る。 ○正しい着方を知る。 ○友だちと一緒に着付けをする。 ○着方を評価する。 ○ゆかたを楽しむ。 ○ゆかたをたたむ。 ○片づけをする	夏休みの課題物を集める。 (ゆかたの着方と文庫結びの仕方プリント) ・身長が近い者同士でペアを組ませる。ペアが組めた生徒から順次<u>ゆかたセット</u>と<u>自己評価シート</u>を配付する。 ・TAの学生をモデルに一通り示範する。 ・着付けのチェックポイントをボディに着付けた見本で説明する。 ◎ペアを組んで、一人がモデルとなり、プリントも参考にしながら、着付けを行う。 ◎下駄をはき、着付け、帯結びを完了した者から写真撮影する。 <u>カメラ・番号札</u> ◎出来ばえについて、自己評価シートに記入する。 ・時間が許す限り、ゆかたを着続けるよう指示する。 ・ゆかたを着なかった生徒には写真撮影の間、たたみ方の指導を行う。 ・写真撮影、自己評シートの記入が終わり次第、ゆかたをたたんで返却させる。
5	学習を振り返ろう ○ゆかたのたたみ方を復習する。 ○着付けについて振り返る。 ○ゆかたについてもっと知る	<u>記載済み自己評価シート</u>、<u>写真</u>の返却、<u>振り返り調査用紙</u> ◎プリントをみながら、たたみ方を復習する。教卓で示範後、代表生徒が実践してみる。 ・着付けの評価シートと写真を生徒に返却する。 ◎写真をみて振り返りシートを記入する。 ・時間に余裕のあるクラスでは美の壺「ゆかた」を視聴する。

3. 授業観察

1 時間目、被服室には男女のゆかたがボディに着せ付けてあり、生徒の興味を引いた。きものの説明には、吉祥女子中学高等学校と同じスライド資料を用いた。中学生には少し難しいのか、馴染みがないためなのか、集中できない生徒もいたが、中には熱心にメモをとって聞く生徒もいた。スライドの機器操作は TA が補佐した。ゆかたの紙工作の組み立ては予想のほか手間取り、おくみの載せ方に難航した。2 クラス目からは配布物も事前にセットし、出来上がりサンプルを用意した。

2 時間目には、半幅帯と帯結びと着付けのプリントを事前に作業机に準備しておいた。着てみるという期待もあったためか、ゆかたの説明を 1 時間目に比べてよく聞いていた。スライド説明の様子から、前時の部位名称の理解は十分でない感じがした。「兵児帯」は、誰も読むことができず、聞いたこともなかった。子どもの帯を見せると「使ったことある、知っている」の声があがった。

教師は見えやすいように濃紺のワンピース姿で、赤・黄色のリバーシブルの帯を自分の胴に巻いて結び方を説明した。その後、DVD で再度復習させた。教師はプリントをみながら理解するように促したが、プリントをマークしながら DVD を見ていたのは数名で、最後までプリントを見ている生徒はいなかった。しかし、全体としては、説明をよく聞いており、興味の高さが伺えた。

実習の前に、帯は借り物であるので大切に使うよう指導した。出席番号順でペアを組ませて、「一人で結べる」を目標にするのでペアはアドバイスをするのはいいが、手は出さないよう指示した。しかし、ペアにかなり手伝ってもらっている生徒、さらにはペアが全部やってしまっている組もあった。全員が一通りトライし完成したが、さらに繰り返して練習する時間はなかった。TA はやり方の理解が十分でない生徒にアドバイスした。

指導においては、教師の示範、DVD 視聴、できると手を挙げた生徒を代表してやらせて見せるなどクラスによって手法を変えながら行った。最初の段階では、「自分にできるだろうか」と不安気であったが、帯結びの実習はみな楽しそうで、結べるとみな嬉しそうな表情であった。全体に本日の感想を問いかけたところ、「手とたれを入れ替えて引くところがむずかしかった。でも楽しかった。」「リボンの形をつくるのが難しい。でも何とかできた。」の声があがった。実習が 1 時間単位のために、繰り返しが十分でなかったこと、中学生の発達段階から、女子高校生よりもできる・できないの、個人差が大きいように感じた。

夏休みに本実践を活かすため、ゆかたの帯結び実践レポートを課題にとりあげた。12 名からの提出があった。一例を紹介する。

夏休み明け、3・4 時間目には、身長に近い者がペアを組んで体育着の上から、交代で着付けをした。最初に教師が、TA の学生をモデルに示範した。その後、プリントも見ながら、友だちといっしょに着てみることを指示した。ゆかたは身長に合わせて配付したが、時には大きすぎることもあった。夏休みを隔てて初めての授業で、何かと落ち着かない中であつたが、生徒たちは、はしゃぎながら着付けに取り組んでいた。

着装後には、ペアの相手とともに、三面鏡をみながらで着方について評価させ、ゆかたを味わうために、下駄を履かせて写真撮影した。3 時間目より 4 時間目の方が、明らかに時間的に余裕もあって、楽しんでいるようだった。



着付け後の写真の例

5 時間目の振り返りは担当教師に一任したが、振り返りシートにはゆかたの良さに気付く記述が散見され、着付けの体験学習によってゆかたのよさに触れることができたと考ええる。

4. 担当教師の感想

①学習を通して、ゆかたやきものについての知識はある程度身に付けることができたと感じている。時間が許せば、和室で歩いたり座ったりといった経験をすることで、より日本の伝統文化への理解が深まると思われる。

②「ゆかたを着てみる」というレベルは達成できたが、ゆかたをひとりで着付けしなければならぬ動機付けが必要と感じた。中 3・高 1 では海外への夏期短期研修でホームステイする生徒もいるので、夏休み前に実践できればより有効と考える。

③普段扱っていないゆかたを一人で着られるように指導するには、授業終盤、着付けテストを課しないと、身につかないように思う。本校の生徒は和服に対する知識はほとんどないため、知識や技能を定着させるにはそれなりの時間をかけないと難しい。

④教員一人ではとても 42 名の生徒の指導は困難と感じた。今回は TA が 1～2 名いたので何とか進行できたが、TA なしでは混乱をきたしたと思われる。

⑤私自身ゆかたにふれるのは、大学の被服実習でゆかたを縫い着用して以来である。授業実施前には、自宅で DVD を参考に何度も着付けを練習した。DVD を一時停止し、鏡に姿を映し確認しながら着付けを進めると実践しやすかったと感じた。(注：この時期には DVD がそのようにできていなかった) 生徒全員のゆかたが調達出来、DVD と同時進行で説明を加えながら着付けを習得させる方法もとれると考える。

1 着物について知ろう

着物の意味

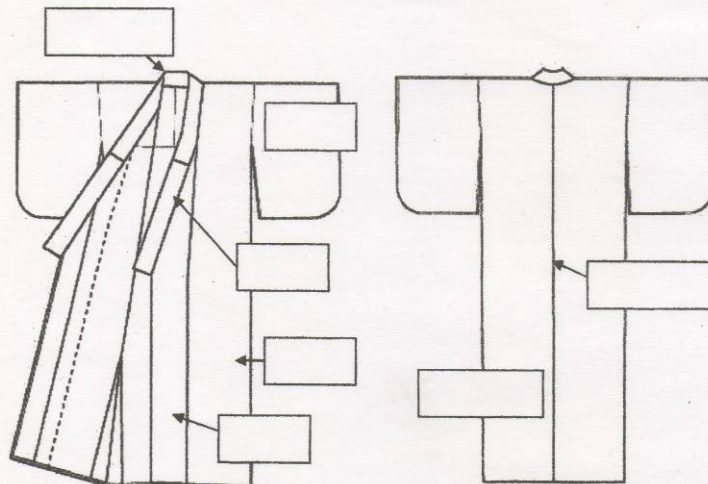
「きるモノ」(着る物)という意味。

本来は単に「衣服」を意味する語で、洋服が日本で普及する以前は、日本人は衣服一般を「着物」と呼んでいた。しかし、明治時代以降、洋服を着る人が日本で増え始めたため、洋服と区別するために日本在来の衣服を和服と呼ぶようになった。

着物の種類

礼装の着物 (冠婚葬祭)	正礼装	黒留袖、振袖、喪服など
	準礼装	色留袖、訪問着、色無地など
	略礼装	色留袖、訪問着、付下げ、江戸小紋、色無地など
礼装以外の着物	外出着	小紋など
	街着	紬など
	家庭着	ウールの着物、浴衣など

着物の部位の名称を知ろう



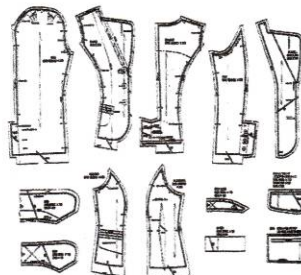
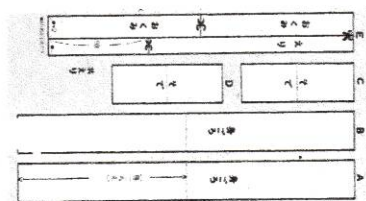
着物の構成

() 構成 <例>浴衣

- ・ () 裁ち
- ・ 平面的形状
- ・ 大きなパーツで縫い直しがしやすい。

立体構成 <例>ジャケット

- ・ 曲線を縫い合わせる。
- ・ 立体的形状で体に合わせる。
- ・ 細かなパーツ



<実習> 着物の構成を紙で再現してみよう!

貴人が麻の着物を入浴時に着用したとされる湯帷子（ ）が由来とされ、その後湯上りのくつろぎ着となり、現在の浴衣になった。

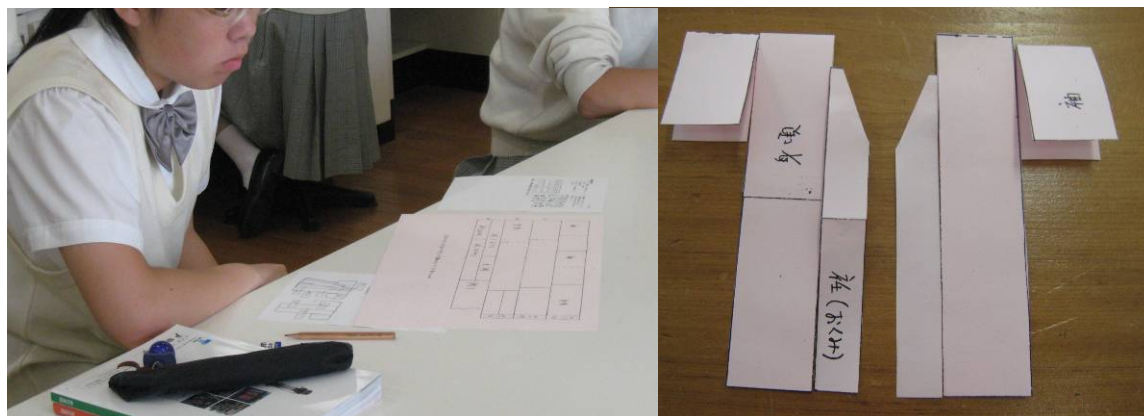
浴衣は、汗取りとして下着（肌襦袢、裾除け）を着用し、足元は裸足に下駄を履く。帯は半幅帯（ ～ cm）が多く用いられる。

浴衣の柄として、秋草、()、()、流水、団扇、歌舞伎柄がある。

① 袖の形 男物… () → 袖が縫い閉じてある。
女物… 袖の振りが開いている。

② 帯の結び位置 女物は帯の幅が広く、位置も高い。

③ 身丈 男物… おはしりがない。
女物… おはしりがある分、身長ほどの長さがある。



紙でミニチュアのきものを組み立てる

2010年 9 月 日

自己評価シート

あなたの番号・名前 番

ペアの人の番号・名前 番

1. ペアの人といっしょに着てみよう。そして着方の出来をチェックしよう。

チェックは、鏡とボディをみていないに！	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
1. 腰紐（こしひも）をきちんと結べている	1	2	3	4
2. おはしょり全体をきれいに整えられている	1	2	3	4
3. 上半身の背中心がまっすぐになっている	1	2	3	4
4. えりが5cm程度抜けている	1	2	3	4
5. 胸元（えり）の合わせ具合がちょうど良い	1	2	3	4
6. 後ろすそが地面と平行になっている	1	2	3	4
7. 帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない	1	2	3	4
8. 帯のリボンの形が整えられている	1	2	3	4

2. 写真撮影をしたら、近場を散歩して、着替えをしてから、以下を記入しよう。

ゆかたはペアの人がたたんであげよう。

- ペアの人やその他の人からどのような言葉がけや注意を受けましたか。

・着た姿についてほめられたこと

・注意を受けたこと

ペアの人はどれくらい手助けしましたか	手伝った	相談を受けた	手伝わなかった
1. 腰紐を結び	1	2	3
2. おはしょりを整える	1	2	3
3. 帯を巻く	1	2	3
4. 帯を結び	1	2	3
その他(具体的に)			

あてはまるものに○をつけてください。	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
9. 背筋がのびて、姿勢がよくなった	1	2	3	4
10. 歩き方が変わった (どのように)	1	2	3	4
11. 歩きにくかった	1	2	3	4
12. 帯がきつかった	1	2	3	4
13. 気持ちが高まった	1	2	3	4
14. 優雅な気持ちになった	1	2	3	4
15. いつもと違ってみえる自分になった	1	2	3	4
16. きものの良さを感じた	1	2	3	4
17. 時間が経っても着くずれず維持できた	1	2	3	4
18. 立ち居振る舞いが自然体で行えた	1	2	3	4
19. 今後、ゆかたやきもので外出したい	1	2	3	4
20. 着付けが楽しかった	1	2	3	4
21. 着付けが難しかった (どのような点)	1	2	3	4

振り返りシート

あなたの番号 _____ 名前 _____

1. あてはまるものに○をつけてください。

	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
1. ゆかたやきものに関心がもてましたか	1	2	3	4
2. ゆかたの着付けに関心がもてましたか	1	2	3	4
3. 帯の結び方が理解できましたか	1	2	3	4
4. ゆかたを一人で着ることができますか	1	2	3	4
5. ゆかたをひとりでたたむことができますか	1	2	3	4
6. またゆかたを着てみたいです	1	2	3	4

2. 夏休みにゆかたを着てみましたか （当てはまる方に○をつけてください）

1. はい

2. いいえ

・ はいを選んだ人は帯を結んでみましたか

・ いいえの人はどこかへ着て行きたいですか

1. すべてやってもらった
2. (トライしたが) うまくできなかった
3. (一人で) できた
4. その他 ()

- ↓
1. はい
 2. いいえ

3. 一連のゆかたの学習を振り返ってみて
ゆかたを着てみて気がついたこと

{	楽しかった点	}
{	反省点	}

4. 今後、着付けを練習したいですか （当てはまる方に○をつけてください）

- | | | | |
|-----------|--------|------|---------|
| ① | ② | ③ | ④ |
| あまりそう思わない | そう思わない | そう思う | とてもそう思う |
- その理由：

{		}
---	--	---

5. きものを着たことがない人や外国の人にゆかたの優れている点を教えてあげて下さい。

{		}
---	--	---

- あなたが感じたゆかたの優れている点と欠点を教えてください

優れている点

欠点

夏休み課題： バジルを利用した料理レポートまたは浴衣の帯結び実践レポートの例

12名の生徒が提出した。以下は一例である。



【考察・感想】

今まで 子供用の浴衣しか着たことがなかったのので、大人用はこんなにたくさん必要な物があるのだとびっくりしました。

また思っていたよりも動きづらく、きつくしぼるので、苦しかったです。

動画や説明を見ていると、簡単そうに思えますが、帯を結ぶ時も浴衣をおさえ整えながら着なければならぬし、一人で着るのはとても大変でした。

私は近所の夏祭りにいくために着ました。

昔はサンダルをはいていたけど、今回はゲタをはいたのでとても疲れてしまいました。

初めてだったので後ろのしめを直したり、形を整えながら着るのはなかなか難しかったです。

でも、初めてにしてはまあまあかなと思いました！

浴衣について調べてみると、帯や結び方の種類が他にもいろいろあると知り、興味がわいたのを実践してみたいと思います。

また、日本の文化である着物についてあまりにも知らなかったのので、興味をもって見てみたいと思います。

【家の方のコメントおよびサイン】

今日は、お母の20年前の浴衣を利用いたしました。

日常、着物にふくむ絆会がたい客をだすか、せめて夏の浴衣ぐらいは、

母も、これから楽しんでみたいと思いました。

Ⅱ-2. 少人数制を導入した授業の展開

千葉県立流山南高等学校 仲田郁子
茨城キリスト教大学生生活科学部 扇澤美千子

1. 千葉県立流山南高等学校の特徴と学習環境

本校は、昭和 58（1983）年 4 月に開校した、創立 29 年目を迎える県立の普通高校である。最寄駅からは徒歩 5 分と大変交通の便がよく、多くの生徒は地元の流山市や近隣の松戸市、柏市などから通っている。校訓は、「考燃而飛」で、「よく考え、情熱を持って行動し、そして飛躍する」を掲げている。基本的な生活習慣を大切にし、規則や規律を守ろうという意識を育てて、学習や部活動に伸び伸びと打ち込み、進路を含めて自分の夢を実現することを目指している。

男女の割合はほぼ 1：1 で、部活動が盛んである。進路状況は、大学進学が約 20%、専門学校が同じく約 30%で、ほとんどが推薦か A0 で入学を決めており、残りの約 50%が就職・その他である。

家庭科は、1，2 年で家庭総合を学ぶようになっており、3 人の教員（専任教諭 1、常勤講師 1、および非常勤講師 1）が配置されている。平成 23（2011）年度から、初めての試みとして 1 年生での少人数授業が認められ、1 クラス約 40 名を 2 分割して授業を実施している。これは特に実習授業において、個別指導の充実を図るためのものであるが、今回の着装の授業も 1 クラスを除いて分割による少人数で実施した。

2. 指導の対象と内容

- ・千葉県立流山南高校 1 年生 4 クラス（2 分割のため 1 授業 20 名程度、指導者は 1 名）
- ・指導時期 平成 23（2011）年 6 月
- ・指導単元 生活文化の伝承と創造
- ・教科書 家庭総合 明日の生活を築く（開隆堂）

3. 指導目標

- (1) 日本の伝統的衣装である和服の基本構造を知る。
- (2) 形の良い着姿を知り、ゆかたを自分で着装できる。
- (3) 和装文化に親しみを持ち、生活の中で活用しようとする意欲を持つ。

4. 指導計画（4 時間）

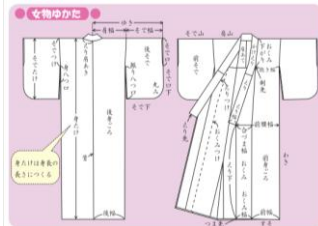
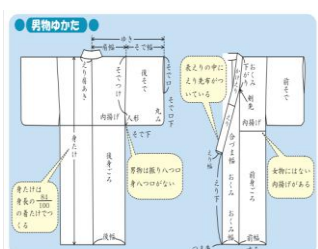
- (1) ゆかたの基本構造と部分の名称を知る。（1 時間）
- (2) 2 人 1 組となり、ゆかたを着用してみる。たたみ方を知る。（1 時間）
- (3) 前時の学習内容を思い出し、ゆかたを着用する。帯を結ぶ。（1 時間）
- (4) 写真撮影し、振り返りのワークシートを記入する。たたむ。（1 時間）

5. 評価の規準

- (1) 和装文化に興味を持ち、自分で着てみようとする意欲が持てたか（関心・意欲・態度）

- (2) 形のよい着姿が理解でき、工夫できたか（思考・判断）
 (3) 自分で着装できたか、たたむことができたか（技能・表現）
 (4) ゆかたの基本構造と部分の名称を理解できたか（知識・理解）

6. 授業の展開（計4時間）

段階	学習活動	時間	学習内容と教師の支援	■ 評価 ○資料・機器
1時間目 (普通教室)	導入	10	浴衣を着てみたいか、着たことはあるかなど発問。意識調査用紙に記入。 目標提示：自分で着る。和装文化（きもの）を知る。興味を持つ。	○浴衣セット（男女） ボディまたはハンガー ○意識調査用紙
	浴衣の構造や名称を知る	15	男女それぞれの浴衣をハンガーにかけて黒板上部からつるす。 プリント配布 浴衣の構造・各部名称の説明 洋服との違いなども組み込む。 ⇒ ワークシートに各部名称を記入させる。	○ワークシート（名称）
		10	身ごろ、袖、えり、掛け衿、おくみなど 男女の違い：教師が浴衣をはおりながら説明。 身丈の違い、おはしより、身八つ口（手を出してみせる）、衿（えもんの抜き加減）、帯板、伊達締めなど ⇒ ワークシートに男女の違いを記入させる。	■きものの部位・名称男女の違いが分かる。 
	モデル生徒の着装を見る	10	教師がポイントを簡単に説明しながら、モデル生徒に体操服の上から着付ける。	
	次時の予告	5	被服室または社会科教室への移動を指示、実習内容を予告。	■着装に興味を持つ。 (2分割のため)

2 時間目 (被服室または社会科教室)	帯結びの実習	5	男女で別れて着席する。	○ビデオカメラ、スクリーン、プロジェクター ○ゆかた (2人に1枚) ○女子用資料 ○雑誌ページのコピー ■積極的に着装する。 ○着装時、見えにくい部分(裾線の決め方など)をビデオカメラで撮影し、プロジェクターでスクリーンに投影する。 ○男子用資料 ■たたみ方を理解する ○ビデオカメラでたたみ方を撮影し、スクリーンに投影する。
	説明と示範	10	実習内容の説明：男女別に説明と実習をすること。 2人で1枚のゆかたを使い、交替で結ぶこと。 ＜男子＞ 女子に資料配布。 男子が先に説明を受ける。その間、女子は資料などを読んで待つ。 男子の着付けの説明を聞く。写真をみて、形よい着姿について考える。	
		15	＜女子＞ ・教師の指示により、2人ひと組になる。教師の示範に従って一人ずつ着装する。一人目が終わったら、交替して実習する。 ・この間、教師は生徒の様子を見回りながら、個別指導をする。 ・終了した男子は男子用資料を読む。 ・教師のたたみ方を見る。	
	たたみ方	5	・2人ひと組でたたむ。終了後は教師の確認を受ける。	
	片づけ・次時予告	5	・次時は帯結びを行うことを予告する。	

	学習活動	時間	学習内容	■ 評価 ○資料・機器
3 時間目	浴衣の着装実習	5	・男女で別れて着席する。 ・授業の流れを理解する。(着る、帯結び、写真撮影)	○ゆかた、帯、小物 ○鏡を設置 ○着装を整えるポイントとたたみ方の資料を配布
		10	・男女とも2人組になる。ゆかたを選ぶ。 ・女子は前時を思い出して、ゆかたの着装を行う。男子は帯結びの説明を聞く。	

3時間目 (被服室または社会科教室)		35	<男子> ・教師が示範しながら、男結び(貝の口)を指導する。 ・結び方、形良い結びあがりを知る。 ・ゆかたを着た後、自分で結ぶ。 <女子> ・女子の着付けについて、教師が机間指導を行う。 ・一通り着装が終了したところで、生徒を集める。 ・教師の示範を見ながら、一人目が文庫結びをする。 <男女とも> ・終了した生徒から写真撮影。 ・2人目が交替して実習する。	■男結びのしかたと美しい形を理解する。  ○デジタルカメラによる撮影
4時間目 (同上)	浴衣のたたみ方を理解する 振り返り 終了	20 15 10 5	(前時からの続き) ・2人目が交替して実習する。 ・終了した生徒から写真撮影 ・自己評価・友達評価シートに記入する。 ・2人とも終了したら、浴衣をたたみ、小物を片づける。 ・教師の確認を受ける。 ・チェックシート配布、記入 ・チェックシート回収 ・終了、挨拶	○デジタルカメラによる撮影 ■形よい着姿を理解し、工夫する。 ○アンケート調査



7. 授業を終えて

(1) 評価に関連して

高校生、特に女子はおしゃれアイテムとしてゆかたに強い関心を持っている。和装文化にあまり興味はなくても、ゆかたは「かわいい」ので着てみたいと思い、自分で着られればなおよいと捉えているようである。そのせいか、今回のゆかたの着装においても、授業に対する態度はかなり積極的であり、意欲を持って学習したと評価している。

えりの合わせ方や裾すばまりのシルエットなど、形良い着姿については、写真を用いることにより、理解を深めることができたと思うが、実際にそのように着るためには、やはり時間不足であった。

女子と比べると、男子の意欲はやや低いと思われたが、「上手に着ているね、なかなか似合ってるよ」と声をかけた男子生徒が得意気になかなか脱がなかったことなど考えると、ゆかたを着ることを楽しむ気持ちはあるようだった。

部分の名称はワークシートでチェックし、期末試験にも出題すると予告して定着を図ったが、試験時の正答率は概ね良好であった。ゆかたを着るにも、正しくたたむにも、部分の名称の知識は欠かせないが、繰り返し着用できれば一層定着するのではないかな。

たたみ方は、1、2回では覚えられない生徒も見られた。

全体に時間不足は否めないが、ゆかたを着てみたいという意欲を高め、着装を通じて和装文化に興味を持たせるとする目的は概ね達成できたと考えている。

(2) 男女一緒に指導について

本校のような公立の共学校では、男女一緒に指導を想定した授業構成が求められる。空調設備はなく、視聴覚機器設備も不十分で、パワーポイントの利用も難しい環境であるが、本校での実施が可能であれば、他のどの学校でも可能であると捉えられる。

実施してみて、男女一緒に指導は十分に可能であると思われた。普通教室の講義では、全く問題はなく、むしろ男女の和服の構成上の違いを理解するには、共学が望ましいと考える。

着装の授業では、男女を教室の左右に分ける方法をとった。教師がどちらか一方の説明をしている間は、他方は自習することになる。これも授業の始まりと終わりに全員を把握することにより、十分に実施可能であると思われた。ただし、自習の内容は生徒の特性によって異なると考えられる。今回準備していただいた着付けのDVDは、着装の経験がほとんどない本校生徒にはむずかしいと判断した。感想を踏まえて記入できるワークシートが望ましいだろう。

また教師は、着付けの難易度の高い女子生徒に関わる時間が長くなりがちである。女子生徒の個別指導の間も、男子生徒への目配りを欠かさないように心がけたい。

(3) 少人数授業の効果について

今年度から、1年家庭総合は1クラスを2分割して履修させることになった。徹底した個別指導によって、技能の定着を図るためである。ゆかたの着装も、昨年は1人の教員が40人を対象に指導を行ったが、今年度は20人程度で実施することができた。

教師の立場からは、かなり大きな違いを実感した。室内にゆとりが増し、生徒に目が行き届く。教師の目の届かないところで、適当に済ませてしまう生徒がいなくなった。また男女それぞれ10人程度であるので、個別指導が必要な場面でも、全員を確実に指導するこ

とができ、理解度を高めることができたと考えられる。生徒の満足度も高まったのではないだろうか。

(4) 視聴覚機器について

今回、ビデオカメラで撮影した映像をプロジェクターでスクリーンに投影した。示範では見えにくい裾のラインや、遠くからでは見えにくいたたみ方など、生徒はよく見ていたようである。既製の DVD とは違い、リアリティがある点が生徒の興味を引くようであった。この程度の設備であれば、校内でも十分活用できると思われ、今後の参考としたい。

(5) その他気付いたこと

女子に多かったが、気にいった（かわいい）ゆかたを着たい、似合う帯を組み合わせたいという意欲が強く、着装の練習のためであっても色柄デザインにはかなりこだわりが見られた。

男子の場合は対丈のため、体型にあわないゆかたは着用できない。特に身丈が長ずるとひきずってしまい、とても着にくかった。体型にあわないと着姿は美しくない。特に体格がよいと普通サイズのものが着用できないこともある。準備できるゆかたには限りがあるので、事前の確認が必要である。

8. 終わりに

高校生はゆかたに興味を持っており、またおしゃれにも敏感な年齢であるせいか、大変意欲的にゆかたの着装に取り組んだ。体格的にも大人に近づき、高校の家庭科でゆかたの着装を学ぶことは、意義が大きいと思う。また指導者としても熱心に取り組む高校生を目の当たりにし、充実感を味わうことができた。さらに少人数展開が実現し、確かな手ごたえを感じることができた。

知識と技能の一層の定着を目指して、今後も検討を続けていきたい。また今回の授業をきっかけとして、生徒たちがゆかたを着たいという意欲を継続してくれることを願っている。

大変貴重な機会をいただいたことを心より感謝いたします。

9. 公立共学高等学校での授業実践に関する総括的考察

千葉県立流山南高等学校では家庭科担当教員をはじめとする学校全体の理解と協力のもと、2010 年度、2011 年度の両年に渡り和装文化やゆかたの着装に関する授業実践を行う機会を得ることができた。同校は、公立の共学校であることから、昨年度は、1 クラス 40 名程度の男女を同時に指導することを想定した授業構成が求められたが、今年度は担当教員が増えた事によってゆかたの着付けの実践授業はクラス分けをして 20 名程度の少人数指導の導入が可能となった。（男女比が著しく異なったクラスについてはクラスを二分割することができなかったため、指導者 2 人体制の T.T. 学習形式を取った。）授業の進行に関してはこのように少人数体制をとることで、授業の流れや生徒の取り組み、理解、実践にどのような影響をもたらすかを昨年度の実践と比較・検討することが目的の一つである。パワーポイント、DVD 等の利用は難しい環境であったが、視聴覚教室、社会科教室の設備を利用し、着方・たたみ方等の教師による示範をスクリーンに拡大投影することも試みた。また、生徒の理解を補助する資料の提供（プリント、写真等）、拡大投影機器の利用によっ

て生徒の取り組みがどのように変化するかも検討した。

昨年度は、ゆかたは1班4名程度で1枚とし順番に着ていくこととしたが、今年度は、着装実践・体験に重きをおくこと、ゆかたの準備枚数等を考慮し、1班4名程度、2人で1着を順番に着ていくこととした。グループは男女別、出席番号順とした。着装実習の準備として体操服着用を指示した。

また、昨年度の実践を踏まえて、生徒に配布する資料として着付けの順番、帯の締め方の順序、美しい着姿のチェックポイント、たたみ方を記述したプリントを作成した。さらに、写真資料として雑誌から男女の着姿をコピーしたもの、ゆかたの着装を整えるポイントをまとめたパワーポイントの資料、たたみ方の図解プリントなどを班ごとに準備した。これにより、教師の説明を聞きながら作業の手順を整理し、視覚的にとらえることが可能となった。＊使用したプリント等は資料として添付。ワークシート、アンケート等は吉祥事例の資料を参照。＊

授業への取り組みはどのクラスでも良好で、生徒の表情は明るく楽しそうな様子だった。特に印象的だったのは男子生徒にも熱心に取り組む姿が見られたことで、真面目な生徒が鏡の前で繰り返し練習するばかりではなく、ほぼ全員がどこか楽しげだったことである。かっこよく着る、おしゃれに着こなすといったことに非常に敏感な年頃であるだけに、ゆかたという新境地に踏み込むことへの期待感が大きかったのではないだろうか。問題点としては、ゆかたのサイズが合わないためにきれいに着こなすことができなかった生徒が出てしまったことである。男子生徒のゆかたのサイズ調整は実習のポイントのひとつであり、事前の準備が重要である。

また、少人数制の授業の効果も大きかったと感じている。40人の生徒を1人の教師が指導するには、生徒の関心・意欲を維持するにも、教室全体の動きを掌握するにも相当なエネルギーが必要であったが、少人数になったことで教師の目が行き届き一人ひとりに声をかけ適切な指導、アドバイスをしながらゆとりをもった授業進行が可能になった。それによって生徒の取り組みが昨年よりも向上したものと考えられる。授業で実施した調査からゆかたの着付けの自己評価項目について分析すると、着装技術の自己評価、たたみ方の学習、楽しさ等どの項目も少人数学習を実施した2011年度の方が優位な値となり、少人数導入によって生徒が技術面のみならず、満足感、楽しさを感じながら取り組むことができたことを示唆する結果が得られた。着装のできばえについても、少人数制のクラスは着付けの技能も向上したことが確認された。(埼玉大学紀要掲載 2012年9月)

授業は、着装を練習する機会が多ければ多いほど上達するのは明らかなので、全員が複数回の実践ができるようにするのが望ましいが、時間的に厳しいのが実情である。しかし、ゆかたの着装を通して和装文化にふれ、楽しい、にあう、カッコイイ等の体験学習によって日本の伝統文化に対する生徒の興味・関心を喚起することができればこの授業の意義は大きいといえよう。

★着つけの順番を知ろう

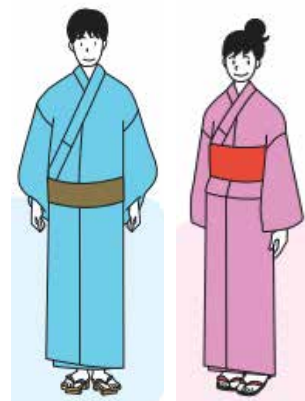
- ① ゆかたをはおり、背中心にゆかたの背縫いを合わせる
- ② 丈を合わせる
- ③ 身頃の幅を調節しながら、下前・上前身頃を合わせる

男子

- ④ えりを整える
- ⑤ 腰ひもをしめる

女子

- ④ 腰ひもをしめる
- ⑤ おはしりを整える
- ⑥ えりを整える
- ⑦ 伊達だてしめをしめる

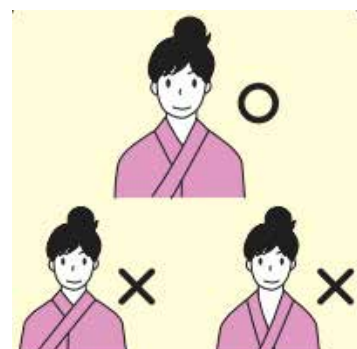


★帯の締め方を知ろう

文庫結び（女子）	
① て先を二つ折りにして、右わきから60 cm 残す ② て先を上にして帯を二巻し、たれを上にして結ぶ ③ たれを胸幅くらいに折りたたみ、中央でひだを寄せる ④ て先を結び目に通し、リボンのひだの位置で下から上にまく ⑤ て先の巻き残りは帯の内側に入れる	
貝の口結び（男子）	
① て先の長さ(30cm)を決める ② 腰骨の位置に帯を2〜3回巻く ③ たれの長さを左わきで調節し、残りは内側に折り込む ④ てを下に、たれを上を交差させてから結び上げる ⑤ て先を斜め上に折り返し、たれをての下から上に結びあげる	

★チェックポイントを知って、美しい着姿をめざそう

1. 胸元（えり）の合わせ具合がちょうど良い
2. おはしり（前と後）をきれいに整えられている（女子）
3. 上半身の背中心がまっすぐになっている
4. 後すそが地面と平行になっている
5. 帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない
6. 帯のリボンの形が整えられている（女子）
7. 帯結びの形が整えられている（男子）



きつすぎる

ゆるすぎる

★たたみ方を知ろう

- ① えり肩あきを左にし、ゆかたをのばして広げる
- ② 右身頃をわき線で折りたたみ、次におくみ線で手前に折り返す
- ③ えりを内側に折り、左身頃のおくみを右身頃のおくみに重ねる
- ④ 左身頃のわき線をもって手前にひきよせ、右のわき線に重ね、背縫いの折り山を整える
- ⑤ 左袖を袖つけから身頃の上に折り返す
- ⑥ すそを持ち、えり先の下で身丈(みたけ)をふたつ折りにする
- ⑦ 全体をそのまま裏返し、右袖を身頃の上に折り返す

Ⅱ－3. ゆかたの着装を通して和の文化に触れる授業

横浜国立大学教育人間科学部 堀内 かおる

グローバル化が進展し、異文化が身近に感じられる今日、私たち日本人は、日本文化についてどのくらい理解しているだろうか。2008年に改訂された中学校学習指導要領では、技術・家庭科家庭分野の学習において、伝統的日本文化の一つであるゆかたの着付けを取り上げることができることになった。学習を通して、「和」の生活文化を生徒に体験させ、日本の伝統文化に親しむ機会を与えられようにしたいものである。その際、偏狭なナショナリズムの強化ではなく、自国の文化の独自性ととも生活様式の変化やグローバリゼーションに対する意識を喚起することが、学習の中では重要になるであろう。

そこで、本節では、「和」の生活文化を題材にした学習の在り方について提起した授業を紹介する。

1 授業の概要

授業の概要は以下の通りである。本時の学習指導案を、別表に示す。

実施時期：2010年7月、45分2単位時間続きで実施された授業

授業実施学年：第3学年

実施校及び授業者の状況：

川崎市立金程中学校。同校は、川崎市内の中でも閑静な住宅地に位置し、落ち着いた学校文化を持つ。技術・家庭科家庭分野担当教師は、20年以上のキャリアを持つベテラン家庭科教師であり、特に和の文化（きもの、茶道、書道等）に造詣があり、自身もきものを好んで着用する習慣があった。

授業のポイント：

生徒一人1着のゆかたが用意され、全員が着てみるという体験をした。しかし単にきものを着てみることを目的とするのではなく、「『和』を五感で味わう」というという目標のもと、着付けを通してゆかた（和服）について知った後に、「楽しむ」という柱のもと、実際に日常の生活行為を試みた。日頃意識することの少ない「和」を体感することが授業のねらいである。

ゆかたはS、M、L、LLのサイズが全員分用意され、自分の身長に合ったものがいきわたるように、あらかじめ準備されていた。生徒は女子同士、男子同士で二人組になって背の順に並んで着席し、机上の袋の中には、ゆかたと帯などがセットになったものが置かれていた。被服室中央には柔道で使用される畳が運び込まれ、教室前方には和室のコーナーが設けられ、いつもとは異なる実習室の雰囲気となっていた。

このような授業空間をつくることによって、生徒が教室に来た時からいつもとは異なる

「和」の文化を意識させるような設定がなされていた。これもすべて、生活文化としての「和」に触れる・「和」を楽しむという本時のねらいに即したものであった。生徒たちは交互にゆかたを着装し、一方の生徒は、着付けを手伝っていた。初めは戸惑っていた様子の生徒たちであったが、楽しんで着付けを行っていた。



図 1 授業開始時の着席状況



図 2 教室環境 1



図 3 教室環境 2

平成22年7月15日

学習指導略案

1. 日時 平成22年7月15日(木)
1校時 8:50-9:35 2校時 9:45-10:30
(夏休み前の45分授業 技術と交換をして二時間続き)
2. 場所 被服室(特別教室棟3階)
(畳12枚を格技室より運び入れる。内2畳は試着コーナーに和室跳えに使用)
3. 学年・組 第3学年1組 (男19名 女20名 計39名)
4. 本時の目標 「和」を五感で味わう
5. おもな流れ
*前日に事前アンケート配付。翌朝に係が回収。
*当日は、体操着に着替え、身長順に並んで来室。

学習の流れ	時間	学習活動	○指導上の留意点●評価
本日の流れを知る 着付け 知る	5	*身長順のに着席する。 ・「和」を五感で味わう説明を聞く。	○借物であることを伝え、大切に扱わせる。 ○WSを配布し、昨年の調理実習時と同じであることを伝え、後でベスト5を選ぶことを考えながら書くようにする。 ・事後アンケートの実物提示
	15	・ペアで伊達締めまで行う。 *身長順にA,Bに分かれる。 *男子(浴衣、伊達締め、帯) 女子(浴衣、腰紐、伊達締め、帯)以外はしまっておく。	○人台に着せながら、説明する。 ○大切な用語を押さえる。 <背中心・裾・おしり・衿・衽> ●メモ欄に記入している。(知)
	5	・「和」を知る。 *全員座り、話を聞く。	お互いに着崩れがないかを見合う
	15	・ペアで帯を付ける。	●WSの活用して、ペアで帯結びを進めることができる。(技)
	5	・写真撮影 *男女別に写真を撮る。	・カメラの用意

学習の流れ		時間	学習内容	○指導上の留意点●評価
楽しむ	挨拶をする	5	・正座をして、挨拶をする。 *内側列→外側列	●メモ欄に記入している。(知) ・「香」、「琴の音」
	短冊を書く	15	・筆で短冊を書く。 *外側列→内側列	・短冊(人数分)、筆(16本) ○短冊の書き方を説明する。
	浴衣をたたむ	15	・浴衣のたたみ方を知り、 たたむ。 *ペアでたたみ方を実習し、確認しあう。	●WSを活用しながら、ペアでたたみ、確認することができる。(技) ○逆勝手(生徒側から見た向きで)説明する。
	まとめ	10	・アンケートを書く。 ・五感ベスト5を発表し、意見を交換する。 ・「つながる」を書く。	・アンケート用紙 ●五感で感じたことをまとめる。 「つながる」が書ける(工)

2. 授業後の生徒の意識

以上のような授業の後、生徒たちは事後アンケートを記入した。図4にその結果を示す。事後アンケート結果から、男女とも、大変興味を持って意欲的に学んだことが推察された。

「ゆかたやきものに関心が持てた」「ゆかたを着てみて気分が高まった」と回答した女子は100%を示した。男子でも、80%と高率を示した。「ゆかたを着ると普段と違う気持ちになる」者も、男女とも約9割を占め、「またゆかたを着てみたい」という女子は、100%に迫る高率だった。授業を通して、ゆかたに対する興味が高まり、新鮮な気持ちを抱いた生徒が多数みられたことがうかがえる。

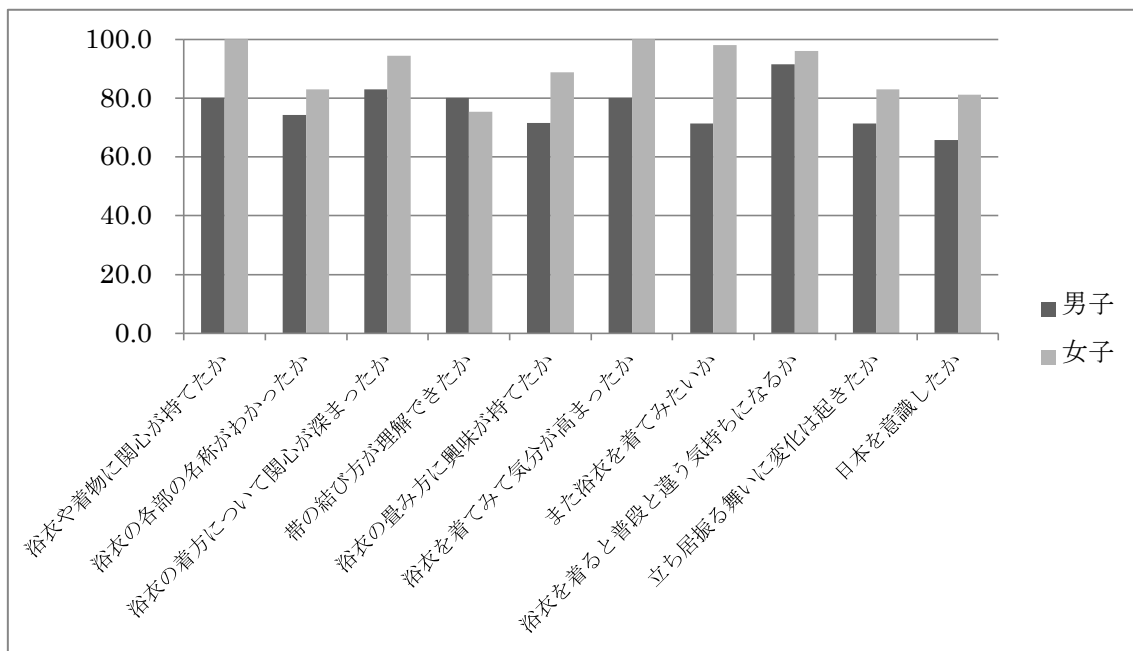


図4 授業後の生徒の意識

本授業では、「五感で『和』を感じる」という目標のもと、「見る」「聞く」「触る」「嗅ぐ」「心で味わう」という5つの柱が立てられ、生徒は感じたことをワークシートに記入した。まず、「見て感じたこと」としては、生徒はゆかたの生地や柄の特徴、男物と女物の柄の違いなどに着目していた。「聞く」という観点からは、着付けの時やゆかたを着て歩いた時の衣擦れの音を指摘した生徒が最も多く、「さわさわ」「シュッ」というような擬音がワークシートに記入していた。

また、ゆかたの各部位の名称や、教師の説明を聞いて初めて知ったことについて、まとめている生徒もいた。ゆかたの生地に触れてみて感じたこととしては、肌触りのよさと襟の部分が少し硬めであることや、帯は張りのあるしっかりした生地であることなどが挙げられていた。

さらに本授業では、「和」の文化を「心で味わう」という観点が生徒に提示されていた。その結果、生徒たちは、「ゆったりした気分」「心が落ち着く、静まる」「気持ちがひきしまる」「わくわく、楽しい」「昔の人の気持ちを感じる」「『日本人』を実感する」というような感想を述べていた。

多くの生徒たちにとって、「和」の文化というものは、日常的に体感しているとはいえないものであり、正座をして挨拶をするといった習慣は、ほぼ無いといっても過言ではない。むしろ、「和」の文化がある種の異文化体験であるかのように、生徒たちには受け止められたのではないだろうか。しかしながら、それだからこそ、日本人としてのルーツを再確認する貴重な機会として、受け止められていたと推察されよう。

生徒たちは、普段着なれない和服であるゆかたを着てみることによって、いつもとは異

なる「日本人」としての自分を感じていたようであった。生徒が感じた「和の文化」とは、
どういう文化なのか、さらに学習を深める必要性が認められた。

3 授業に対する教師の思い

授業後に、本時のねらいと教師の思いについて、インタビューを行った。
先述のように、授業者である教師は和文化に対する造詣が深く、母親から受け継いだきもの
を所有し、母親が好きだったきものの思い出があった。

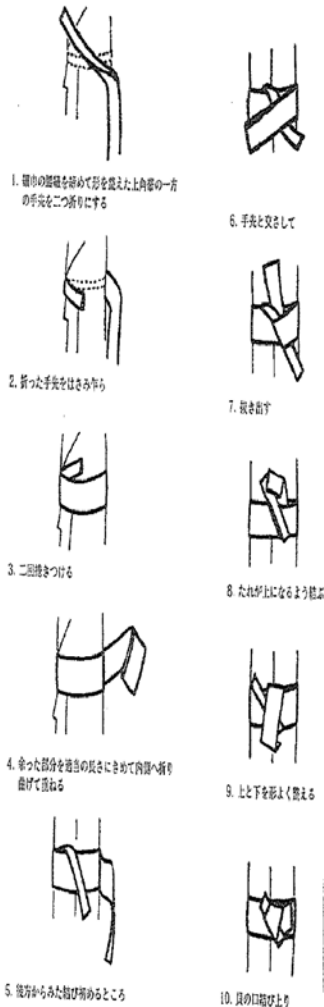
この教師にとって「和の文化」とは、「心の余裕」であるとみなされており、本時も「心
の豊かさを追求する授業」として位置づけられていたことがインタビューから明らかにな
った。

授業者である教師にとって、和の文化とは伝統であり、伝統を継承する衣服であるゆか
たを着こなすには、「心意気」が必要だと語っていた。生徒たちに、この「心意気」が十
分に伝わったかどうかは明らかにすることはできなかったが、ゆかたひいては和の文化に
対する大きな興味・関心を喚起することに成功した本時は、生徒たちにとって、今まで気
にすることのなかった「新しい自分」が感じられた貴重な時間だったように思われた。

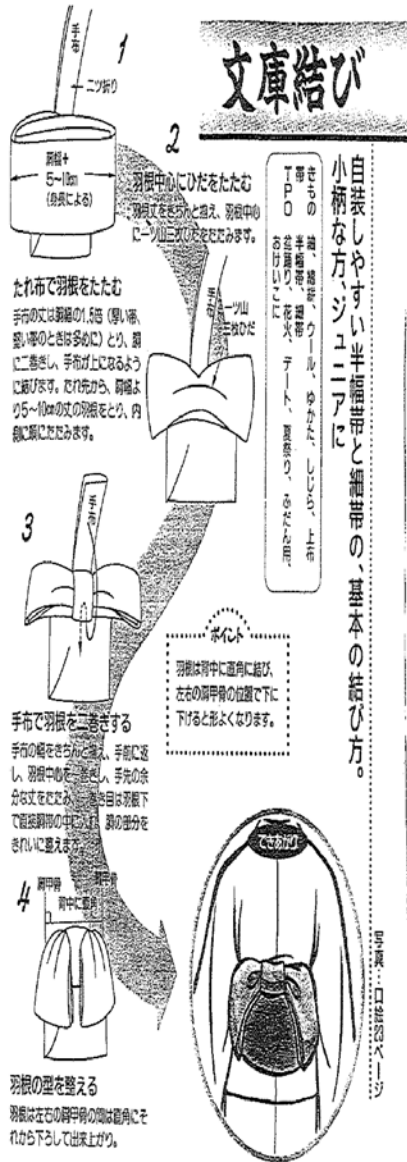


図 5 生徒たちのゆかた着装

貝の口の結び方



文庫結び



年 組 番 ()

五感メモ

感覚	メモ
見る	
聞く	
触る	
嗅ぐ	
心で味わう	

ワークシート

Ⅱ-4. 文化伝承を手がかりとする衣生活学習 ―体験を重視したゆかたの着装実習

埼玉大学教育学部附属中学校 加藤順子

埼玉大学教育学部 川端博子・小林由実

1. 題材設定の理由

本題材は、衣服と社会生活とのかかわりを理解し、目的に応じた着用や個性を生かす着を用を工夫できることをねらいとしている。ねらいの達成のために、まずはこれまであまり意識されていなかった衣服の社会生活上のはたらきについて認識させたい。個性を表現するとともにTPOにふさわしい服装をすることは、社会で生きていく上で重要であり、礼儀やマナーにもつながることに気付かせ、工夫できるようにしたい。また、より主体的で自立的な衣生活を送るために、計画的な衣服の活用必要性についても理解させ、適切な選択ができる実践力を養わせたい。

さらに本題材では、和服の基本的な着装を取り上げることにより、日本の伝統的衣文化に関心をもたせたいと考える。流行を追うだけでなく、衣服の歴史をたどる中で和服について取り上げ、衣文化への興味・関心を高めさせるとともに、衣生活全般への視野を広げさせたい。和服は、今日では趣味や儀礼的な衣服として着用されているが、伝統文化としての価値や洋服とは異なる「よさ」についても考えさせていく。これらの学習を通し、和服のよさに気づき、自分の今後の衣生活に生かそうと工夫する態度を育んでいきたい。

2. 生徒の実態

衣生活を和服、洋服という視点からみると、普段から当たり前のように洋服を着用しているせいか、生徒にとっては日本の衣文化である「和服」については考える機会が少ないといえる。

生徒の実態を把握するため、和服に関するアンケート調査を実施した。和服（着物・浴衣）のイメージに関する自由記述で最も多かったのが、「日本の伝統の衣服」「日本独自の衣服」といった内容で、42%の生徒が日本という言葉を用いて記述していた。その他、成人式等の行事と結びつけて記述していた生徒が37%、見た目や着用感に関して記述していた生徒が30%であった。また、「和服を着たことがある」生徒は86%に上ったが、男女差が見られた。和服の中でも生徒にとって身近な浴衣については、「自分の浴衣を持っている」と回答した生徒が34%であった。さらに、浴衣への興味・関心について質問したところ、色柄には興味・関心がある生徒が多かったが、歴史、流行、帯結び、色の組み合わせ、着付け、TPOについては特に関心を示していない生徒が多数を占めた。

3. 指導観

衣服と社会生活とのかかわりについては、小学校での既習事項を踏まえ、社会生活上の機能について具体的に理解できるようにする。より理解を深めさせるために、行事や職業等の具体的な活動場면을提示するようにする。目的に応じた着用や個性を生かす着用についても、生徒にとって身近な事例や場면을提示して進めるようにする。このことによって、生徒が自分の衣服の着方について主体的に考え、生活における実践につなげることができ

ると考える。

また、和服の基本的な着装については、生徒にとって最も身近と考えられる「浴衣」を中心に取り上げる。まずは洋服と和服を比較し、その基本的構成の違いを理解させたい。その他、浴衣の歴史や各部の名称についても学習し、日本文化としての衣服という視点をもたせるようにする。表面的な知識のみに終始することなく、生徒が実感をもって日本文化を味わい、より理解を深めるために、小題材全体を通して体験的な活動を重視するようにする。具体的な体験活動として、「浴衣のたたみ方」、「浴衣の帯結び」、「浴衣の着装」を取り入れ、段階を経て浴衣への理解を深められるような授業構成とする。これらの体験を通し、衣文化への関心を高めるとともに和服のよさに気付かせ、今後の自分の衣生活と関連させて考えさせ、視野を広げさせたいと考える。

衣服に関するこれらの一連の学習を通して、多種多様な衣服の中から目的に応じた着方を考えて選択し、着用できる実践力を養いたい。また、洋服との対比から和服のよさについて知ること、受け継いでいくべき日本の衣文化の重要性や、自分のこれからの衣生活について主体的に考え、工夫できる生徒を育てていきたい。

4. 指導の対象と内容

- ・ 埼玉大学教育学部附属中学校 2 年生 4 クラス (173 名)
- ・ 指導時期と時間 平成 23 年 5 月～6 月 50 分授業 (全 4 回)
- ・ 指導単元

家庭分野 C 衣生活・住生活と自立 (1) ア・イ

題材名「衣服の選択と手入れ ～浴衣の着装を通して日本文化を知ろう～」

5. 題材の目標

- ・ 衣服と社会生活とのかかわりを理解し、目的に応じた着用や個性を生かす着物を工夫できる。
- ・ 衣服の計画的な活用に必要性を理解し、適切な選択ができる。

6. 題材の評価規準

(1) 生活や技術への関心・意欲・態度

衣服の選択、着用について関心をもって学習活動に取り組み、衣生活をよりよくしようとしている。

(2) 生活を工夫し創造する能力

衣服の着用、選択について課題を見付け、その解決を目指して工夫している。

(3) 生活の技能

既製品を選択するための情報を収集・整理することができる。

(4) 生活や技術についての知識・理解

衣服の着用、選択について理解し、基礎的・基本的な知識を身に付けている。



7. 指導計画および評価計画

計画及び評価計画	時間	ねらい	学習内容	単位時間における具体的評価規準 (概ね満足の規準)			
				生活や技術への 関心・意欲・態度	生活を工夫し 創造する能力	生活の 技能	生活や技術に ついての知識 ・理解
衣服と社会生活との かわり	1 2	・衣服と社会生活 とのかわりを理 解し、目的に応じ た着用や個性を生 かす着用を工夫で きる。	・衣服のはたらき ・衣服と社会生活 とのかわり ・目的に応じた着 用や個性を生かす 着用	・衣服と社会生 活とのかわりに 関心をもち、 TPOに応じた衣 服を着用しよう としている。	・目的に応じた 着用や個性を 生かす着用に ついて考え、工 夫している。		・衣服の社会 生活上の機 能について理 解している。
衣服の計画的な活用と選択	3	・衣服の計画的な 活用の必要性を理 解し、適切な選択 ができる。	・衣服の計画的な 活用と選択		・目的に応じた 衣服の適切な 選択について 考え、工夫して いる。	・既製服を選 択するための情 報収集・整理 することができる。	・衣服の計画 的な活用の 必要性を理解 している。
和服の基本的な 着装と衣文化	4	・和服の基本的な 構成を知り、洋服 との違いを理解す る。	・和服と衣文化 ・浴衣の構成と たたみ方	・衣文化に関心 をもち和服の歴 史や基本的構成 を理解しようと している。	・和服のよさを 考え今後の衣生 活に生かそうと 工夫している。		・和服と洋服 の違いを知り 、基本的な構 成を理解して いる。
	5	・浴衣の帯結びの 実践を通し、衣文 化への関心を高め 学んだことを今後 の衣生活に生かそ うとしている。	・浴衣の帯結び の方法 ・浴衣と私たち の衣生活	・衣文化に関心 をもち、帯結び の実践に取り組 んでいる。	・浴衣の帯結び の実践を通し、 和服のよさを に気づき、今後 の衣生活に生 かそうと工夫し ている。		・浴衣の帯結 びの方法を理 解している。
	6 ・ 7	・浴衣の着装を通 し、衣文化への関 心を高め、今後の 衣生活と関連させ て考える。	・浴衣の着装 ・衣文化の歴史 と未来	・衣文化に関心 をもち、浴衣の 着装の実践に取 り組んでいる。	・浴衣の着装の 実践を通して和 服のよさを考え 今後の衣生活に 生かそうと工夫 している。		・浴衣の着装 について理解 している。

8. 授業の展開 (4/7～7/7)

(1) 和服に関する授業 和服のよさ (4/7 時)

学習内容	時 間	●教師の働きかけと・学習活動	教具・資料等
○4時間の授業の流れの把握	5	●「浴衣の着装を通して日本文化を知ろう」(4時間分)の流れを説明する。	スクリーン 浴衣を着つけたボディ 浴衣 プリント1 (和服について知ろう) スライド資料
学習課題：和服を体感し、よさを知ろう			
○和服についての基礎知識 (1) 和服の歴史 (2) 構成の違い	10	1. 和服って？ ・歴史・文化的資料を通して、日本の伝統的な着衣である「きもの」が時代を経て少しずつ形をかえて現在に至っていることを知る。 ・反物を見ながら、平面的な構成であることや仕立て直しが出来ることを学ぶ。	浴衣の反物
○浴衣についての基礎知識 (1) 浴衣の歴史 (2) 浴衣のバリエーション (3) 浴衣の部位	10	2. 和服の一種である「浴衣」について知ろう ・湯上り着や寝巻きであった浴衣が、時代とともに形と役割をかえつつ、夏の日常着や夏祭りで着られる様になったことを知る。 ・浴衣には産地や生地によって種類があることや、色柄デザインが豊富なこと、男物と女物の違いについて学ぶ。	浴衣
○教師によるたたみ方の示範 ○たたみ方の練習	10	●著名人の浴衣ブランドを紹介する。 ・浴衣の着装に必要な基本的な部位の名称を学ぶ。 ●机の整頓をさせる。 3. 浴衣をたたんでみよう ●生徒を集めて浴衣のたたみ方を示範し、生徒にプリントで確認させる。 ・各班で浴衣を広げて、たたんでみる。	
○まとめ・感想の記入と発表。	5	●最低一人1回はたたむ練習をさせる。 【まとめ】 ●学習したことや感想をワークシートに記入させ、数人に発表させる。 ●次時の予告（帯結び体験）をし、体操着で来るように指示する。	

スライド資料の例

浴衣について知ろう！

男物と女物の違い

★そでの形

男物
人形(袖が縫い閉じてある)

女物 (袖の振りが開いている)

★身ごろの形

男物
おはしよりが
身八つ口の開きがない

女物
おはしよりのある分
身長位の長さがある

★帯結びの位置

女物は帯の幅が広く位置も高い



若い世代に人気
 浴衣は涼し気に見えるよう、白地や藍地、紺地に秋の草花を染めた柄が一般的です。しかし現在では和服ブームに伴い10代から20代対象の洋服ブランドも浴衣を製作・販売し始め、カラフルなプリントを施したものも多く出回っています。今風の鮮やかな彩りの浴衣は「ブランド浴衣」と呼ばれます。
 

(2) 和服に関する授業 浴衣の帯結び (5/7 時)

学習内容	時間	●教師の働きかけと・学習活動教	教具・資料等
○前時の和服に関する 学習内容と体験の振り返り	5	●和服の基本的構成、浴衣の歴史など、 前時に学習した内容を思い起こさせる。 ●これまでの和服の着用体験を想起させ、 現状を再認識させる。	スライド資料
学習課題：浴衣の帯結び体験を通して和服のよさを知ろう			
○本時の授業の流れの 説明（見学→体験→評価）	15	1. 帯結びの演示 ●生徒を集めて、男性用・女性用の帯の名称と結び方を説明しながら教師の胴に巻いて帯結びを演示し、完成形の見本を提示する。	帯（角帯・半幅帯（各班2組ずつ）） プリント2 （和服のよさを味わおう） 帯結びの完成形（実物）  協力しながら練習 ワークシートA  さまざまな表情の帯
○浴衣の帯の役割と 必要性 ○帯結びの体験	15	2. 帯結びを体験しよう ・帯の役割と結ぶ意味について考える。 ・各班男女2～3名のグループ内で実践を行う。男子は貝の口、女子は文庫結びをする。協力して1本目が完成したら自由に練習する。 ●2本目以降は男女どちらで実践してもよいことを伝える。 ●帯は他の生徒にも見えるよう前で結ぶよう指示する。	
○帯結びの評価と発表	10	3. 発表と評価（帯結び実践の振り返り） ●各グループの完成作品を数点比較させ、どれがよいか、その理由について考えさせ、発表させる。 ・他者の帯結びの形を見たり、意見を聞いたりした結果を踏まえて自己評価をする。	
○帯結びの感想の記入	5	【まとめ】 ・帯結びを通して、洋服とは異なる日本文化としての和服のよさについて気付く。 ●次回は浴衣を通して着ることを知らせる。	
 男物にも挑戦			

(3) 和服に関する授業 浴衣の着付け (6/7 時)

学習内容	時間	●教師の働きかけと・学習活動	教具・資料等
○前時の学習内容と体験の振り返り	2	●前時に学習した浴衣の帯結びの学習内容を思い起こさせる。	
学習課題：浴衣の着付け体験を通して和服のよさを味わおう			
○本時の流れの説明 (見学→着付け体験→撮影→評価) ○着付けの手順	18	1. 着付けの演示 ●生徒をモデルに女子、男子の順に着付けをしてみせる。 ・浴衣の着装に必要な小物・手順について知る。 ●裾付近はビデオカメラで撮影し、プロジェクターで投影しながら後方の生徒にも見えるよう、着付けのポイントを解説する。 ・DVD で男子の着付けの仕方を見る。 ●スライドでよくない着付け、だらしない着方の写真を提示し正しい着付けについて理解させる。	プリント 3 (和服のを着てみよう) ビデオカメラ プロジェクター スライド資料
○正しい着付け	20	2. 着付けの実践 ・各班男女に分かれ、2~3 人のグループでモデルを決める。 ●モデルの身長に合う浴衣を配付する。 ・帯は、浴衣に合うものをコーディネートする。 ●男子は角帯とするが、女子では作り帯・マジックテープ式伊達締めとする。 ・プリント資料やボディに着せた見本、TA を活用しながらグループで協力しながら着付けを行う。 ・着付けが済んだら、廊下で前面・後面の写真撮影をする。	身長に応じた浴衣 小物セット 角帯 作り帯 着付け用小物 カメラ 番号札
○浴衣と帯のコーディネート			自己評価シート 1 モデル用シート
○浴衣の着付け体験			
	10	3. 着付け実践の振り返りと発表 ・各グループで着付けの出来ばえを評価し、自己評価シートに記入する。 ●モデルとなった生徒には感想をワークシートに記入させる。 【まとめ】 ●本時のねらいを再確認し、着付け体験を踏まえて学習したことや感想を記入させ、和服の良さを味わわせ、発表させる。 ●次時の学習内容を知らせる。 片付けを指示する。	 出来ばえをチェック ワークシート A
協力して着付ける			
○着付けの出来ばえの評価			
○感想記入 (モデル)			
○着付け実践の感想記入と発表			

(4) 和服に関する授業 振り返りとまとめ (7/7 時)

学習内容	時間	●教師の働きかけと・学習活動	教具・資料等
○前時の和服に関する学習内容と体験の振り返り	5	●前時に学習した浴衣の着付けなど、これまでの学習内容を思い起こさせる。 ●前時に撮影した写真とプリントを配布する。	自己評価シート 2 写真
学習課題：浴衣の着付け体験を振り返って和服のよさを見つけよう			
○浴衣のコーディネートと印象	15	1. コーディネートについて ●クラス男女4名(計8組)の写真をスライドで見ながら、どのコーディネートが最もよいと思うか、またその理由(印象)について考え、発表させる。 ・浴衣の色、帯の用い方で色々な印象になることを知る。	プリント 4 (和服のよさを味わおう) スライド資料
○帯結びのアレンジ	7	●雑誌の切り抜きから実践以外のコーディネート例を紹介する。 ●帯結びのアレンジについて、兵児帯・振袖の帯結び等を交えて紹介する。	スライド資料
○着付けのポイントの確認	8	2. 着付け体験の振り返り ・前時に撮影した写真を見ながら、着付けの出来ばえについて再び評価する。	スライド資料
○着付けの再確認			
○現代に残る和服	8	3. 現代に残る和服 ●現代に残る和服や風呂敷などその他の日本文化について紹介する。 ・日本の伝統文化としての意義と伝承について考える。	浴衣
○ゆかたのたたみ方(再)	7	4. たたみ方の復習 ●各班に浴衣を1着ずつ配付し、浴衣のたたみ方を復習させる。 【まとめ】 ・和服に関する4時間分の授業を振り返り、感じたことや考えたことをワークシートに記入する。	ワークシート A
○一連の授業の振り返り		●次時の学習内容を知らせる。 ・片付けをする。	

9. 実践者の感想 (◎はよかった点、△は反省点、課題点)

＜授業準備について＞

◎浴衣の着装に必要なさまざまな用具等をプロジェクトから貸していただいたため授業が行なえた。男女の浴衣や帯など、授業に十分な数を揃えられたのは大変ありがたかった。逆に言うと、貸していただければ準備するのは困難である。

◎大学と附属の連携による授業実践が行え、他校の先生方に紹介できた。

△授業者として、帯結びや着付けの示範のための練習が必要であること。(これまであまり実践経験がなかったため、より分かりやすく示す練習が必要であった)

△◎和装の取り扱いは、学習指導要領にも明記されてはいるが、必須ではないため、授業の位置づけが難しい。今回は、本校の研究と関連付けて授業を行ったが、ねらいの設定が難しかった。体験することにより、確実に興味関心を高めることにはつながったと思う。

△ワークシートの作成は、着装の流れの細かい部分に時間がかかった。イラストについてはプロジェクトの冊子のものは、分かりやすくありがたかった。しかし、中学生に理解しやすくポイントを絞るためには、編集が必要であった。特に男子の帯結びについてポイントを絞り込んで配布したが、結果的に理解度が上がったように思う。

△一般的には、和服を取り入れた授業を4時間の指導計画で行うのは困難である。その理由として、衣生活の分野において和装を扱う時間的余裕がないこと、浴衣や小物等を人数分準備するのが難しいこと(予算や手段も含めて)、事例として一般化されていないため、和装といっても何をどのように授業に取り入れてよいのかわからないこと等が考えられる。

＜授業実践について＞

△ねらいをどこに絞るかによって、着装のさせ方や授業の展開の仕方を工夫する必要がある。今回は班内で男女別に行ったが、体験という意味では、着装は全員が行う方がより望ましいし、生徒も全員がやってみたいという気持ちが高まっていたのではないかと感じた。

△和服に4時間をかけるのは難しいのが現状なので、今後は2時間扱いで着装体験に絞り込んで行うのもよいのではないと思う。その際、評価は「関心・意欲・態度」の観点に絞り込んで行うのが適切と考える。

◎着装の男女による難易度の差については、授業を展開する上で何かとやりにくさを感じた。男子の方がもともとの着装体験が少ないため、女子だけの示範では伝わらない。しかし、男女ともに着装の示範を行うとなると、時間がかかってしまうので難しいと感じた。DVDは、部分を繰り返し見て理解するには有効だが、生徒にとっては、やはり生で見た方が伝わると実感した。

◎今回の授業計画では、最初(1時間目)に和服についての大まかな知識を学び、その後帯結びなどの実践へと入っていった。最初に和服について学んでいたことにより、すんなりと実践へ入れたように感じる。生徒にとって和服自体が身近ではなくなっているため、最初に興味をもたせるような流れをつくることは有効だと感じた。

◎大学の先生、学生の方にも準備、事前事後アンケート、示範等にご協力いただき授業が実践できた。特に着装の示範については、慣れていないとわかりやすく伝えられないので、協力していただき大変助かった。

10. 共同研究者の観察とコメント

本実践は、平成23年度附属中学校研究協議会で2時間目の「浴衣の帯結び体験を通して和服のよさを知ろう」として公開実施した。前述の1.～7.は協議会資料からの抜粋である。平成22年度には、授業の複雑さや生徒の発達段階を考慮して、取り組みやすい女子校や高校を対象とした。23年度は、一般的な教育環境である男女共学の中学校で実施し、和服を取り扱う授業が少ない中での実践例として積極的に他校に紹介するとともに、ワークシートや調査分析を通して、授業効果を検証したいと考えた。この間、プロジェクトメンバーは、着装装備、資料、DVDを充実させ、22年度の取り組みをふまえたアドバイス、学生アシスタントの派遣も含めて、一連の授業に協力してきた。

教師自身は、和服を取り扱った経験がなく、また、事前調査によれば生徒たちは和服全般への興味・関心が低く、不安な気持ちを抱きながら授業に臨むことになったと思う。

以下、3つの視点から本実践の内容と効果について解説する。

(1) 授業体制・内容の工夫と生徒の様子

附属中の1クラスは45人前後であり、授業場所は被服室と設定した。授業は1コマ50分の授業を4回に分けて設定した。男女同時に、かつ空間的にも余裕のない状況の中でどのように実践するかが第1の課題となった。着付けの難易度・関心面で男女差があることも指導上の問題であった。

そこでまず、段階をふんだ学習内容を計画し、体験を重視するよう工夫した。1時間目には着付けに必要な基礎的知識を説明した後、たたむことでゆかたに触れさせた。

帯結びの学習活動では、実に楽しく生き生きとした生徒の姿が捉えられた。一通り結び終えた生徒たちは2本目、3本目と意欲的に挑戦し、男子生徒が女物に挑戦する場面もあり、微笑ましかった。その後の研究協議会では、「ゲストティチャーを招いての実践例は知っているが、一人の教師でもできることが分かった」、「帯結びを先行させて、着付けをしたいという気持ちが高まったのではないか」、「体験することの意味が見てとれる授業となったのは、教師の説明の適切さ・配布資料の完成度の高さを基盤とし、生徒の理解に支えられたものである」など、全般、高い評価を得ることができた。

3時間の着付けの授業では、空間と時間の制約から、ゆかたを着る生徒をクラスの1/3程度に絞り、グループ学習とした。男子は、定着を図るよう貝の口を繰り返した。女子においては、時間短縮を図るため、作り帯やマジックテープ式の伊達締めを使用した。ゆかたのサイズはモデルの身長に合わせて適切になるよう配慮する一方、帯はゆかたに合わせて選ばせ、コーディネート学習に結びつけた。

理解を促すために分かりやすく示すことが、第2の課題として挙げられた。講義では、スライドで写真を見せながら分かりやすく説明した。着付けにかかわる教師の示範では、プロジェクターで投影し、後方の生徒たちにも見やすいようセットした。重視すべき点はDVDで繰り返し説明する、中学生に分かりやすく編集した資料を配付するなどポイントをおさえることを心がけた。

(2) 衣服の選択と手入れの中での扱い

学習指導要領には、衣服の選択・手入れと和服の取り扱いの関連性が示されておらず、和服の着装をどう取り扱うかが問われる。平成22年度に取り組んだ着付け技能の評価は、目的に応じた着方、着方を通して社会生活との関わりに気づく題材にはなりうるとはいえ、両者を十分に関連づけできるものではない。



コーディネート学習に用いたスライド資料の例

一方、正しい着付けについて知ることは、文化伝承の上では必要なことと考え、今回も技能評価を組み込むことにした。22年度の実践において技能評価が必ずしも正確になされていなかった反省をふまえ、正しい着付けについてスライドで解説した。それでも、着付けをした楽しさと満足感のためか、正確に評価ができない生徒が散見されたため、4時間目に再度、写真を見て出来ばえを振り返らせた。

着装時にはコーディネート学習に結びつける工夫を行った。生徒たちに好みの帯を選ばせて、楽しませるよう配慮した。4時間目の振り返りには、クラスの中の雰囲気異なる男女4組の着付けの写真をスライドで示して、好きな組み合わせとその雰囲気を感じ取らせることを組み込んだ。コーディネートは生徒たちの興味・関心が高いものの、個人の服装価値観が関与するため、授業に取り入れるには難しい面があるが、浴衣の着装を通じ、自然な形で学習がなされたといえる。

モデルには着る楽しさを感じ取らせるよう、着ることの楽しさや他者から受けた評価などを記載させて、着装の効果を実感させた。

以上のことから、ゆかたの着装の体験的学習は、今後の自分の衣生活と関連させて考え、視野を広げる効果もあったと考える。

(3) 言語活動を通して、思考力、判断力、表現力を育成するねらい

毎回、授業のまとめにおいては振り返りを行い、生徒には、感じたこと・考えたことを文章表現させ、意見交換させた。たたむ、結ぶ、着る体験ごとに、思考・判断する場面を設けて、自分が感じたことや考えたことを、言葉で伝え合ったり、文章に表したりする場面を設定している。

ワークシートには、技能的なことに加えて、和服の良さを体で感じとる内容、今後の生活に生かすこと、嬉しさなどの気持ちがその都度書かれており、味わいを深めているように受けとめられる。このような生徒の記述から、時間ごと、そして題材を通じての関心・意欲・態度や工夫・創造力の高まりを、教師のみならず生徒自身が読み取ることができるものとなっている。ワークシートの分析は今後の課題であるが、事前調査時に比べて明らかに生徒の記述は豊かなものとなっている。

事後調査においても、男女生徒ともに和服に興味・関心が高まったことから、衣に関する伝統文化に触れ、その良さを感じさせる目的は十分達成できたと考え、記述によって生徒の理解力や和の味わいを読み取ることができたといえる。

<引用文献> 平成23年度中学校研究評議会資料 学習指導案綴 P32-35、埼玉大学教育学部附属中学校編集・発行（2011）

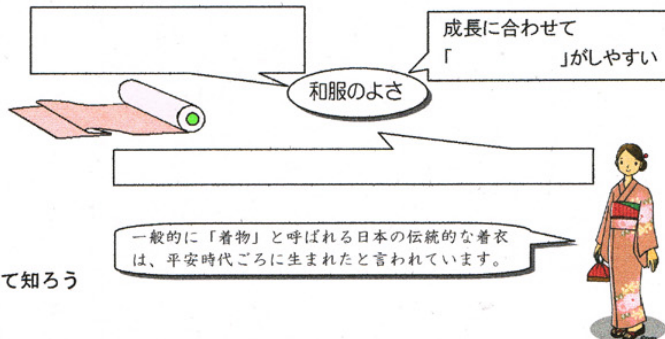
和服について知ろう

浴衣の着装体験を通して日本文化を知ろう① 【 月 日】

2年 組 氏名

学習課題

- 1 「和服」って？
和服 (kimono) と洋服の違い



- 2 和服の一種である「浴衣」について知ろう

- (1) 浴衣の歴史 麻の単衣

室町時代末期～江戸時代初

盆踊りなどの流行



華やかな浴衣が庶民の間でも広がる

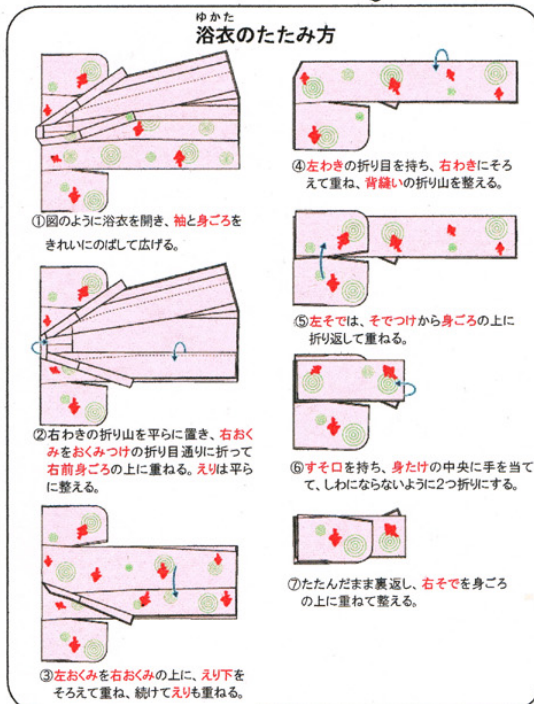
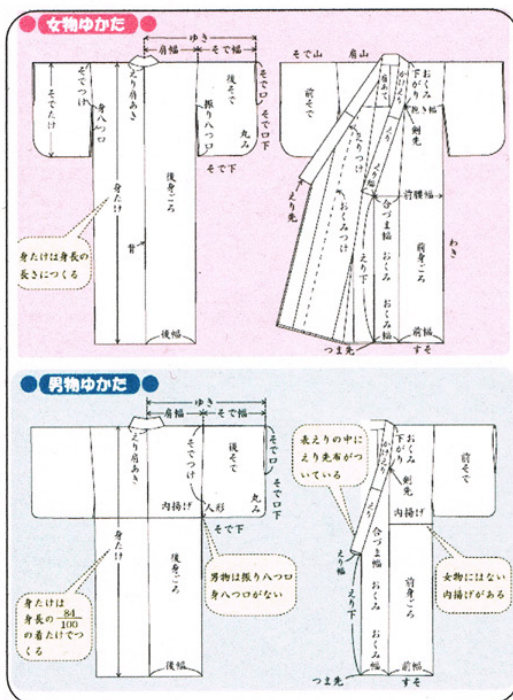
- * 肌触りのよい「湯上がり着」として……
- * 男女子供を問わず「寝巻き」として……
- * 夏の日の「日常着」や「外出着」として……
- * 夏祭りの「揃い浴衣」として……

日本の衣生活に欠かせないものとなった！

- (2) 浴衣の形と名称を知ろう

- (3) 浴衣をたたんでみよう！

Try! ①



プリント 2(抜粋)

和服のよさを味わおう

Try.2

浴衣の着装体験を通して日本文化を知ろう②【 月 日】

2年 組 氏名

学習課題

1 帯結び体験の流れと評価の仕方

- (1) 手本を見る。
- (2) 実際に行う。→ 注意点の確認をしよう！
- (3) 片付ける。 (4) 評価を行う。

(2) について

◆チェックしよう！

各工程について、○をつけよう。

A:自分が中心に行った B:手伝った C:見ていた

1 回目の帯結びについて

工程 1	巻く	A	・	B	・	C
工程 2	結ぶ	A	・	B	・	C
工程 3	リボン (女性のみ)	A	・	B	・	C
工程 4	仕上げ	A	・	B	・	C

★自分たちの班の改善点を具体的に書いてみよう。

(4) について

他の班の結び方と比べた後に……

◆自己評価しよう！

A:完璧！(できている) B:もう一歩(修正が必要)
C:やり直し！(できていない) のどれかに○をつけよう

女性用

- ・余ったて先がとび出していないか。 A・B・C
- ・左右のリボンの大きさがそろっているか。 A・B・C
- ・帯がゆるんでいないか。 A・B・C
- ・リボンが下に落ちてこないか。 A・B・C
- ・リボンの大きさが適度か。(肩幅ぐらい) A・B・C

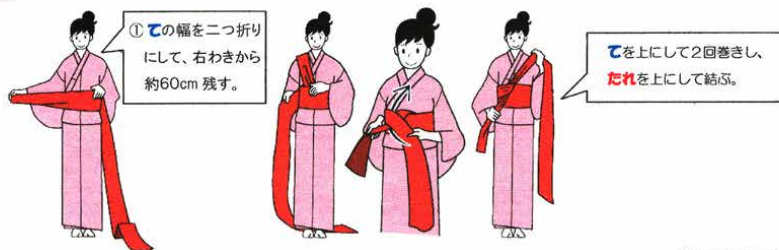
男性用

- ・手順通りに正しく結べているか。 A・B・C
- ・結び目の形が整っているか。 A・B・C
- ・帯の位置がへそ下にきているか。 A・B・C
- ・帯がゆるんでいないか。 A・B・C

2 帯結びの方法 (資料編)

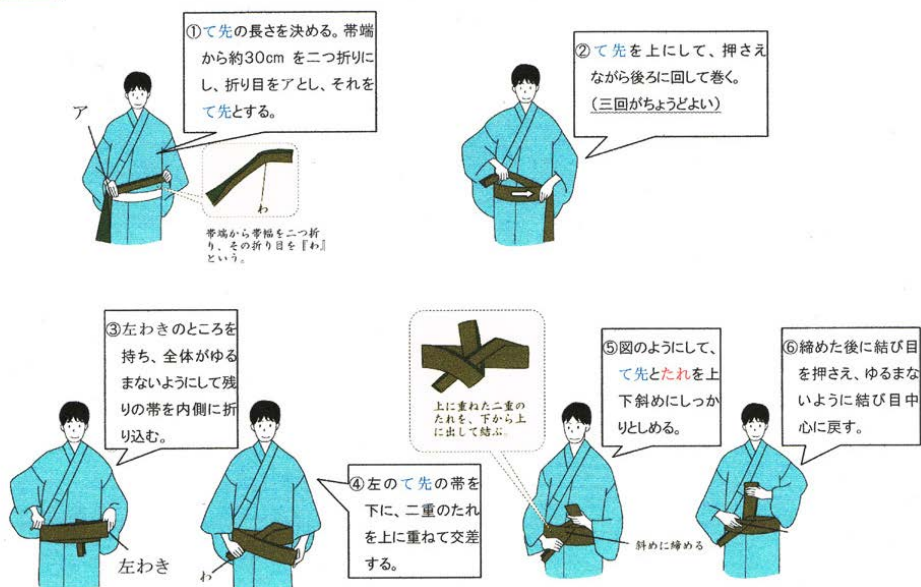
女性

★今日の授業で体験するのは…… 結び



男性

★今日の授業で体験するのは…… 結び



和服のよさを味わおう

最終回

浴衣の着装体験を通して日本文化を知ろう④【 月 日】

2年 組 氏名

学習課題

1 浴衣の着装（着付け）について振り返ってみよう。

①コーディネートについて

Q：友達の写真を見て、どの浴衣のコーディネートが最もよいと思いましたか。

男子編

番

★浴衣の色

★帯の色

★その理由について、当てはまるものに○をつけてみよう。（※3つまで）

かっこいい 大人っぽい かわいい きれい しぶい 締まって見える
華やか 落ち着いている 涼しげ 夏らしい その他（ ）

Q：友達の写真を見て、どの浴衣のコーディネートが最もよいと思いましたか。

女子編

番

★浴衣の色

★帯の色

★その理由について、当てはまるものに○をつけてみよう。（※3つまで）

かっこいい 大人っぽい かわいい きれい しぶい 締まって見える
華やか 落ち着いている 涼しげ 夏らしい その他（ ）

②できばえ（着付けの技能）について

※写真による記録から、自分のグループの着付けについて、再評価してみよう。

本当に美しく仕上がっているのかな？



2 日本の伝統文化と和服

日本の「きもの」は平面の布地を仕立て、帯を締めて、初めて完成するものです。これは、風呂敷、手ぬぐいとともに、平面を立体化して用いるもので、日本独特の平面構成の文化といえるでしょう。

浴衣を含め、日本の「きもの」の特徴は、

- ほどくと平面にもどるため縫い直すことができる
- 着装によりはじめて完成するので体型がほぼ同じであれば共有することができる
- 平面で、形のデザインがないため、日本独特の美しい「染め」や「織」の技法が発達したことが挙げられる。

「風呂敷」も平面構成の文化の一つです



ワークシートA



和服を「体感」しよう！



2年 組 氏名 _____

Try:1

「浴衣をたたむ」体験【月 日】

表現しよう！

●浴衣の特徴や、実際に「たたむ」体験を通して、和服について気付いたことや感じたこと、発見したことを記入しよう。

Try:2

「浴衣の帯結び」の体験【月 日】

表現しよう！

●浴衣の「帯結び」の体験を通して、和服について気付いたことや感じたこと、発見したことを記入しよう。

Try:3

「浴衣の着付け」の体験【月 日】

表現しよう！

●浴衣の「着付け」の体験を通して、和服について気付いたことや感じたこと、発見したことを記入しよう。

●これまでの体験を通して……



自己評価シート(男女)とモデル用シート(抜粋)

【浴衣の着装に関する自己評価シート（男子）】

2年 組 番 名前 _____

着付けの出来ばえ

※当てはまるところを○で囲んでください。

	そう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	ややそう思う	そう思う
腰紐をきちんと結べている	1	2	3	4	5
背中心がまっすぐになっている	1	2	3	4	5
すそが広がっていない	1	2	3	4	5
胸元（えり）がはだけていない	1	2	3	4	5
帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない	1	2	3	4	5
帯（貝の口）の形が整っている	1	2	3	4	5
外出できる出来ばえになっている	1	2	3	4	5

【浴衣の着装に関する自己評価シート（女子）】

2年__組 __番 名前_____

着付けの出来ばえ

※当てはまるところを○で囲んでください。

	そう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	ややそう思う	そう思う
腰紐をきちんと結べている	1	2	3	4	5
背中心がまっすぐで、たるんでいない	1	2	3	4	5
すその丈がちょうどよい	1	2	3	4	5
すそ（足元）が広がっていない	1	2	3	4	5
おはしよりがすっきり整っている	1	2	3	4	5
衣紋（首の後ろ）に適度なゆとりがある	1	2	3	4	5
胸元（えり）の合わせがちょうど良い	1	2	3	4	5
帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない	1	2	3	4	5
外出できる出来ばえになっている	1	2	3	4	5

【浴衣の着装に関する自己評価シート（男子）】※着た人

2年__組 __番 名前_____

浴衣を着たときの気持ち

※当てはまるところを○で囲んでください。

	そう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	ややそう思う	そう思う
気持ちが高まった	1	2	3	4	5
優雅な気分だった	1	2	3	4	5
うれしかった	1	2	3	4	5
帯がきつかった	1	2	3	4	5
歩きにくかった	1	2	3	4	5
姿勢がよかった	1	2	3	4	5
身のこなしが変化した	1	2	3	4	5
外出できる出来栄えになっている	1	2	3	4	5

【モデルになって感じたこと、言われたこと】

Ⅱ―5. ゆかたの着装体験から夏休みのテーマ学習につなげた授業実践

横浜国立大学教育人間科学部 薩本弥生

元横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 葛川幸恵

1. はじめに

日本の「きもの」文化は、これまで日常着として、あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら、「きもの」の染色、織、縫製、着装に関わる技術に支えられ形成されてきたが、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、これらの技術や文化が一般に理解されなくなりつつある¹⁾。

このような背景のもと、2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛すると共に、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された²⁾。この規定を受け、2008年3月の学習指導要領告示では、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている³⁾。そして、中学校の技術・家庭科の「C衣生活・住生活と自立」では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれた⁴⁾。このことにより日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育、すなわち「きもの」文化をどのように教育していくかについての検討、新しい教育デザインが必要となってきた。

従来、和服文化の伝承の媒体として「ゆかた」をとらえた研究^{5)~8)}は見られるが、教育と直結した形での検討^{9)~10)}は極めて少ないと推察される。また、一般に、和服の着装のDVDは販売されているが、これを中学校、高等学校での教育に取り入れることは行われてこなかった。中学生、高校生が見てわかりやすい着装DVDを開発し、研究授業に提供することは、新しい教育デザイン検討として位置づけられる。「きもの」の着装に関して、教育の現場で実際の研究授業を行い、着装教育にどのような準備が必要であるか、どのような方法がよいか、などの検討は、特に学術レベルでは十分に行われておらず、このような実践の蓄積が、新しい教育のデザインを組み立てていく上で欠くことができない作業である。大学生を主な対象とした「ゆかた」に対するイメージ評価に関する研究は、いくらか見られる^{11)~13)}。これらをふまえ、「ゆかた」の着装に伴う、中学生・高校生が外見および心の変容により、衣服を着ることについて考えることを促すという側面、衣服の社会的役割について理解するという側面についても十分検討していく必要がある。

また、政府の施策のもと、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり¹⁴⁾、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法の検討もこれからといえる。

このような「きもの」文化をめぐる様々な状況を背景に、筆者らは家庭科の授業の中で「きもの」の中でも最もカジュアルで身近であるゆかたの着装を含む体験的学習を通して日本の「きもの」文化を次世代に伝承することを意図して、教育プログラムの開発と授業支援を行うこと、それらの実践を通じて子供たちの心に日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする芽を育てていくことを目的とし、ゆかたを題材とした授業研究を進めている^{15)~18)}。本研究ではこの一連の研究をもとに協力校の横浜国立大学教育人間科学

部附属横浜中学校において実施した授業実践およびその中で実施したアンケート調査の分析の結果をもとに体験型授業の効果と今後の課題について考察したので報告する。

2. 研究方法

2.1 授業実践協力校と授業実践内容

ゆかたを題材とした授業研究の一環で、2009年7月から10月に授業実践協力校の附属横浜中学校において葛川氏に授業実践を依頼し、第2学年A～C組135名（各クラス45名）を対象にクラス単位で授業研究を行った。本実践では、「ゆかたの着方を通し和服の構成や和服の良さを理解し、日本の伝統文化である和服について関心をもつこと」を目標に夏休みまでに3回と夏休み後に1回の計4回、授業実践した。表1に学習指導案の抜粋を示す。なお、1時間目に着つけ実習に先んじてたたみ方実習を先に行ったのは、たたみ方を先に習得してもらうことが、生徒に、きものの平面構成を理解させるねらいが伝わりやすく、授業後の教師の片づけの負担を軽減するためにも有用と考えての授業計画であった。

3時間目には前時のゆかたの着つけ実習をうけてきもの文化に対する生徒の関心が高まったことを受け、「きもの文化」に関わるテーマ学習を夏休みの課題として課した。生徒が取り組みやすいように例として「きものの歴史、きものの種類、きものの柄、帯の結び方、きものファッション、に対する課題を本やインターネットで調べる、呉服店や、博物館などに出かける、自分で着るか・人に着せてあげて出かけた感想をまとめたりする」などを挙げて自由に取り組みさせた。夏休み後の4時間目には夏休みのテーマ学習課題を発表し、発表に対して相互に感想を付箋に書かせ発表者に渡した。

表1 学習指導案抜粋

時間	学習内容	指導・留意事項・評価
1	きものに関する調査・ゆかたの着方とたたみ方のDVD視聴・たたみ方実習 (たたみ方実習の際、いしき当てと肩当ての役割を考えさせる)	・視聴覚機材と着装DVD準備 ・実習は班毎(各班員7-8名)
2	ゆかたの着装とたたみ方実習 (着装実習前に教師が示範して着つけを見せながら、ポイントを復習させ、その後、着装実習を <u>ペアでお互いに着せつける形で実施</u>)	・男女別にペアに着つける
3	ゆかたの着つけとたたみ方実習および以下の夏休みテーマ学習課題提示 「和服についての学習を通してわかったことや疑問に思ったことを元に自分で課題を決めて夏休みに和服について調べよう。」	・男女別にペアに着つける
4	夏休みのテーマ学習課題の発表と評価	・発表と評価

2.1.1 授業実践に先立つゆかたと示範用ビデオの準備

実践に先立ち、著者らは「きもの」文化の伝承と発信に関わる一連の研究の一環として中学生および高校生を対象にした授業を想定して、中学1年生から高等学校の3年生までの男女の身長分布を調べ必要なゆかたのサイズを検討し、ゆかたの準備を進めていたが、本実践には間に合わなかった。そこで、通販で購入したゆかた・帯のセットを各々約10セット（2人ペアに1セットの割合）で準備した。女物はゆかたと半幅帯と腰ひものセット、男物はゆかたと腰ひもと兵児帯のセットである。サイズに関しては男女ともMサイズとした。また、オリジナルの着装およびたたみ方を示すDVDを製作中であったが未完成であった。そのため、示範用の着装ビデオとして、NHKの放送番組「おしゃれ工房」（2008年7月17日）の録画の一部を授業で利用するために準備した。

2.1.2 きもの文化に対する意識調査内容

初回の授業では第2学年A～C組135名（有効回答数113名：男子59名、女子58名）に対し和服に対するアンケート調査を行い、ゆかたやきものの着装経験の有無（1項目）と着装練習意欲（①はい②いいえ）、経験者にはさらに着装目的と着つけた者、着装感を選択肢から選択させ、着装感（7項目）と興味関心については7件法で調査した。また、着つけ実習に先立ち、浴衣の着方とたたみ方のビデオを視聴およびたたみ方実習後に、浴衣の着装・たたみ方DVDおよび配布資料の理解の有無の評価（①できた②できない）および浴衣のたたみ方の理解度、習得意識、興味・関心について7件法でアンケート調査を実施した。さらに「浴衣をたたんでみて（たたむのを見て）→どんなことを感じましたか」「浴衣の裏についている当て（肩当て、いしき当て）は何のためにあると思うか」について自由記述で調査した。

2.1.3 ゆかたの着装実習（2, 3時間目）後のアンケート調査内容

授業の最後に帯の結び方、ゆかたの着装、各部名称各々についての理解度、習得意識、興味・関心および、着装後の着装感に関する以下の9項目について7件法でアンケート調査を行った。各々①「ゆかたやきものに興味・関心がもてましたか」（ゆかたやきものへの興味・関心）、②「ゆかたの部分の名称がわかりましたか」（ゆかたの部分名称の理解）、③「たたみ方に興味がもてましたか」（たたみ方興味・関心）、④「うまくたたむことができましたか」（たたみ方習得意識）、⑤「ゆかたの着方に関心が深まりましたか」（ゆかたの着方への興味・関心）、⑥「ゆかたの着方を理解できましたか」（ゆかたの着方の理解）、⑦「ゆかたを着ることができるようになりましたか」（ゆかたの着装習得意識）、⑧「帯の結び方を理解できましたか」（帯の結び方理解）、⑨「帯をうまく結べましたか」（帯の結び方習得意識）。以上の項目については以後、カッコ内の表記を使用する。さらに「もっと練習して着付けを練習したいと思いますか」には2択（①はい②いいえ）で問い、「ゆかたをどこかに着ていきたいと思いますか」「きものの優れている点、欠点を具体的にあげてみてください」については自由記述で調査した。

2.1.4 夏休みの課題発表内容と解析法

「きもの文化」に関わるテーマ学習課題のテーマと調べ方のキーワードを抽出し、カテ

ゴリー化し、多重回答分析により集計した。課題提出時の自分の感想についても内容をカテゴリー化して多重回答分析により集計した。

3. 研究結果

3.1 「きもの」文化に関する生徒の認識や体験の実態

Fig.1 に示すように中学 2 年生を対象として「きもの」(ゆかたを除く)の着経験进行调查した結果、男子では 8 割、女子では全員があると回答していた。着つけを行なったのは「プロ」が圧倒的に多く、家庭において着つけ技術の伝承がないことが明らかである。女子では全員、男子では 8 割がきものを着たことがあると回答していた。しかし、子どものときに七五三など特別なときに身につけた以外、ほとんど機会がない。

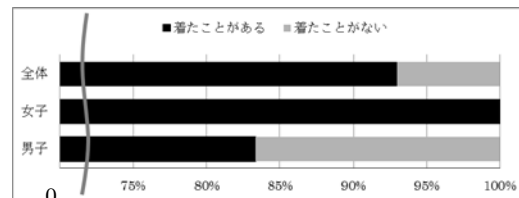


Fig.1 「きもの」の着経験

着つけは Fig.2-a に示すように「プロ」が圧倒的に多く、祖母、母と続くが、プロの 1/5 程度なので、家庭での着つけ技術の伝承がなされていない。

一方、ゆかたについては男子 42%、女子 72%が着衣を経験している。また、ゆかたは、母に着せてもらったとする割合が高いことから、母親世代は多少の技術をもつかあるいは本を参考にしながら行っていると考察される。

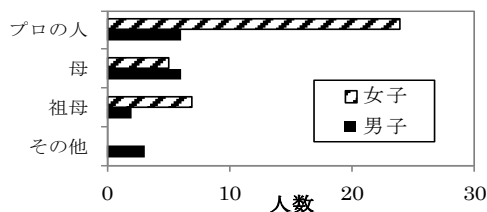


Fig.2-a きものを着つけた人

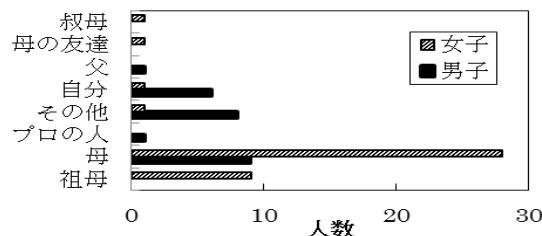


Fig.2-b ゆかたを着つけた人

過去に「きもの」を着たときの感想では、「歩きにくい」「窮屈」が最も多く、動作性の面では否定的であるが、「気持ちが高鳴った」「優雅な気分になった」も小数ながらいて、心理面では肯定的である人もいた(Fig.3-a)。しかし、「自分で着てみたい」と答えたのは、男子で半数、女子で 7 割であり、必ずしも多いとはいえない。これまできものを着たことのない者でも同じような傾向であった。

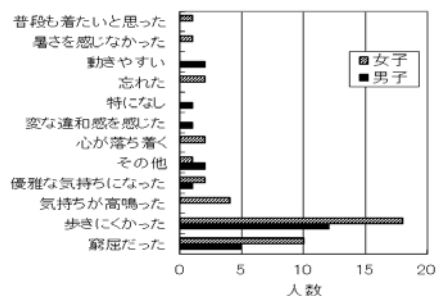


Fig.3-a 過去にきものを着用した時の気持ち

3.2 着装 DVD と資料に関する調査

今回の実践ではテレビの番組から抜粋した着装 DVD と配布資料を用いて着装前の視聴を行った。全体では 8 割以上の生徒が着装 DVD と資料で着つけを理解できたと回答(Fig.4-a)。性別では女子の方

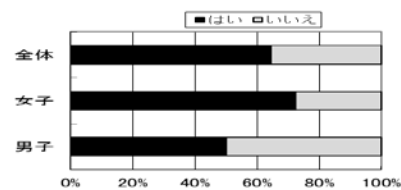


Fig.3-b 自分できつけてみたいか

が理解できたと感じていた。また、女子の中では映像の方が、資料よりも理解しやすいと感じていた。

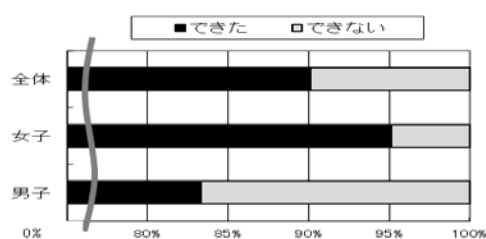


Fig.4-a 着つけ DVD の映像を理解できたか

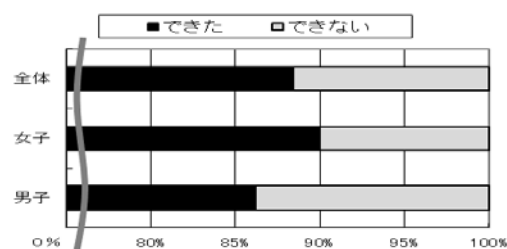


Fig.4-b 着つけの資料を理解できたか

3.3 授業実践の学習効果

3.3.1 着装実践後のゆかたやきものへの興味関心と技能習得、理解度の自己評価結果

Fig.5 に示すように着装の学習後、「ゆかたやきものに興味関心がある」で 9 割以上が肯定的な回答であった。男女で比較すると女子の方がその割合が高い。着装、帯の結び方、名称の理解、たたみ方の項目でも、同様の傾向であった。理由として女子のゆかたは、男子のものより色、柄に多様性があること、また、一般に女子の方が服装への関心が高いことが影響したと推測される。また、女子の方が、きものの着装の体験、自分で着付けをしてみたい割合が高く、DVD や資料の理解度が高く、ゆかたの着付けへのモチベーションが高かったことも影響したかもしれない。着装後、気分の高揚がみられ、男女で半数以上の者がまた自分で着てみたいと答えており、学習によって興味・関心が高まっている。このような授業実践の有無が、今後のきものの着装に与える影響は少なくないと考えられる。

Fig.3-b と併せて考えると、学習によって興味・関心が高まっており、そのアップ率は男子で高くなっている。

Fig.6 に示すようにゆかたの部位の名称については、「ややわかった」にピークがあり「非常に分かった」・「分かった」・「やや分かった」を合わせると女子では 8 割で男子は 5 割で、男子の方が理解度が低かった。部位の名称はなじみのないものであるため、1 回で理解できない生徒が多く、繰り返しの学習が必要である。

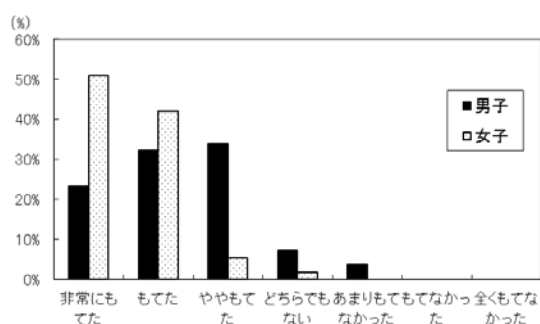


Fig.5 ゆかたやきものに興味を持てたか

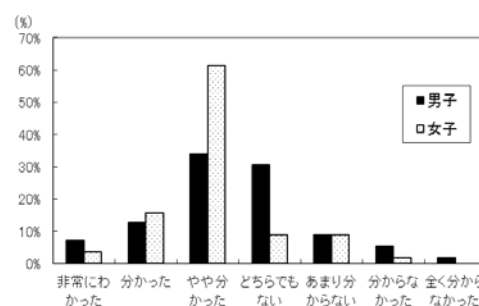


Fig.6 ゆかたの部分の名称理解度

たたみ方学習では、Fig.7 に示すように「興味がややある」以上の者が約 8 割で男女差はなかった。たたみ方については「できた」という回答が 6 割である。ゆかた部分の名称、たたみ方ともに男子でできない割合が高い。たたみ方、部位の名称はなじみのないもので

あるため、1回で理解できない生徒が多いのだろう。ここでも繰り返しの学習が必要であることが示唆された。

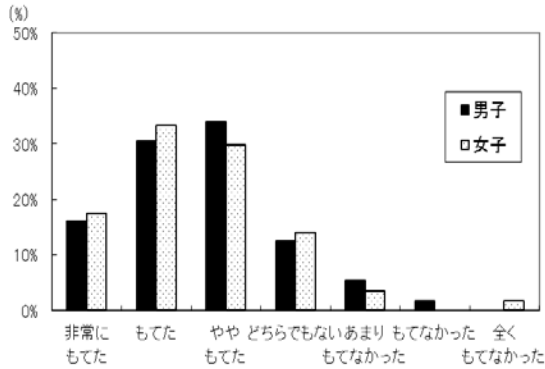


Fig.7-a たたみ方への興味

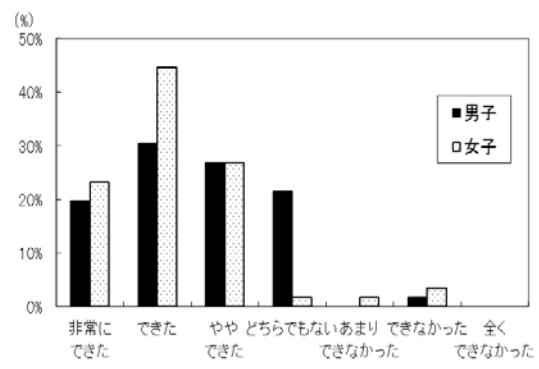


Fig.7-b たたみ方の習得度

3.3.2 着実実践後のきもの・ゆかたへの興味関心と習得意識、理解度間相関分析結果
 実践前後の回答に不備のある9名を除外し、104名での相関分析の結果、Table 1のようにほとんどの項目で有意確率1%の水準で相関が見られた。①「ゆかた・きものへの興味・関心」はすべての他の項目と相関が見られ、特に⑥「ゆかた着実への興味・関心」と0.7の相関があり、興味関心を高めるために「着方」の学習が寄与することが示唆された。「部分の名称が分かった」もすべての他の項目と有意に相関があり、「着方」、「帯の結び方」の理解および習得意識と0.5を超える相関があり、部位の名称をしっかりと把握することが、その後の学習にも関連するととらえられた。たたみ方への興味・関心は、着つけ（ゆかた・帯）の理解や習得意識と強い関連は見受けられず、きもの文化の学習をゆかたの着実との関わりにつなげた本学習の流れは有効ととらえられるのではないかと思われる。

Table1 着実実習後のゆかたへの興味関心とゆかた着実技能習得意識、理解度間の相関分析結果

	味・ゆかたの興味関心	ゆかたの部分名称の理解	③たたみ方への興味・関心	④たたみ方習得意識	⑤ゆかたの着方への興味・関心	⑥ゆかたの着方の理解	⑦ゆかたの着実習得意識	⑧帯の結び方理解
①ゆかたやきものへの興味・関心	1.000							
②ゆかたの部分名称の理解	.529**	1.000						
③たたみ方への興味・関心	.482**	.381**	1.000					
④たたみ方習得意識	.331**	.390**	.517**	1.000				
⑤ゆかたの着方への興味・関心	.705**	.505**	.427**	.395**	1.000			
⑥ゆかたの着方の理解	.425**	.424**	.308**	.334**	.571**	1.000		
⑦ゆかたの着実習得意識	.257**	.450**	.177	.357**	.320**	.480**	1.000	
⑧帯の結び方理解	.403**	.534**	.286**	.401**	.477**	.572**	.575**	1.000
⑨帯の結び方習得意識	.339**	.556**	.154	.427**	.350**	.510**	.557**	.794**

**：1% 水準で有意

3.3.3 着実実践後の生徒の自由記述の分析結果

自由記述の分析からも、Fig.8-a に示すように着つけで難しいのは女子では、「おはしよりと帯の結び方」、男子では「帯の結び方」が第一に挙げられた。Fig.8-b に示すようにたたみ方でも「難しい」が多く挙げられた。その他には多様な回答が見受けられ「洋服との構成の違い」、「しわにならない知恵」などを直に感じて生徒は興味をもったようであった。たたみ方は、是非とも習得させたい内容のひとつと考える。

ゆかたの優れている点には、Fig.8-c に示すように「キレイ・美しい」、「日本を感じる」が最も多く挙げられた。生徒自身は、きものの着装によって日本人としてのアイデンティティを意識したのではないかと推察される。この点は、日本を紹介する生の声として国際交流につなげる意識づけにつなげられる可能性を示唆する。浴衣の欠点では、Fig.8-d に示すように「動きにくい」、「苦しい」「着にくい」などの拘束感が最も挙げられた。

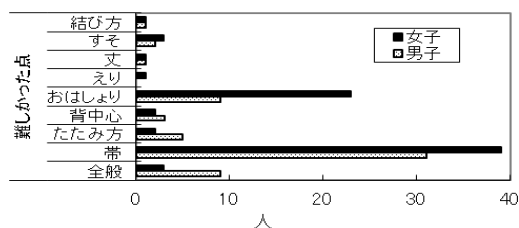


Fig.8-a 難しかった点

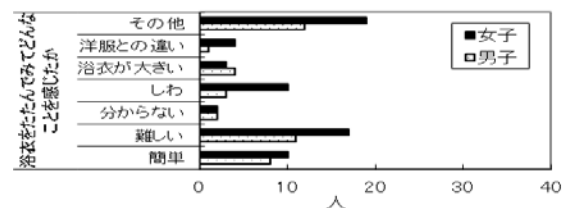


Fig.8-b ゆかたをたたんで感じたこと

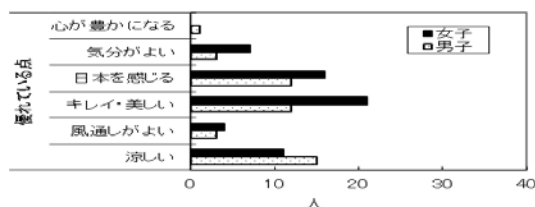


Fig.8-c ゆかたの優れている点

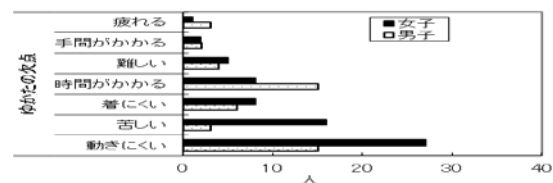


Fig.8-d ゆかたの欠点

授業後の生徒の感想には、「コツをつかめば簡単に帯が結べるようになった」という成就感の感じられる感想や「今度お祭りがあったら着てみたい」という今後への期待が表れたものがあつた。「難しかったけど楽しかった」「大変だったけど、きれいにできて良かった」というように、初めての経験に苦心しながらも、満足の得られた授業だったようである。「今回の授業でゆかたが着られるようになった」という声もあり、単なる物珍しさに留まらず、ゆかたに対する興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の一つとしての「きもの」を見直すという授業の当初のねらいは概ね達成されたものと考えられる。

3.4 夏休みのテーマ学習の内容に関して

3.4.1 テーマ学習のテーマと調べ方

「きもの文化」に関わるテーマ学習として夏休みの課題として取り組ませたテーマをと調べ方を整理したものを Fig. 9-a と Fig. 9-b に示す。きものの歴史や種類、TPO 等を書籍やインターネットを用いて調べた者が多数を占めた。その他の例として呉服店を訪問しインタビューした者、親や祖父母を訪ねてきものやゆかたの現状についてインタビューした

者、実際に着付けをして夏祭りや花火大会に参加した者、和裁士というきもの製作をする職業について調べた者もいてゆかたの着装により高められた「きもの文化」に対する興味から生徒各々が課題を設定して良く調べまとめられていた。テーマ学習を通して生徒本人が持った感想についても Fig.10 にまとめて記載した。

着装実習からきものの文化や歴史等への関心を広げ、「格式高い家柄の象徴は現代社会とは反するような気がした」「動きにくい」「蒸れる」などのきものの短所も知った上で「ゆかたやきものを伝統文化として大切にしたい」という伝承意識の喚起がみられる感想や「きものの利点と洋服の利点を融合させるとよいものが生まれる」など、伝承するだけでなく現在の生活の中できもの文化をどのように生かせばよいのかということにまで思いをはせる生徒もいて興味深い内容であった。

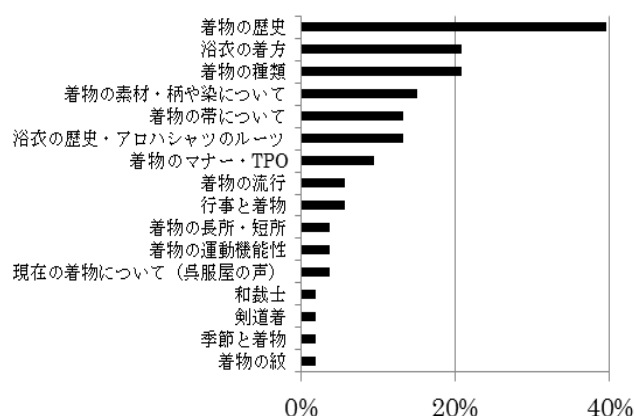


Fig.9-a テーマ学習のテーマ

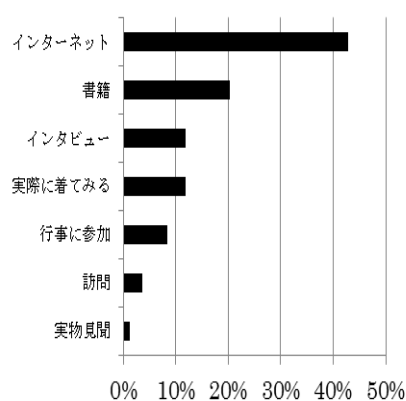


Fig.9-b テーマ学習の調べ方

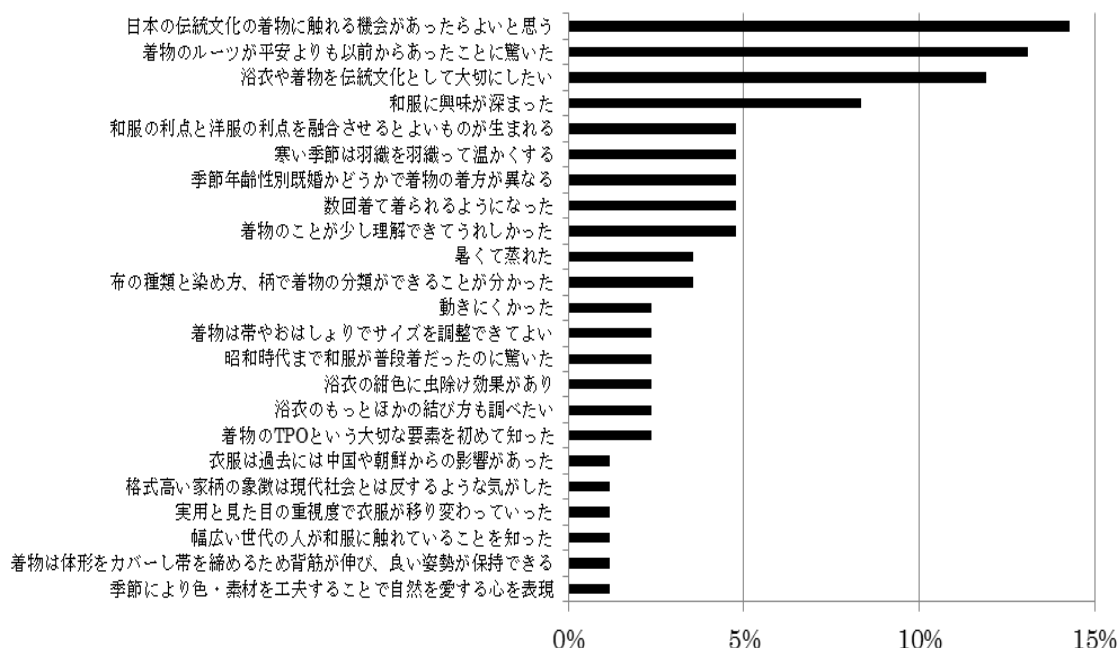


Fig.10 テーマ学習後の本人の感想

4. 総括

以上のように、授業でのゆかたの着がけが気分を高揚させる効果があり、日本の伝統文化の伝承に一定の効果があることが推察されたが、本実践を通して、限られた授業時間の中で効率よく着がけの技術を習得させるには、さらなる工夫が必要であることが明らかとなった。また、着がけを通して何を学ばせるのかという視点を明確にし、家庭科学習としての本実践の意義について、再確認する必要性が認められた。授業時間の多くが着がけに費やされ、着がけについての振り返りや、互いにゆかた姿を見合ったりする時間が充分取れなかった点が課題である。一方、夏休み前のタイミングで授業実践をしてテーマ学習につなげたことで各生徒のきものに対する興味・関心がどこにあるかを知ることができ、夏休み明けに発表したことで個々の学習内容の共有ができた。今後は、本実践で明らかになった生徒の実態を踏まえ、より実効性ある授業プランを具体化していく方向で進めたい。

以上のように、本研究プロジェクトの活動は、「ゆかた」を題材とした「きもの」文化にかかわる、これまでにない新しい教育プログラムの開発であり、国内外への新しい教育デザインの提示になると考えられる。

参考文献

- 1) 横川公子, 服飾を生きる: 文化のコンテキスト, 化学同人 (1999)
- 2) 文部科学省ホームページ 教育基本法資料室
http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm
- 3) 文部科学省ホームページ 新学習指導要領の基本的な考え方
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm
- 4) 文部科学省ホームページ 中学校学習指導要領解説
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm
- 5) 城 眞理子, 内田 恵美子, 幡野 暁子, 和服文化の伝承媒体としてのゆかたを考える, 繊維消誌 **41**(4), 45-55(2000)
- 6) 小菅 充子, 布施谷 節子, 三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(4): 食生活と衣生活における祖母との同居・非同居の関連性, 和洋女子大学紀要. 家政系編 **42**, 81-89(2002)
- 7) 布施谷 節子, 小菅 充子, 中島 明子, 名取 史織, 三善 勝代, 三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(3): 男子学生と女子学生の比較, 和洋女子大学紀要. 家政系編 **42**, 109-124(2002)
- 8) 小菅 充子, 布施谷 節子, 三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(1): 食生活と衣生活について, 和洋女子大学紀要. 家政系編 **41**, 97-106 (2001)
- 9) 中村哲編「伝統や文化に関する教育の充実—その方策と実践事例—」(株)教育開発研究所 (2009)
- 10) 鈴木明子, 被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討—浴衣製作実習における学生の記述分析を通して—, 日本教科教育学会誌, **26**(3)33-39(2003)
- 11) 川上梅, 再見による服装イメージ評価の変化—中学・高校・大学生女子の新奇なゆかたに対する印象, 繊維消誌 **44**(11)673-681(2003)

- 12) 呑山委佐子, 小嶋葉子, 田村友香, 女子大生の和服に関する意識と変わり浴衣の受容態度, 大妻女子大学家政系研究紀要 **38**, 31-41 (2002)
- 13) 杉山真理、小林茂雄、女子大学生のゆかたに対するイメージ、共立女子大学家政学部紀要 **40**, 37-42(1994)
- 14) 観光庁 訪日外国人旅行者数および日本人海外旅行者数の推移
http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html
- 15) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発-「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信-, 90-95 (2010), 服飾文化共同研究報告 2009, 服飾分共同研究拠点, 文化ファッション研究機構, 文化女子大学
- 16) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化にかかわる教育プログラム開発の教育デザイン, 横浜国立大学教育デザイン創刊号, 100-103 (2010)
- 17) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発-「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信-, - (2011), 服飾文化共同研究報告 2010, 服飾分共同研究拠点, 文化ファッション研究機構, 文化女子大学
- 18) 薩本弥生, 英国での浴衣着装ワークショップ、衣服学会 (2010)



Fig.11 研究授業の様子

Ⅱ―6. 大学生のアシスタントティーチャー(AT)を活用した附属中学校での授業実践

横浜国立大学教育人間科学部 薩本 弥生・大西 一恵・浅沼絵利香
横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校 中尾由美子
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 菅田 浩美

1. 教師および大学生の「きもの」文化に関わる意識啓発と知識・技能の力量形成に向けた大学での取り組み

本プロジェクトでは中学校や高等学校での家庭科の授業の中で「ゆかた」の着装体験を含めた体験型の学習を通じて日本の子どもたちの心に「きもの」文化を尊重し継承・発展する芽を育てるプログラムの開発を目指している。

そのためには教師の指導力の養成が重要となるため、これまで3年間にわたり、免許状更新講習等の教員研修を実施し、「きもの」文化に関わる意識啓発と知識と技能に関わる指導力向上を目指す試みを実施してきた。また、将来、教員になる本学の学生の指導力向上の一環として授業やその他の場を活用して学生の「きもの」文化に関わる知識と技能養成に向けた取り組みも行ってきた。授業実践の報告に先立ち、大学で取り組んできた内容を紹介する。

将来、家庭科教育を担う教員をめざす家庭科専攻の学生たちに被服製作実習では「きもの」の中でもカジュアルで取り組みやすい「ゆかた」を題材に実習し、「きもの」文化に関して製作を通じて構成面から学ばせている。この実習では被服製作の技能や知識だけでなく、日本人として「きもの」文化の魅力を伝えられるように、着付けの技能の習得のための着付け実習や製作途上で随所に込められた「もったいない精神」への気づきを促す学習を盛り込んでいる。実習の最後には、自作の「ゆかた」を着装して、学内図書館のメディアホールで公開型の「ゆかた」のファッションショーを開催し、毎回盛況である。その後には、非公開で生地を選択や縫製の苦労話、チャームポイントなどを発表し、学生たちがお互いに評価しあう。以下に実習風景およびファッションショーの様子を示す。



実習風景



ショーの風景



ショー後の記念撮影

また、本学で学ぶ留学生対象の「外国人研究者・留学生夕涼みの会」で実施された「ゆかた」着装ワークショップにおいて実習を終えた学生たちにアシスタントを募り、手伝ってもらった。学生たちも留学生との交流の中で着付けの技術を伝授しつつ、交流を持てたことに喜びを感じた感想が得られた。

研究室の学生の一部は免許更新講習での AT や海外での「ゆかた」の着装ワークショップの AT、さらには附属鎌倉中学校主



着付け体験した留学生



着付けをお手伝いした学生たち

催の研究発表会の中で実施された教科別ワークショップ「衣文化（和装の着装）の授業づくり」でも AT として実践に加わった。このような実践を続ける中で学生たちは着付けの技能を高めるとともに、その実践の意義を感じ取っていたようだ。

一方、これまでの授業実践により、着装実習を教師一人での実践は難しいという意見がでている。大学と附属の連携も求められており、学生に現場体験させる機会ともなることから本学では学生たちの学習の場を兼ねて、附属学校での授業実践に数名の学生にアシスタントティーチャー（AT）として参加してもらうことを前提に授業実践を計画した。

2. 附属鎌倉中学校での授業実践

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校での授業実践は教育実習の一環として附属鎌倉中学校の技術・家庭科（家庭分野）の中尾由美子先生と大学の教育人間科学部・家政教育講座の薩本の連携の下に指導を行い、実習生が授業計画を進めた。実習生は学校教育課程・家庭科専攻・薩本研究室所属 4 年の大西一恵である。彼女の卒業研究の一環となることもあり、生徒の実態を把握するためのアンケート調査を中に織り込んである。最初に附属鎌倉中学校の特徴と学習環境について附属学校の先生にご紹介いただいた後、以下、指導を受けつつ実習生が計画した授業実践概要を基に実践内容を紹介する。

2.1 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校の特徴と学習環境

本校は、鎌倉駅から徒歩 15 分の場所、歴史的な建造物が多く立ち並ぶ鶴岡八幡宮の近くにある。海にも山にも近く自然に恵まれた環境で生徒は学習している。教育基本法並びに学校教育法に基づいて、一般普通教育を行うほか次の使命をもち取り組んでいる。

- 大学の教育人間科学部と一体となった、教育の理論と研究の実証
- 教育人間科学部の学生のための教育実習
- 県内外の学校および教育機関に対して、研究成果の発表
- 海外帰国生徒に対する指導および帰国生徒教育の研究

また、教育目標として、豊かな心を持ち、国際社会をたくましく生きていく生徒の育成を目指している。本校の技術・家庭科は、技術分野 1 名、家庭分野 1 名の専任教諭が配置され、各学年 4 クラス（全校 12 クラス）の授業を受け持っている。1 クラス 43 名から 44 名在籍しており、学年には約 15 名の海外帰国生徒が在籍している。帰国生徒の多くは現地校で学習していたため、技術・家庭科の授業そのものを受けていない。そのために、本校で初めて裁縫や調理実習といった技能的な内容に触れることになる。

2.2 授業実践内容

① 計画・検討・交渉

まず初めに、5月23日～6月3日の横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校での教育実習中に本研究の授業実践内容を計画し、大学より薩本・大西が事前に附属学校の教科担当の教諭を訪問し、実施内容について相談し、附属学校の下承が得られた。実習期間に入ってから具体的な時間数、日程などについて実習生が指導教諭と打ち合わせした結果、1クラス3時間の授業時間を割り当てて頂けることとなり、全3時間の授業計画を立てた。その中で、「ゆかた」の着付けをどのように取り入れていくか、きもの文化のこういった面を取り上げるのか、を検討した。また、これまでに行われた、様々な学校での「ゆかた」の着付け授業実践のDVDなどを参考にし、授業を構想していった。

単なる楽しい「ゆかた」の着付け授業で終わってしまうことが無いように配慮し、文化面の学習を着付け授業の前後で行うことを検討した。その結果として、きもの歴史・「ゆかた」の歴史・「ゆかた」の部位の名称・男女の違い着付けの方法の学習を1時間目の授業内容とし、2時間目に「ゆかた」の着付け授業を行い、3時間目に着付けの振り返り・洋装と和装の違い・きものTPO・まとめといった流れの授業を構想した。その際、生徒の学びの実態を把握するために解析用アンケートを行い、着付けの技術の習得具合やきもの文化への興味関心の変化、またそれらの相互関係などをデータ化することを考えた。

2時間目の着付けの実践授業では、ホームルーム(HR)で行うことはスペース的に難しいため、体育館等の広いスペースがとれる場所での実践を計画した。体育館には広い全身鏡が壁面にあることも体育館を着付け実習の場所に選んだ理由の1つである。

② 指導案作成・準備

研究授業となる2時間目の「ゆかた」の着付けの授業を中心に、指導案を作成した(指導案は別紙参照)。また、授業を行うにあたって必要となるワークシートおよびアンケートの作成、事前の生徒たちの身長分布の把握(附属の先生に調査を依頼)およびそれに基づいた「ゆかた」および帯などの備品の必要数量の確認と準備、ATの依頼(先に述べた大学の被服製作実習やその後のボランティアを終え、十分に着付け技能を身に着けた学生3名であったが、授業実践では短時間にポイントを押さえながら着付けの演示を生徒たちの前でするため、ミスがないように実習直前に大学で着付け実習のトレーニングを薩本が実施し、プロジェクトで製作したDVDでよく復習をしておくように依頼した：薩本記)と日程調整と着付け演示に関する事前の入念な打ち合わせなどを行った。また、授業を想定した配置の確認や、リハーサル、イメージトレーニング等を行った。

③ 授業実践

1時間目の文化学習は各クラスの教室内で行い、2時間目の着付けの授業は、1日に2クラスずつ、2日間に分け、前半の2クラスは、体育館が使用できなかったため、急遽、音楽室および合併教室で行った。後半の2クラスは、体育館で行った。DVDによる学習は、準備不足や時間が足りないなどの問題が多かったため、使用せず、ATが示範した。

また、この後半の2クラスについては、授業時間の関係で、もう1時間分授業が出来ることになり、教室内での帯結びの時間を設けることが出来た。3時間目の振り返りの授業

は、再び各クラスの教室で行った。体育館での着付け実習の様子を以下に示す。



女子の着付け風景



男物ゆかた



女物ゆかた

体育館で着装実習する生徒達

AT による示範と実習生による解説

なお、附属鎌倉中学校での着付け実習当日の様子は、教育新聞社の取材を受け、2011年7月7日の新聞に掲載された。

④ 実習生の授業実践の感想

1 時間目の文化学習では、今までの学習内容と変わったということもあり、どのクラスも集中力が高く落ち着いた雰囲気での授業となった。今までの経験と照らし合わせながらも、新たな知識に関心を抱いている様子であった。

2 時間目の着付け実践授業では、教室での授業とは違い、子どもたちの表情がとてもいきいきとしており、1 時間目に学んだ知識を活用しながら積極的に活動する姿が多く見られた。直前に場所が変更になるなどのハプニングもあったが、3 人もの AT の協力などもあり、スムーズに行うことが出来た。臨機応変な対応力の必要性を強く感じた。また、子どもたちも心を開き始めてくれ、授業準備などを自主的に手伝うなどをしてくれた子どもがいて嬉しく感じた。体育館で授業を行ったことに関しては、広い空間でのびのびと行うということが出来るというメリットがあった。また体育館には大きな鏡もあり、自分の帯結びや後ろ姿を確認させることも出来た。しかし、その広さゆえ、教師の声が届きにくいというデメリットもあり、指示が届きにくいということがあった。また細かい説明なども、離れた位置の生徒からはわかりづらいといったこともあった。それとは逆に、音楽室で行った2クラスは一人当たりのスペースが狭く、窮屈な実践になってしまったが、生徒の注目を集めやすく、全体的なまとまりはあった。しかし、男女で別の部屋になってしまったため、男女のペースにずれが生じ、バラバラの時間が多くなってしまった。3 人の AT をつけたことに関しては、教師一人では指導が行き届かないことが予想されていたので、授業を行ってみて改めて出来る限りの協力者に補助を求めることの必要性を強く感じた。しかし、AT にも十分な着付けの能力と指導力が必要であり、現場での授業ではなかなか協力者を得ることは難しいのではないかと思う。また、AT との事前の入念な打ち合わせや技術習得を怠らないことが絶対不可欠であると感じた。着付け DVD を使用しなかったことに関しては、AT の模範を実際に生徒たちに見せることで、より注意を惹き付けられたのではないかと思う。

クラスのほとんどの生徒が興味津々で、しっかりと授業に取り組もうという意欲が見られた。「ゆかた」を着るのって難しい！」「せっかく着たのに脱ぎたくない！」「今年の夏、

着てみようかな！」などの感想を多くの子が、それぞれに述べており、とても有意義な授業になったのではないかと、思う。出来ている子も、そうでない子も、楽しそうに行っていて、生徒たちの自然で無邪気な笑顔が多く見られた。

3 時間目のまとめの授業では、前時の授業の集合写真などを見ながら振り返りをした。1 時間目よりも多くの意見が飛び交い、活発で充実した授業となった。事前準備や計画など教師側の負担は非常に大きい、子どもたちにとっても自分自身にとっても、とても良い経験となったと思う。授業後は、達成感でいっぱいだった。

⑤ 附属学校教諭の実習後のコメント

今回の「ゆかた」の着付けは、ほとんどの生徒が初めて取り組んだ学習でもあり、どの生徒にも新鮮なものとなった。特に大学との連携を図ることにより、教材や複数の指導者による授業実施は、公立の学校に比べ非常に恵まれた環境で行うことができた。今回のような教育実習中での取り組みは、普段の授業において個別指導の充実を図るための授業構成や指導方法の改善にもつながった。教材の準備や指導者の技術的な面など課題は多く残るものの、今後の学習に向けて、非常に参考になる取り組みとなった。

⑥ アンケートの解析結果のまとめ

アンケートでは、特にゆかたの着装実習において技能の理解・習得に力点を置いた授業実践を試行的に行い、技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起するかを明らかにすることを目的とした。これらの授業実践研究から得られた結果を以下にまとめる。

(1) 因子分析によって抽出された全 5 因子を相関分析した結果、「興味関心因子」と「理解習得因子」に高い相関があることがわかった。

(2) 共分散構造分析の結果、「理解習得因子」から「興味関心因子」へのパス係数が有意であった。このことから「**技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起する**」という仮説が成り立つことが立証された。さらに男女による差異、帯結び部分練習の有無による差異を検討した結果、有意に差が見られた。以上の結果から、男女でのゆかたの色柄の違いや着付けの難易度の違いがある中で男女ともに、きもの文化に対する興味関心や理解習得を肯定的にとらえるために授業のさらなる工夫の必要性が明らかになった。着付け技能の理解・習得をめざした授業作りのために部分練習をすると理解習得意識が高まり、それが興味関心喚起に結びつくことがわかった。授業時間数が縮小傾向の中での時間数の確保が課題である。

2.3 授業実践後の反省会のまとめ

<学習環境・設備に関しての課題>

事前準備

・訓練して技能を習得した複数の AT（生徒 10 名に 1 人）を募れば、十分に 1 時間でも着付け実習の授業実践が可能という実証となった。一般校では、地域か、保護者の協力を仰ぐ体制づくりが現実的である。附属の場合は、附属と大学の連携の一環として、大学生の AT を継続的に派遣できるよう着付けの技能習得を大学の被服実習の一環とすることも検

討していく。

- ・ゆかたはサイズ毎に袋を色分けし身長順に並べ、生徒も身長順に並んで端から選ぶとサイズが極端に合わない事が減る。男子は対丈（着丈＝身丈）なのでサイズ適合性が特に重要。

- ・視聴覚資料を用意する場合、直前にコンピュータ、DVD やプロジェクター等機器の動作確認をする。

- ・DVD・パンフレットは初学者にはやや高度すぎ、難解なところがあるため、中学生向けの授業用に着付けの際のポイントを絞り込んだプリントを用意するとよい。

実習場所について

- ・体育館は鏡もあり、十分な広さがあって良かったが、並ばせ方が縦長に並ばせたので、後ろの方の生徒にはATの師範が見えにくかった。この点は、音楽室で、横長に並んで前後男女2列という並びの方が、ATの師範が良く見えた。また、教室の方が先生の声は届きやすく、声掛けで注意喚起がしやすい。



教室での並ばせ方

<指導上の留意点>

授業の目標設定および生徒への周知に関して

- ・技能教科としてのねらいはどこにあるのかを、最初にきちんと伝え、周知する。

- ・限られた時間数の中で技能面の習得・定着までを目標にすることは現状では難しいと感じられた。

- ・衣生活領域の他の学習とどのようにつなげていくのが良いかを今後、検討する必要がある。



体育館での実習時の並ばせ方

ペア学習をすることに関して

- ・ペア評価という想定で自己評価、他者評価のシートを用意しておいたが、各自で着てみるだけになり、ペア評価をするということが十分に説明して伝えられていなかったため、周知できず、また、授業時間中の記入は時間的に難しかった。

授業進行に関して

- ・帯結びの部分練習をする時間が取れたクラスでは、着付けの実習の時にスムーズに授業が進み、たたみ方までが1時間の授業内に無理なく実践できた。

- ・ゆかたをはおる途中まで男女同時進行にし、時間短縮を図った。

- ・男物のゆかたの実習は2人のATが各々10人ずつ担当し、半円形に囲ませて、実演しながら着付けさせたので指導が行きとどきやすく、帯結びの完成度が向上した。

- ・女物のゆかたの実習もメインの教師と1人のATの2名で各々10名ずつくらい担当した。二列に並んでの着付けで教師が巡視するやり方をした。男物の実践のように囲ませて実演しながらの着付けは実践してしていない。



同時に実演しつつの着付け指導

- ・たたみ方の師範の時に、良く見えるところまで生徒を一旦集めて、師範できなかったため、たたみ方が十分に周知できなかった。
- ・実演時の説明で、パンフレットかプリントの図を確認させ、紙媒体の資料の活用を復習に用いるように声掛けする。
- ・限られた時間数の中で技能面の習得・定着は難しいと感じられた。
- ・衣生活領域の他の学習とどのようにつなげていくのが良いかを今後、検討する必要がある。

ゆかたの着装の師範の際のポイントの説明について

- ・AT と授業者との息が合ってきて、とてもスムーズに示範と説明が進められていた。

・「上前」が左右どちらか、「おはしより」をする時に手を入れるところは？」と身八つ口の名称を問うなど、男女のゆかたの違いを生徒に発問する形で着付けの説明に織り込んで、きもの独特の名称の確認をしていた。

・ゆかたの身ごろを体に巻きつけるときは、裾の角（裄先）を5cm位あげ裾すばまりにする。

・おはしよりを整えるところで身八つ口から手を入れるように指示する。前身ごろ側だけでなく後ろ身ごろ側にも手を入れて下に向けておはしよりを整える事を実演し、説明する。

・女子の襟の後ろ中心の衣紋の抜き方で、後ろ手に背中心をつまんで下に引き、コブシー一個分衣紋を抜くこと（右図参照）を実演し、説明する。

・襟の前側を整えるとき、左身ごろは身八つ口から手を入れて右前の襟を胸の高さで持ち、右身頃は直接外から持ち、胸の膨らみにそれぞれ被せるようにすると、襟元がタイトになるので、実演してみせ、説明すると良い。

・伊達締め、男物腰ひも（男締め）の後ろで内側と外側の交差するところは内側を折り上げるようにすることを実演し、説明する（右図参照）。

・伊達締めと男物腰ひもは「交差させないとゆるんでくるため、長時間着る時にゆるまないためには、これが重要です」と「2回、からげた後、交差させる」理由を説明する。

・最初の帯結びのところは「手を下にたれを上になるように持ちかえた後、手の上にたれを被せて（右図参照）間をくぐらせて下から上に引き出す」という説明が、分かりやすかった。

・帯結びの最初で女子ではて先の60cmを縦に2つ折りにして右肩に預けた後、「体の胴部に巻くところで「く」の字」になるように広げてから巻く」と説明するとタイトにまきやすい。男子では30cmの手先の後、体に巻きつけるところで同様の説明があると良い。



おはしよりの整え方



襟の衣紋の抜き方



腰ひもの後での交差の仕方



たれとての交差

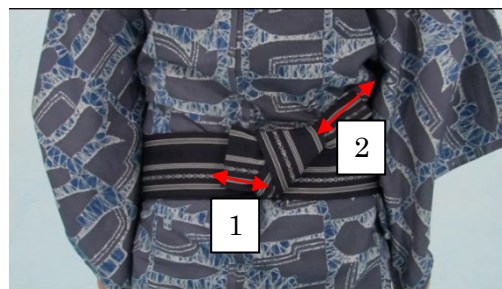
・女子で胴に帯を2回巻いた後に手を左手に抱えるように持ち、右手もたれを抱えるように持った状態で右手をぎゅっと引くと帯が体のウェスト部にタイトに巻かれ、緩みにくくなり、着崩れにくくなる。

・男子の貝の口の完成図で「て」と「たれ」の長さのバランスが2対1くらいだと良い」という説明をいれるとサイズの目安になる（右図参照）。長すぎたら畳みこんで長さ調節することを知らせる。

・文庫結びでたたんでおいたたれを「広げて整えてから後ろに回すこと」の説明と実演。さらにたれは、コブシー個分位帯から離れるように立体的にするとかつこ良いことを説明。

・文庫結びの屏風たたみの最後の所を中心に来るように畳む方法の説明が難しい。

※上記で下線を付けた所は「きもの」独特の名称。パンフレットで名称を確認するとよい。



貝の口の「て」と「たれ」の長さの比

3. 附属横浜中学校での授業実践

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校での授業実践は教育実習の一環として附属横浜中学校の技術・家庭科（家庭分野）の菅田浩美教諭が大学の教育人間科学部・家政教育講座の薩本の連携の下に指導を行い、実習生が授業計画を進めた。実習生は学校教育課程・家庭科専攻4年の浅沼絵利香である。最初に附属横浜中学校の特徴と学習環境について菅田教諭が紹介し、以下、指導を受けつつ実習生が計画した授業実践概要を基に実践内容を紹介する。

3.1 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校の特徴と学習環境

本校は、市営地下鉄弘明寺駅から徒歩1分の場所にあり、鎌倉街道に面した校門を一步くぐると、外部の喧噪を忘れさせてくれるような静かな空間が広がっている。戦災をまぬがれた建物は、横浜市内でも指折りの文化的建造物として評価されている。

本校の技術・家庭科は、技術分野1名、家庭分野1名の専任教諭が配置され、各学年3クラス（全校9クラス）の授業を受け持っている。生徒は附属横浜小学校から入学した生徒が約半分、海外帰国生徒が学年に約15名在籍している。本校は、横浜国立大学教育人間科学部附属中学校として、鎌倉中学校と同様の役割を担っており、また、神奈川県立光陵高等学校との連携による中高一貫教育も推進している。

3.2 授業実践内容

① 計画・検討

まず、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校での教育実習に先立ち、附属横浜中学校の技術・家庭科（家庭分野）の菅田浩美教諭と実習生が大学の教育人間科学部・家政教育講座の薩本の元に来訪し、打ち合わせを行い、きもの文化を題材にする意義や目的、必要な教材等について協議し、着つけの事前トレーニングを実施した。具体的な時間数、日程などについては実習生が指導教諭と打ち合わせした結果、衣生活の導入の授業は指導

教諭が実施し、その後の実習生による「きもの文化」に関わる授業は全2時間の授業計画を立てた。

② 指導案作成・準備

研究授業となる1時間目の「ゆかた」の着付けの授業を中心に、指導案を作成した(指導案は別紙参照)。また、授業を行うにあたって必要となるワークシートおよびアンケートの作成、事前の生徒たちの身長分布の把握(附属中教諭に調査を依頼)およびそれに基づいた「ゆかた」および帯などの備品の必要数量の確認と準備、ATの依頼(附属鎌倉中学校同様、被服製作実習等で十分に着付け技能を身に着けた学生2名に実習直前に大学で着付け実習のトレーニングを薩本が実施し、DVDで復習をしておくように依頼)。

③ 指導案

- 1 日時 2011年9月8日 第3校時
- 2 学年 2年A組
- 3 場所 レクチャールーム
- 4 題材名 「日本の衣文化に触れよう」
- 5 学習計画

時間	題材	内容
1 時限目 (本時)	ゆかたの着付け	・ ゆかたの着付けを行う。
2 時限目	きもの文化	・ 平面構成と立体構成について理解する。 ・ 現代のきもの文化について話し合う。

(a)1 時間目

6 題材観

きものは日本の伝統的な衣服であり、他国にも誇れる美しい文化である。現代でも結婚式や成人式など、様々な場面にきもの文化が根付いている。しかし、家庭や地域でのきもの文化の伝承が行われにくくなり、生徒がきものに触れる機会はとても少ないと感じる。

この題材では、私たちの最も身近にあるきものであるゆかたに焦点を当て、日本の伝統的な衣服や日本人の考え方などを感じさせることを狙いとしている。実際に生徒全員がゆかたを着てみることで、ゆかたの特徴、自身の見え方や気持ちの変化を五感で感じさせ、きもの文化の良さを味わってもらいたい。また、きものの構成や文化を学習することで、日本人が古くから持つ「物を大切にする」という考え方についても触れていく。きものを通して日本の伝統を学び、きもの文化を自身と結びつけることで、これからの生活をより豊かにする手立てとしてほしい。

7 本時目標

- ・ ゆかたを着た時の自身の気持ちやゆかたの特徴を味わう。
- ・ ゆかたの着付けの手順を理解する。

8 本時展開

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入 10 分	・ 背の順に整列しゆかたを受け取る。 ・ AT への挨拶を行い、本授業の流れを確認する。 ・ 着付けのポイントを確認する。	・ 事前に教室にゆかたセットを、男女ごとゆかたのサイズ順に並べておく。 ・ 男女で別れ、背の順のペアで並ばせ、配置されているゆかたを持たせる。 ・ AT を紹介し、本時の流れを説明する。 ・ 着付けの合間や終わった後に、感想カードを記入するように指示する。 ・ ゆかたの着付け見本をみせながら着付けのポイントを確認していく。
展開 20 分	・ グループに分かれ、ゆかたの着付けを実践する。	・ グループに分け、教師および AT が助言をしながら、ゆかたの着付けを始めさせる。 ・ 生徒同士で着付けを確認したり手伝いをしたりして着付けるよう指導する。 ・ 着付けが完成した生徒には、自分の姿を鏡でチェックしたり、他の生徒の様子を見に行ったりするよう指導する。 ・ 感想カードの記入のタイミングを助言する。
10 分	・ 正しいゆかたの畳み方を学び、片づけをする	・ 小物などは、畳んで先に入れ物にしまうように指示する。 ・ グループごとに、教師及び AT がゆかたの正しい畳み方の見本を見せながら指導する。 ・ 全て片付け終わった生徒は、感想カードへの記入作業をするよう指示する。
ま と め 5 分	・ 本時のまとめを行う	・ 男女ごと背の順に整列させ、ゆかたセットをもとの位置に戻す。 ・ 本時のまとめを行い、次回の授業内容について伝える。 ・ 感想カードの記入が終わっていない生徒には、次回の授業時までに、記入してくるよう指示する。

評価

- ・ ゆかたの特徴や、ゆかたを着ている時の自分の気持ちを捉えることができたか。
- ・ 自分自身でゆかたの着付けを行い、着付けの技能を習得することができたか。

(b)2 時間目

6 題材観

- ・ゆかたの着付けを通して、ゆかたの特徴や自身の気持ちの変化を感じ取ってほしい
- ・自身の生活ときもののかかわりについて学ぶことで、きもの文化をより身近に感じ、これからの生活をより豊かにする手立てとしたい
- ・着付けやきものの学習を通して、日本の伝統的な考え方や気持ちを感じ取ってほしい

7 本時目標

- ・きものの特徴について理解し、きもの文化の考え方に興味を持つ
- ・現代ときもののかかわりに気づき、自身ときもののかかわり方について考えを持つ

8 本時展開

時間	学習活動	留意点
0～10	○前回の授業の振り返り ・ゆかたの部位の名称を確認する ・ゆかたを着てみての感想や気づいて点を発表する	・ワークシートを配り、ゆかたの部位の名称を書きこませる ・ゆかたを着てみた感想や気づいたこと、疑問を問いかける
10～30 30～45分	○平面構成と立体構成について学習する ・着なくなったゆかたの行方について考える ・平面構成について学習する ○きもののかかわり方を考える ・きものに触れた経験や知識について話し合い、現代の生活や自身ときもののかかわりについて考える	・ゆかたのリサイクル方法を紹介し、当時の人の物を大切にすることを感ぜられるようにする ・平面構成と立体構成の衣服の展開図を提示し、それぞれの特徴を説明する ・生徒のやり取りを踏まえながら補足説明を行う ・現代でも様々な場面できものが活用されており、場面ごとにきものが異なることに気づかせる ・当時の人が気持ちを伝える方法としてきものを活用していたことを理解させる
45～50分	○本時のまとめを行う ・本単元を振り返り、ワークシートを記入する	・生徒が学習から感じたこと、これからの生活にいかしていきたいことなどを記入させる

評価

- ・きもの時代の人々の考え方について理解することができたか
- ・きもののかかわり方に関し自分なりの考えを持つことができたか

④ 実習生の授業実践の感想

今回私は、教育実習生という立場で、附属横浜中学校の 1、2 年生を対象に授業をさせていただいた。実習を始める前の私はきものに全くなじみがなく、自分自身に着つけることすら満足にできない状態からのスタートであった。

きものに対する知識や経験がなく、また授業時間も限られている中の着つけの授業で私が大切にすることは、きものを着る技能やきものの知識の習得ということよりも、生徒にきものに触れた感覚や自身の気持ちの変化を感じ取ってもらうことであった。1 年生は 2 時間、2 年生に至っては 1 時間の中でのゆかたの着つけ実習であったが、生徒たちは一生懸命活動に取り組み、着つけの大変さに驚いたりゆかたを着た自身と友人の姿を楽しんだり、たくさんの感覚を使ってゆかたと向き合うことができたのではないかなと思う。

着つけ実習の後にはきもの文化に関する学習を行った。きものの構成や現代に残る文化を学習する中で、日本人の伝統的な考え方に触れさせることが目標であった。生徒たちは自分たちなりにこれからの自身ときもののかかわりについて考えており、その意見は私にとっても大変勉強になることばかりであった。

今回授業を行うことができたのは、大学の教授と附属中学の教科担当の先生のご指導があつてのことだった。先生方が新しいことにチャレンジし、常に学び続けるという姿勢があつたからこそこのような授業をすることができたのだと感じる。準備が大変でなじみの少ない人も多いきもの学習であるが、生徒の心に響くとてもたくさんの魅力を持った単元である。是非、多くの先生方と生徒に触れてほしい内容であると実感した。

⑦ 附属学校教諭の実習後のコメント

「ゆかた」を着てみたいというだけでなく、自分で時間内に「ゆかた」を着なければならぬという気持ちもあり、生徒は着付けの説明を熱心に聞いていた。小グループでの着付けだったので、生徒ができないところは比較的早く支援にまわりやすかった。着付けが終わると男女ともうれしそうで、いい笑顔でお互いの装いを鑑賞しあっていた。全員が「ゆかた」を実際に自分で着るという体験型の学習は、「きもの」の良さや楽しさを体感でき、「きもの」文化への関心につながる。今回の「ゆかた」の着付けは、ほとんどの生徒が初めてというだけでなく、教える側も初めてで、授業を通して学ぶことが多かった。

4. まとめ

本学の実践の特徴は、複数の AT となる大学生を活用しての着付け実習を含むところにあった。

過去 2 年間の実践を通して教師自身の「きもの」文化に関わる意識啓発と知識・技能の力量形成が重要であることが明らかとなってきたので、本学では将来、家庭科教員を目指す学生たちに 2 年生の被服実習の「ゆかた」製作から始まり留学生や海外の中学生・大学生対象の着装ワークショップや免許更新講習の AT など、着付けの技能を中心に「きもの」文化に対する意識啓発と技能習得のための様々な取り組みを行ってきた。それらに積極的ににかかわった学生たちに実習生、AT として協力してもらい、附属学校の教師との連携の元に教育実習でパイロット的に授業実践の機会をいただき、無事、一定の成果を収めることができた。附属と大学の連携の一環として、大学生の AT を継続的に派遣できるよう着

付けの技能習得を大学の被服実習の一環とすることも検討していきたいと思う。

附属学校という地域のリーダー的な実践校での実践であり、設備や教材などの学習環境、教師の実践力向上に向けての周りの支援、さらに生徒の質の高さ等々が整っているため出来た実践という面はあり、一般校ですぐに同じ実践ができるかという点、難しいところはあるかもしれない。しかし、環境を整えれば、元は、ほとんど「きもの」文化に関する基礎がなかった学生たちであったが、数年間での様々な実践の結果、「きもの」文化に関わる意識啓発と知識・技能の力量がある程度身に付き、生徒に感動を与える授業実践が可能となった。したがって一般校でも、実習の場面では地域か、保護者の協力を仰ぐ体制づくりを整えて行くことで可能となると思う。

また、環境の許す範囲で是非、現場の家庭科の先生方に本プロジェクトの実践の一部分でも授業の中に取り入れて、子どもたちの心に「きもの」文化を尊重し継承・発展する芽を育てるための実践にチャレンジしてほしいと考える。

実習生を含め、ATの学生にとっても貴重な学習の場を与えていただいた。

附属鎌倉中学校校長の西村隆男先生、ご指導いただいた中尾由美子先生、附属鎌倉中学校主催の研究発表会でお世話になった尾崎誠先生他の附属鎌倉中学校の先生方、附属横浜中学校校長の蝶間利男先生、ご指導いただいた菅田先生他、お世話になった附属横浜中学校の先生方にこの場を借りて感謝の意を述べる。

技術・家庭科(家庭分野)学習指導案

指導教諭 中尾 由美子 教諭 印
指導者 大西 一恵 印

1 指導の対象と日時・学級・場所

指導時期：平成 23（2011）年 5 月～6 月

指導対象：第 2 学年 4 クラス（各クラス男子 22 名前後、女子 22 名前後、計 45 名前後）

指導場所：1, 3 時間目；各クラスのホームルーム）、2 時間目；体育館か床面積が広い教室（音楽室・多目的室）

2 題材名 「日本の衣文化に触れよう！」

3 題材観

我が国の子どもたちの衣生活の現状として、核家族化の定着、既製服や便利な機器の普及、家事の外部化によって、子どもたちが家庭で手作りの衣料品や小物を使用することは少なくなり、ほぼ市販のものを使用する姿しか目にしなくなった。衣料品や小物がどういった過程を経て製作されるのか、製作過程での技術を知らない子供も少なくない。さらに、生活技術のみでなく、生活文化全般、親から子、子から孫へと伝承する機会が減少している。

繊維産業の発展、国際化・情報化の進展によってモノの入手が容易になる中で私たちの価値観は変化し、毎日毎日、当たり前のように好きな見た目・ブランド・形状のバックなどの小物、又は衣服などを購入し、また別のものが必要になれば新たなものを購入し、傷んでなくても気に入らなくなるとタンスに死蔵するか、処分する。これらのものはファストファッション等の流行により、更にリーズナブルになり、この傾向が加速している。その結果、一着の服への愛着は薄れていった。

そうした時代の流れに伴い、日本の伝統的な衣服であるきものを目にする機会も減り、その美しさや神秘性などをじっくりと鑑賞したり、知識を得たりする機会もほとんど無い。せつかくの伝統ある我が国のきもの文化でも、単なる古きものとして、おざなりに考える現代人が増えているのも事実である。

そこで、中学生という多感な年齢の時期に、なるべく様々な文化に触れることによって、改めて自国の古き良き文化を、大いに感じ取ってほしい。また、実際にゆかたの着付けを行うことで、きものの良さを体感し、技能の習得だけでなく、深く衣生活を考えるきっかけとなるよう、展開していきたい。

4 生徒観

好奇心旺盛で活発な面が多く、授業にも積極的に取り組む生徒が多い。挙手する生徒も多く、ユーモア溢れ、男女の仲も良い。また、中学生はおしゃれに興味を持ち始める時期でもあり、他者から見た自分を強く意識し始める年齢でもある。衣生活の学習を通して、日本の衣文化を五感で存分に感じとってもらい、新たな自分の一面や、新たなクラスメイトの姿を見出してほしい。

5 題材の学習目標（Ⅰ：関心・意欲・態度 Ⅱ：生活を工夫し創造する能力 Ⅲ：生活の技能 Ⅳ：知識・理解）

Ⅰ：きもの文化および着装への関心をもち、自分の衣生活と結び付けて考えようとする。

Ⅱ：自国の衣文化に触れ、自分の衣生活を見つめ直す。

Ⅲ：自分自身でゆかたの着付けを行い、着付けの技能を習得する。

Ⅳ：我が国伝統の衣文化である、きものの歴史を学び、文化を理解する。

6. 題材の指導計画（全3時間扱い）

小単元	時間	主な学習活動	備考
日本の衣文化を知ろう (本時)	1 時間	きもの文化とゆかた、及び着付けについて学ぶ。	教室内で行う。
ゆかたの着付けをしてみよう	1 時間	ゆかたの着付けを体験する。	体育館で行う。
着付けの振り返りとまとめ	1 時間	ゆかたの着付けの振り返りをし、単元のまとめをする。	教室内で行う。

7. 授業の展開

(ア) 1 時間目

本時の学習目標(Ⅰ：関心・意欲・態度 Ⅱ：生活を工夫し創造する能力 Ⅲ：生活の技能 Ⅳ：知識・理解)

Ⅰ：きもの文化および着装への関心を深める。

時間	指導内容	生徒の学習活動	指導上の留意点(・)、評価の視点(※)	備考
導入 15 分	世界の国々の衣服 日本の衣服	- 日本以外の世界の国々では、どんな衣生活をしているのか考える。 - 世界の国々の衣服の写真を見て、気付いたこと、それを見てどう感じたか発表する。 - 日本の伝統的な衣文化について考える。	- 世界地図および世界の国々の衣服の写真から、世界の国々の衣服の特徴、現状などを大まかに説明する。 - 世界地図から日本にスポットを当て、日本の衣服の写真を数枚提示する。 - 生徒たちに既存の知識を問いか、挙手により発表させる。	一斉 資料1 (世界の国々の衣服の写真および地図) 資料2 (日本の衣服の写真)
展開 25 分	日本の伝統的な衣文化 ゆかたの歴史	- アンケート①を記入し、自分自身のきものの体験を振り返る。発表する。 - 日本の伝統的な衣文化、きものの歴史を学ぶ。 - ワークシート①の確認をする。 - 現代の人々と昔の人々(特に江戸時代の庶民)との衣生活の違いについて考える。 - 我が国の伝統の衣生活について考える。	- アンケート①を配布し、記入。確認の為、机間巡視をする。 - アンケート内容の発表を促す。 *積極的に挙手し、発表することが出来るか。(関心) - きものやゆかた、十二単などの写真を提示し、歴史や古典の授業で学習したことを思い出させながら、発表を促す。 - ゆかたの歴史を確認する。 - ゆかたの部位の名称の確認・復習をする。 *ワークシートへの記入が出来るか。(知識)	一斉 アンケート① ワークシートの拡大版を黒板に提示 ワークシート① 配布 資料3 (きもの資料)
まとめ 10 分	ゆかたの着付けの予習およびまとめ	ゆかたの着付けについて学ぶ。	次の授業で行うゆかたの着付けについて確認する。	一斉

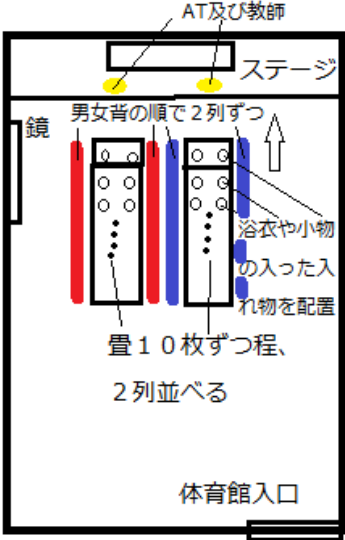
		・ワークシート①に今日のまとめを記入する。 ・今日の授業で感じたこと、思ったことなどを振り返る。	・ワークシート①のまとめ・感想欄を記入させる。 ・来週、実際にゆかたの着付けを行うことを伝え、手順や諸注意などを説明する。 ・並び方やペアの説明などをする。	アンケート①とワークシート①回収
--	--	---	--	------------------

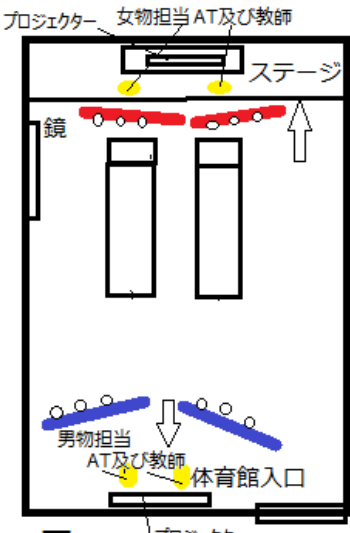
評価) I : きもの文化および着装への関心を深めることができたか。(ワークシートの記述、観察)

(イ) 2 時間目

本時の学習目標(I : 関心・意欲・態度 II : 工夫・創造 III : 技能 IV : 知識・理解)

III : 自分自身でゆかたの着付けを行い、着付けの技能を習得する。

時間	指導内容	生徒の学習活動	指導上の留意点(・)、評価の視点(*)	備考
導入 10 分	前回の振り返りおよび本時の流れを説明	・AT への挨拶を行う。 ・本授業の流れを確認する。 ・前回記入したワークシート①内容とパンフレットの内容を確認し、復習する。 ・入れ物からゆかたと小物類を取り出し、各自で着付けの準備をする。	・体育館に、男女で別れ、背の順のペアで並ばせる。 ・AT の紹介をする。 ・本授業の流れを説明する。 ・ゆかたの着付けをする準備および諸注意をする。 ・ワークシート①の内容を復習し、パンフレットで補足する。 ・着付けの合間や終わった後に、ペアと評価シートを記入するように指示する。 ・目の前に置いてあるゆかたと腰紐、帯などを入れ物から取り出し、確認をさせる。	一斉 ・事前にゆかたセット(手提げの中に、女子はゆかた・帯・腰紐2本・伊達締め・パンフレット、男子はゆかた・角帯・腰紐・パンフレット、が入ったもの)を、図1のように体育館に並べておく。 ・評価シート配布。  図 1 畳の配置については、事前準備の時間によって省略。
展開 30 分	AT による実演	・AT の実演を見て、男物、女物の着付けの仕方を学ぶ。 ・AT の実演を見ながら、各部位の名称やポイントを復習する。	・男女それぞれの AT が実際に着て、生徒たちに手本を示す。 ・実演を止めながら、ゆかたの各部位の確認や着付けのポイントなどを指導する。	一斉 ・帯締めの手前まで男女の AT は同時に行い、帯締めは初めに女物担当の AT が、次に男物担当の AT が、実演していく。

	ゆかたを着付ける	・男女別に分かれ、ゆかたの着付けを実践する。 ・ペアで評価シートの項目のチェックをし、互いに評価する。	・男女に分け、教師およびATが助言をしながら、ゆかたの着付けを始めさせる。 ・着付けが完成した生徒には、自分の姿を鏡でチェックするように指示する。 ・評価シートの記入のタイミングを助言する。 ＊自分自身でゆかたの着付けを行い、着付けの技能を習得することができたか。(技能)	男女別 図2のように生徒とATを移動させる。  図2 ・全員着付け終わったところで、集合写真の撮影。
ま と め 10 分 本時のまとめ	ゆかたの畳み方	・最初の集合場所に並び、ゆかたを畳の上に広げる。 ・正しいゆかたの畳み方を学ぶ。 ・評価シートを完成させる。	・帯などを外し、ゆかたを脱ぎ、畳の上に広げるように指示する。 ・小物などは、畳んで先に入れ物にしまうように指示する。 ・ゆかたの正しい畳み方の見本を見せながら指導する。 ・畳み終えたものは、元の位置に戻すように指示する。 ・全て片付け終わった生徒は、評価シートへの記入作業をするよう指示する。 ・本時のまとめを行い、次回の授業内容について伝える。 ・パンフレット・評価シートを回収する。 ・評価シートの記入が終わっていない生徒には、次回の授業時まで、記入してくるように指示する。	一斉 ・ゆかたを脱ぎ終えたら、図1の場所に戻るよう指示。 ・ゆかたや畳なども、全て最初の位置に戻す。 ・パンフレット、評価シートを回収。

評価) Ⅲ：自分自身でゆかたの着付けを行い、着付けの技能を習得することができたか。
(着付けへの取り組み、出来栄、評価シート)

(イ) 3 時間日本時の流れ

本時の学習目標(Ⅰ：関心・意欲・態度、Ⅱ：思考・判断、Ⅲ：技能・表現、Ⅳ：知識・理解)

Ⅱ：自国の衣文化に触れ、改めて自分の衣生活を見つめ直す。

Ⅳ：我が国伝統の衣文化である、きものの歴史を学び、文化を理解する。

時間	指導内容	生徒の学習活動	指導上の留意点(・)、評価の視点(*)	備考
導入 15 分	前回の振り返り	・ワークシート②へ前回の授業の振り返りを記入する。 ・ゆかたの着付けをペアで行うことによって、得られた気づきや疑問を発表する。	・ワークシート②を配布し、記入させる。 ・机間巡視をする。 ・ワークシートの拡大版を黒板に貼る。 ・前回の授業のゆかたの着付けにおける感想を発表させる。 ・ゆかたの着付けをしてみてもの気づきや疑問などを問いかける。 ・発表内容を拡大版に書き込んでいく。	一斉 ワークシート② 拡大版を黒板に提示
展開 25 分	きものの学習	・洋装と和装との違いを学ぶ。 ・きものの TP0 について学ぶ。 ・ワークシートへの記入をする。	・生徒とのやりとりを踏まえながら、知識の補足説明や、資料提示によって、きものについての理解を深めさせる。 ・様々な視点から、被服の社会的機能を理解させる。 ・黒板に提示したワークシート②の拡大版に書き込みを行い、手本を示す。 *ワークシートの空欄への記入が来ているか。	一斉 資料4 提示
まとめ 10 分	単元のまとめ	・ワークシート②に今日のまとめを記入し、発表する。 ・本単元全体を通して、感じたこと、思ったことなどを振り返る。 ・アンケート②を記入する。	・ワークシート②のまとめ・感想欄を記入させ、発表を促す。 ・本単元で得られた知識や価値観などを、今後の衣生活において生かせるよう、まとめる。 ・机間巡視を行う。 ・アンケート②を配布し、記入させる。 ・挙手をさせ、発表させる。 *自国の衣文化を学んで、自分なりに感じたことをまとめられているか。(工夫)	一斉 アンケート② アンケート②とワークシート② 回収

評価)

Ⅱ：自国の衣文化に触れ、改めて自分の衣生活を見つめ直すことができたか。(ワークシートの記述、観察)

Ⅳ：我が国伝統の衣文化である、きものの歴史を学び、文化を理解する。(ワークシートの記述)

Ⅲ. 教員研修を担当して

埼玉大学教育学部 川端博子
横浜国立大学教育人間科学部 薩本弥生

2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重しわが国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展を寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。これを受け、中学校の2008年3月の学習指導要領告示および2009年3月の高等学校学習指導要領告示では、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受けとめ、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。各教科では伝統や文化に関わるさまざまな内容が検討されている。家庭科に関する新学習指導要領において以下のような記載がある。

中学校学習指導要領（2008年3月告示）（中学校 技術・家庭）

C 衣生活・住生活と自立

○（1）衣服の選択と手入れの中で、ア 衣服と社会生活とのかかわりを理解し、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できることを指導する。ここでは、「和服の基本的な着装を扱うこともできること」

高等学校学習指導要領（2009年3月告示）（高等学校 家庭総合）

（4）生活の科学と環境 イ 衣生活の科学と文化

○「着装、被服材料、被服の構成、被服管理などについて科学的に理解させ、衣生活の文化に関心をもたせるとともに、必要な知識と技術を習得して安全と環境に配慮し、主体的に衣生活を営むことができるようにする」

しかし、中学校の学習指導要領には、衣服の選択・手入れと和服の取り扱いの関連性が示されておらず、和服の着装をどう取り扱うかが問われている。平成24年度改訂の中学校教科書および今後改訂される高校学校教科書にも、和服の着装の掲載が予想されるが、参考となる実践報告も少ない。

このような背景とともに、協力校の先生の懇談の中でも、まずは教師が関心を抱き、知識や技能を習得することが必要であると考えた。免許状更新講習・県との連携による各種講座・附属中学校の研究会などの機会をとらえて、本プロジェクトの教育実践を紹介するとともに、ゆかたの着装を中心とするきもの文化に関する研修を実施してきたので、その内容と効果について報告する。

1 実施内容と参加者

1.1 埼玉大学

- 1.1.1 平成22年度免許状更新講習「文化の伝承と被服」（平成22年8月17日 15名）
平成22年度認定講習[被服]（平成22年8月27日 10名）
- 1.1.2 平成23年度免許状更新講習「文化の伝承と被服」（平成23年8月23日 19名）

1.2 横浜国立大学

- 1.2.1 平成22年度免許更新講習「ゆかたの着つけを通じて和服文化を伝える」（平成22年8月18日 19名）

1.2.2 平成 23 年度免許状更新講習「ゆかたの着つけを通じて伝えるきもの文化」
(平成 23 年 8 月 18 日 20 名)

- 1.2.3 【横浜国立大学教育人間科学部教育デザインセンター連携講座】
講義「確かな学力をはぐくむ家庭科の指導」(神奈川県立総合教育センター主催)
① クールビズなど、環境共生型衣服の着用面からの学習に向けた提案
② きもの文化伝承・発信のための着装体験型授業の提案
(平成 23 年 8 月 3 日 家庭科教師 16 名)

1.2.4 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校平成 23 年度研究発表会
教科別ワークショップ~衣文化(和装の着装)の授業づくり
平成 23 年度免許更新講習「ゆかたの着つけを通じて伝えるきもの文化」
(平成 23 年 10 月 29 日:研究発表会:家庭分野 27 名(内 7 名ワークショップ受講))

2. 参加者の背景と講習への希望

2.1 埼玉大学

家庭科教師の人数が少ないために、免許状更新講習に関して家庭科関連の科目は全般的に希望者が少ない傾向であった。受講に際し、ゆかたと小物の持参を課したにもかかわらず、2 年とも定員(実習を含むため少人数制とした)を満たしたこと、埼玉県外の参加者が多かったのは、それなりのニーズがあることを表しているといえる。受講者の 6 割は家庭科の教師であり、受講者の半数は中学校で教鞭をとる教員であった。

2.2 横浜国立大学

免許状更新講習受講者の中で家庭科の教師の割合は平成 22 年度には 2 割(4 名)で、それ以外は他教科の受講生で、その傾向は平成 23 年度にはさらに顕著となり家庭科 1 名の他は他教科であった。着装を含め伝統文化としてのきもの文化が幅広く関心を持たれている実態を反映していると思われた。その他の神奈川県立総合教育センター主催の教員研修では、地震後のニーズを受けて環境共生型の衣服の着用面の講義ときもの文化の講義を入れ込んだため、体験はミニチュアのきもの作り方のみとしたが、家庭科での授業導入の意欲は感じ取られた。附属中学校研究発表会のワークショップでは、参加人数は少なかったが管理職や主導主事経験者が参加され、今後の授業導入に意欲的な意見をいただき、手ごたえを感じた。

3. 講習内容

3.1 埼玉大学

平成 22・23 年度免許状更新講習 「文化の伝承と被服」の内容

9:30~11:30	講義:きもの・ゆかたの歴史・文化・染織 平面構成と立体構成 演習:ミニチュアのきもの作り ¹⁾ 実習:たたみ方 男女の帯結びの練習
12:30~14:30	講義:きものと TPO、ゆかたについて 実習:着付けと写真撮影→自己評価

	立ち居振る舞い、お題「ゆかた」短歌にして披露 ²⁾ 意見交換
14:50～17:00	講義：きもの手入れとリサイクル きものプロジェクトと授業実践の紹介 ○テスト・アンケート(70分)

平成 22 年度認定講習(被服)の内容

日時(担当者)		内容
1 日目 (三代)	午前	講義：被服の素材、実験：混用率試験
	午後	講義：洗浄メカニズム、実験：界面活性剤の作用、洗浄力試験
2 日目 (川端博子)	午前	講義：被服の機能、実習：手縫いの基礎技法・ミシの使い方
	午後	講義：エプロンの制作
3 日目 (川端・三代)	午前	講義：きもの・ゆかたの基礎知識 歴史・構成・染め
	[90分×2]	実習：ゆかたを着て過ごす ³⁾
	午後	講義：高齢者の衣服、リサイクルときもの
	[90分×2]	実習：実験レポートの作成、きもののたたみ方、意見交換 ○テスト・アンケート

実施の内容は上表のとおりで、授業実践に沿った内容を教師向けにアレンジして行った。資料にはプロジェクトで準備したものを使用した。

以下、いくつかの内容について説明を加える。

1) ミニチュアのきもの作り

洗足学園中学校の指導を参考にしたもので、ゆかたの裁断と構成を理解する教材である。千代紙を使うとよい仕上がりになる。本章の最終ページにプリントを掲載する。

2) 和歌の披露

川崎市立 K 中学校の「和を味わう」を参考にしたものである。多くの生徒たちは正座やきちんとしたお辞儀ができていなかった。和室がなくなり、畳での生活を体験しなくなったことが背景にある。免許状更新講習では、ゆかた着装をより多面的な学習の機会ととらえてもらう手立てとして、教壇に畳またはゴザの上に座布団を敷いた舞台を準備した。

一人が来客となって訪問し、下駄を揃えて脱ぎ、家に上がる。もう一人は主となって客を迎え入れ、お茶を出す。ペアでゆかたに関する話をしながら、ゆかたをお題に和歌を披露する、ロールプレイを組み込んだ。和歌は、筆ペンで短冊に書いて事前に用意しておいてもらった。



和歌の披露



ミニチュアのきもの

教室は、和やかな一時となり、互いのコミュニケーションをはかることができた。これらは、国語教材としても組み込める。教師が、伝統文化に関わる技（花道、茶道など）を有しておれば、バリエーションが広がると思う。以下に作品例を示す。

ゆかた着て 今も昔も 変りなく 夏の香りを ただよわせ
 ゆかた着て 免許更新 楽しめば 学生時代の 初心にかえる
 若き日の 青きゆかた 娘着て 蝶（リボン）止まり 華やげり
 ゆかた着て 心は乙女 二人して 若かりし頃へ タイムスリップ
 帯しめて 下駄はきわかる 心地よさ いにしえ人の 想い同じと

3) ゆかたを着て過ごす

ゆかたを着装して和を味わうために、その後の講義の間、着続けるようにした。動作性、立ち居振る舞いなどへの気づきに加えて、人目を意識するなど被服の効果について再認識する機会とした。

3.2 横浜国立大学

免許状更新講習の内容は、埼玉大学の実践内容に倣ってプロジェクトで作成した教材を教員向けにアレンジしたものを使用した。平成 23 年度はプロジェクトで作成した「ゆかたがわかる」のパンフレットが完成したので、講習で利用し、受講者に配布した。

平成 22・23 年度免許状更新講習 「ゆかたの着つけを通じて伝えるきもの文化」
 埼玉大学と同内容で実施



男物ゆかた着装時写真



講義受講風景



女物ゆかた着装時写真



免許更新講習中の着装後の写真撮影

平成 23 年度【横浜国立大学教育人間科学部教育デザインセンター連携講座】

講義「確かな学力をはぐくむ家庭科の指導」の内容

日時	内容
9:00~10:25	講義：クールビズなど、環境共生型衣服の着用面からの学習に向けた提案
10:40~12:00	講義：きもの文化伝承・発信のための着装体験型授業の提案 きものと TPO、ゆかたについて ゆかたの歴史・文化・染織 平面構成と立体構成、きもの手入れとリサイクル 演習：ミニチュアのきもの作り ¹⁾ 講義：きものプロジェクトと授業実践の紹介 アンケートの配布（回収はファックスで事後）

平成 23 年度 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校研究発表会
教科別ワークショップ～衣文化（和装の着装）の授業づくり

日時	内容
15:50~16:50	きもの文化伝承・発信のための着装体験型授業の提案 講義：「ゆかたがわかる」パンフレットを用いてゆかたの構成、 歴史・柄・模様について、 演習：着装ワークショップ後、アンケート



ATの師範（女物）と解説



ATの師範（男物）



参加者の集合写真

4. 講習の効果

平成 22・23 年度の免許状更新講習時に、講習の効果について把握するため簡単なアンケートを実施した。両キャンパスとも傾向は概ね一致したので、以下、まとめて示す。

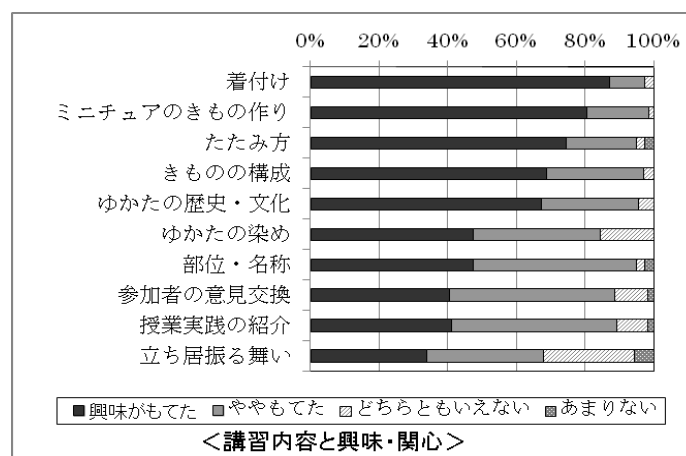
4.1 受講者の興味・関心

講習に関する興味・関心度について下図にまとめた。受講者の希望を適宜組み入れながら実施したこと、講習時間が異なるなど、各回での取り扱いに違いがあるが、全体として肯定度は高いといえる。

項目ごとにみると、「着付け」と「ミニチュアのきもの作り」は、8割を超える者が興味をもてたと回答し、その他上位を占める項目より、体験学習の効果を感じさせる。「歴史・文化」に関しても、関心があるので、講師自身が内容を深めていくことが課題である。

「立ち居振る舞い」では、他に比べれば関心は低い傾向であった。3.1 2) では着付け技能に終わらず、多面的に捉える試みとして、また、参加者に印象づけることを意図したが、授業に役立つと捉えられなかったのかもしれない。

授業実践の紹介は、十分な説明時間がとれなかったことが関係したと考える。

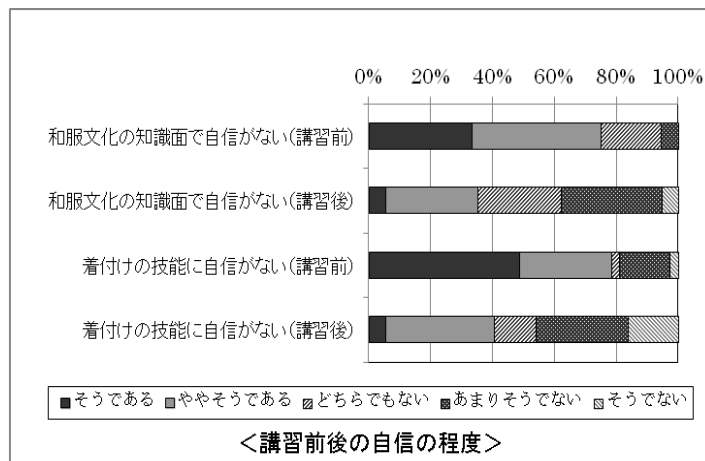


4.2 受講者の意識の変化

授業前後に試みたアンケートをもとに、教師の意識面から講習の効果について分析する（本項目は23年度のみ実施）。

右図に示すように講習前の回答では、知識・着付けともに自信のない者が7割を超えたが、講習後4割程度に減った。

図には示さなかったが、「着付け」の理解度は、「ミニチュアのきもの作り」や「たたみ方」に比べて難易度が高いと認識しているようである。このことより、1回の講習で十分な知識・技能を習得するには至らないまでも、多少の研修を受け、準備をすれば生徒への指導はできると認識するととらえられる。



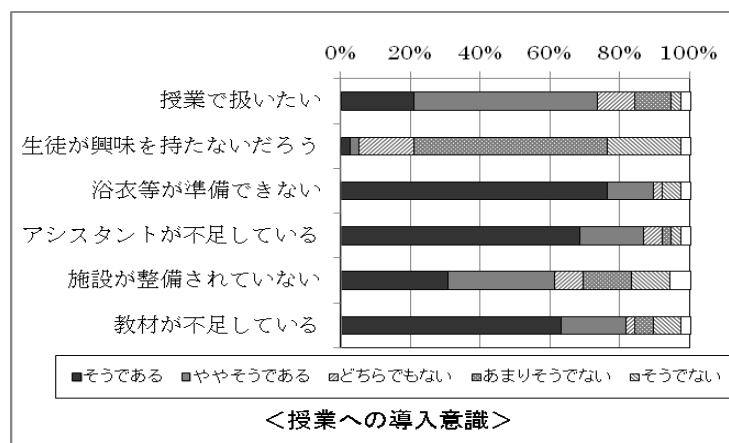
4.3 授業への導入意識

1) 自信の程度

平成23年度の受講者を対象に、着付けやきもの文化の授業での導入意識を尋ねた結果を示した。7割を超える者が「授業で扱いたい」、「生徒が興味を持つであろう」と回答している。しかし、「ゆかた等が準備できない」、「アシスタントが不足している」の回答も同程度に及び、物的・人的面の欠如が大きな障壁となっている。

プロジェクトの実践では全員が着てみることを前提としたが、少ない枚数でも効果的な授業をしていくことも提案していかなければならない。グループ学習で、帯結びを行う、ゆかたをたたんでみるような体験学習であれば、生徒が持参する枚数でも実現可能である。また、地域の人材活用や、高齢者との交流の場として展開することができる。

受講者の教科別に見ると「授業で扱いたい」と回答した割合は、家庭科の方が幾分高い傾向であるが、有意な差はない。教科に限らず、取り入れていきたいと考えていることを示しているといえる。現状では、「着付け」に関しては準備、時間確保等で課題もあるため、まずは「ミニチュアのきもの作り」に挑戦したいという意見が多くみられた。

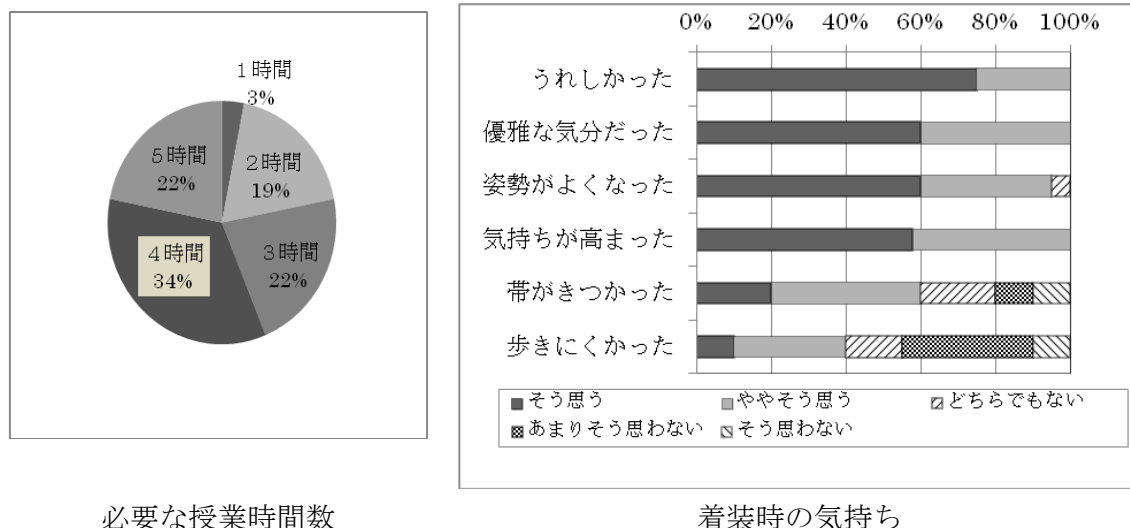


2) 授業実践に必要な時間数

授業には、4時間、5時間が必要と考える人が全体の半数を超えた。しかし、実際には、衣生活領域の授業時間数は縮小傾向であるため、時間確保も重要な課題である。

3) 講義での着装時の気持ち

受講生は、帯がきつい、歩きにくいなどの運動機能性の面での負の部分を感じていたが、それ以上に9割以上がゆかたの着装時に優雅でうれしい気持ちを抱き、高揚感を感じていた。この気持ちがきもの文化に対する興味・関心の喚起に寄与すると思われる。



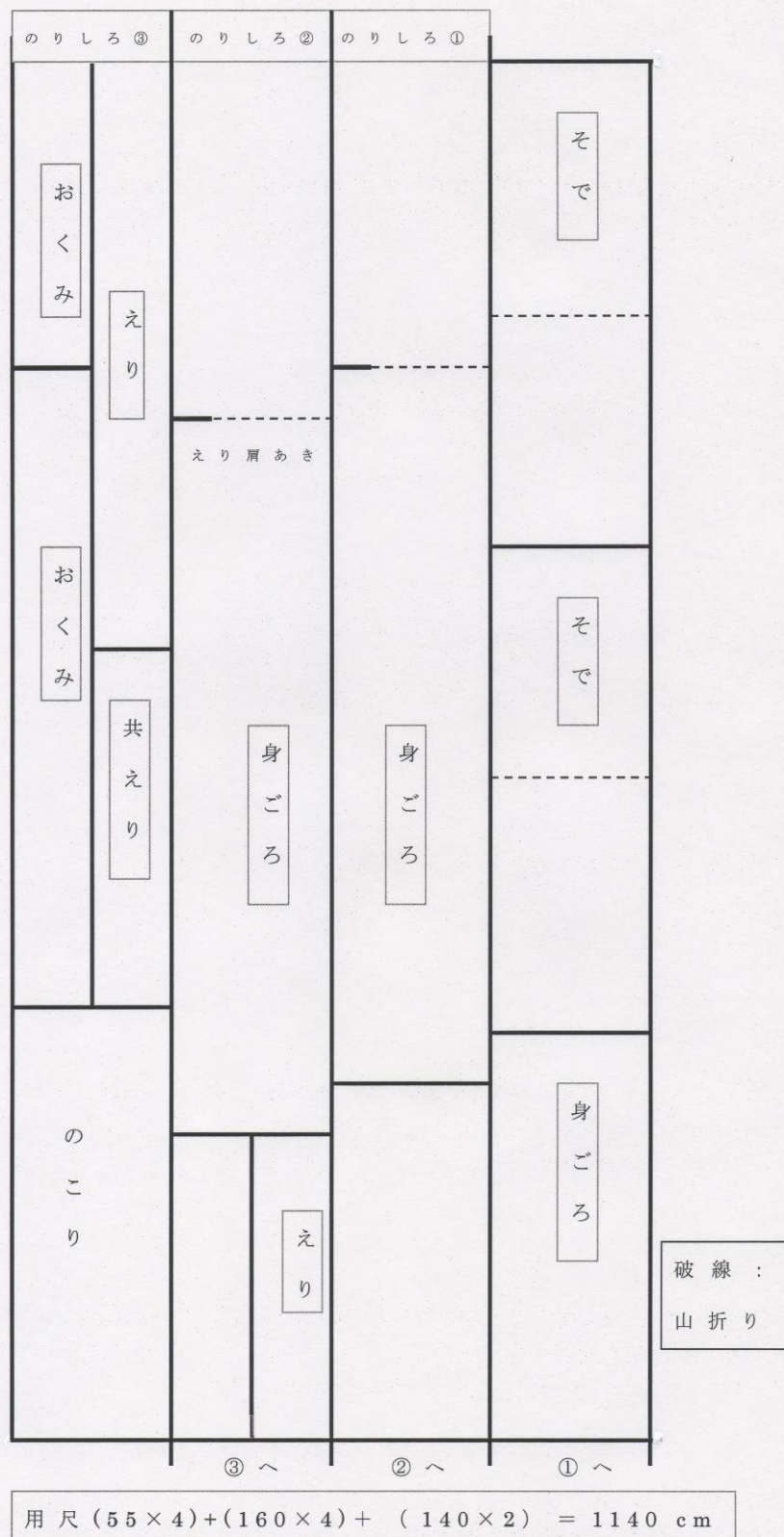
4.4 その他の教員研修に関して

埼玉大学附属中学校の平成23年度研究協議会では、研究授業後に着付けワークショップを開催し、20名以上の指導主事他管理職の先生、家庭科教員・学生の参加があった。ここでも、着ることの楽しさを感じさせる和やかなひと時となった。

神奈川県立教育センター主催の実践的授業力向上研修講座～新学習指導要領が目指すもの～「家庭」では、新指導要領の実施に向けて、家庭科における確かな学力の育成についての理解を深め、実践的指導力の向上を図ることを目標にした講座であった。時間の関係上、着付け実習を組むことはできなかったが、ミニチュアきもの作りが平面構成の理解に効果的であるため、好評であった。文化面に関しては「ゆかたがわかる」のパンフレットを配布し、講義で和服の構成面、歴史・文化面の内容について紹介したところ、関心が高く、文化面にもっと時間をかけてほしいという意見があがった。

横浜国立大学附属鎌倉中学校での研究発表会では全国から技術・家庭合計95名が参加したが（内訳：技術68、家庭27）家庭分野の研究授業および協議会の内容が食物の内容であったためか、衣生活分野の内容である「ゆかたの着装ワークショップ」まで残って参加した者は残念ながら少数であった。しかし、指導主事経験者や副校長クラスの管理職の先生方が参加され、ゆかたの着装を含めた実践的学習に対し、とても好意的な意見をいただいた。

き も の 構 成



IV. 「きもの」文化に関する学習の意義と課題

横浜国立大学教育人間科学部 堀内 かおる

1. なぜ今「きもの」文化に関する学習を取り上げるのか

これまでの章で、それぞれの学校に合わせて形を変えながら実践されたゆかたの着装を含む授業を振り返ってみると、どの授業においても、生徒たちが洋服で過ごしている日常とは異なる自分を発見し、気持ちが引き締まるような新鮮な気持ちを抱いたことが分かる。学習を通して、普段は意識をすることがない「日本人」としての自分を実感し、改めて「和」の文化に目を向けるきっかけとなったようであった。

2008年に改訂された中学校学習指導要領では、「C 衣生活・住生活と自立」の「(1) 衣服の選択と手入れ」には、「ア 衣服と社会生活とのかかわりを理解し、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できること。」とある。このことにかかわって、「和服の基本的な着装を扱うこともできること」と明記されている。学習指導要領における「和服」の位置づけが「衣服と社会生活との関わり」の一環として位置づけられていることを考慮すると、「和服」の一例としてのゆかたを教材として取り上げた授業実践の意義は、以下の点に見出される。

まず第一に、特に生徒の日常着としては着用される機会がほとんどない「和服」は、日本の伝統文化を背景に持つ社会的な意味があると生徒に気づかせることである。伝統文化に関する学習とは、日本人としての自分に目を向け、自分をはぐくんでいる環境・風土と文化的要因について理解を促し、それらを次世代へとつないでいくという、教育的営みである。グローバルでボーダーレスな時代だからこそ、自分の生まれ育ったルーツとして日本文化について理解することが求められている。

学習指導要領に先立ち2006年に改定された教育基本法第2条5項には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と記されている。自国の文化を知ることは、自国の文化の優越性を確信することを目的としているわけではない。自国の文化を他の国々の文化とともに相対化して捉え、それぞれの特長を認め合い、理解することが重要なのである。「きもの」について、一般的な日本人にとっては、特別な、ほとんど自分の生活にはかかわりのない衣服として捉えられているのではないかと思われる。本書でこれまで紹介してきた授業例は、いずれも生徒に「きもの」（ゆかた）を身近に感じさせることに成功している。そのうえで、どのような場面で今日の「きもの（ゆかた）」の着用がみられるのかを確認し、今後、それらの場面で自分自身もゆかたを着用していこうという意欲を喚起することにつながった。これは、日本の伝統文化を継承する実践にほかならない。若い世代が、気負いなくゆかたを着用することを通して、日本文化の一端を継承・浸透させていくようであれば、「和」文化の一端に触れることができたと言えるだろう。

第二の意義として、きもの（ゆかた）の特長に見られる合理性や生活の知恵に触れることをとおして、日本人の生活様式を見直す契機となる点を指摘したい。

生徒たちは、ゆかたの扱いや着用を通して、洋服とは異なる平面構成からなるゆかたの特長を知り、畳むとコンパクトになり、リサイクルして無駄のない活用ができる点等、ゆかたにまつわる生活の知恵を知ることによって、生徒が現在の自らの生活様式を振り返る機会にもなっていた。

このたびの授業実践では、いずれもゆかたの着装を取り入れ、実際にゆかたを着てみることを、着られるようになることを目標の一つに位置づけている。それは、学習の手がかりとして、ゆかたの着装体験を位置づけることによって、講義や教師の説明のみでは理解が困難な「きもの(ゆかた)」を実感を伴い理解することができると考えたからであった。

家庭科は、実践的・体験的な活動を伴うところに特色がみられる教科である。家庭科教育は、生活に根ざした内容を取り上げ、実践することを通して見直し、考え、自分自身の日常生活を再確認・再発見するとともに、今後の生活を展望する視点を獲得することを目指している。生徒たちにとって、このたびのきもの(ゆかた)との出会いは、ハレの衣装として遠い存在であった「きもの文化」を身近に感じる機会となったに違いない。このことは、生徒たちの授業後の感想にも表れていた。

一方、授業を担当する教師にとっても、「きもの文化」をどのくらい身近に感じているかは個人差が大きかった。自身が指導することについて「ハードルが高い」と感じていた教師は少なくない。今回は、アシスタント・ティーチャー(AT)として大学生が授業に参画し生徒に対して示範を示すことによって、授業をスムーズに進めることが可能となった点も指摘しておきたい。今後、各学校で本実践例のようなきもの文化に迫る体験的な授業を展開するためには、人的なサポートをどのようにして得られるかという点も、課題となるだろう。

地域の人々を授業サポートのボランティアに招くといった方法や、複数の家庭科教師がいるようならそこでT.Tとして連携を取るなど、指導体制を考えながら、各学校の実態に即した方法の授業展開を考えていく必要がある。

2. 今後の実践に向けた課題と授業開発の可能性

学習指導要領では、新たに「D 身近な消費生活と環境」の内容がひとまとめになり設置されたが、そこでは、A、B、Cの各内容と関連性を持たせて、実践的に指導することが求められている。このたびの授業実践例においては深く触れられることはなかったけれども、このDの内容をより中核に位置づけて、「きもの」文化を見直すという授業構想も考えられるのではないだろうか。

きものが日常着であった江戸時代の生活文化に焦点を当て、「循環型社会」の典型例として考察し教材化した山田と外山の授業提案（2001）は、「きもの」文化自体を取り上げたものではない。しかし、山田と外山の研究が示唆している江戸時代の生活様式の捉え直

しの視点は、衣生活文化に足場を置いて消費文化と生活様式の見直しを図るという可能性を示唆している。

今回の本プロジェクトにおいて実践した、ゆかたの着装経験を基盤とした授業を基本パターンとしながら、着装したことを踏まえて、そこから「何を考えるのか、学ぶのか」という、学習のねらいをどのように位置づけるかによって、家庭科教育における「きもの」の教材化の様々なバリエーションが可能となるだろう。

また、今回紹介した授業実践で取り上げられなかった例として、平面構成の被服製作を部分的に取り入れた実践も考えられる。大学における実践として、鈴木（2003）は、ゆかたの製作に取り組む大学生たちがゆかた製作を通して学んだことについて分析した結果、「『身体構造や衣服の構成』『着装』『布・衣服の柄』『縫製の原理・縫い目』『各種技能』への関心、興味、理解といったゆかたという被服製作教材に含まれる実質的な対文化的な事柄」に加えて、「『生活の見直し・文化の再認識』『消費者としての興味・行動』『性格・性別に関する認識』『達成感の感受』『計画性・危険の回避』『集中力の高まり』『協調性』といった、対自己的な学び」が見られたと指摘している。この「対文化」及び「対自己」という学習の目指す方向性は、家庭科における「きもの」文化を視野に入れた授業を考える上で、重要だと考える。「文化」についての学びは常に、その文化の中で生きる自分自身を見つめ直すことにつながる。その意味で、「きもの」文化を取り上げる授業は、ひいては日本人アイデンティティの問い直しを図るものといえるだろう。

2011年3月の東日本大震災のあと、秩序を維持し助け合う人々の姿について、日本人の美德として海外のメディアが称賛したことは、いまだ記憶に残っている。何かきっかけがなければ「日本人である」ということを意識する機会は乏しいかもしれないが、震災後の次の一步に向けて進んでいく新たな年となる2012年を迎えた今日、教育においても、さまざまな形で自分自身や自分たちが生活している環境、文化を考え、発信していく必要があるだろう。教育は、次世代育成のための具体的な社会的営みにほかならない。伝統文化の教育というキーワードは、生活に根ざした学習を展開する家庭科において、今後一層、重要なキーワードとなるだろう。「きもの」文化を手がかりとして日本人である自分に気づき、日本について理解を深める学習の、今後の発展に期待したい。

引用文献

- 鈴木明子(2003)「被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討ー浴衣製作実習における学生の記述分析を通して」『日本教科教育学会誌』26(3) 33-39
- 山田綾・外山広美(2001)「現代生活を探求する授業：循環型社会から大量消費の衣生活を問い直す家庭科授業」『愛知教育大学研究紀要』32、13-27

ゆかた着装のポイント 着くずれを直してきれいに着こなす

① えり



【check!】
・胸元がはだけている



上前えりを右に、下前は
身八つ口から手を入れて
左に引いて整えよう

① えり



【check!】
・胸元がはだけている

腰ひもの位置で身頃を
閉じる方向に引っ張る
腰ひもを結ぶ時、広がら
ないように注意しよう

② おはしより



【check!】
・しわが多くて広がっている
・ぴったり整っていない



おはしよりのしわを
わきによせて整えると
着姿が引き立つよ

③ 背中心



【check!】
・背中がたるんでいる
・しわになっている

おはしよりを下に引いて
背中心を整えよう

④ すそ



【check!】
・裾(すそ)が広がっている

腰ひもの位置で身頃を
引き上げ整えよう
腰ひもを結ぶ時、広がら
ないように注意しよう

⑤ 帯 (貝の口)



① 背中心
【check!】
・背中の中真ん中でまっすぐ。
・しわは脇によせる。

【check!】
⑤ 貝の口
・結び目がきつすぎない

正しい着装について学ぼう

ゆかたをきれいに着こなそう



◎衿あわせがちょうど良い



× 衿が開きすぎ



下着が見える

後ろも開きすぎに注意

えもんは5cm
くらい離すと形
がよい



× 衿が乱れている

①



②



③



①肩がずれている
②開きすぎ
③見ごろがういている

◎すそがひろがらず整っている



× すそが広がっている



正しい着装について学ぼう

× 脇の位置がずれている



◎ 丈がちょうどよい



× 丈が短い



× 丈が長い



◎ おはしよりが整っている



× おはしよりが整っていない



正しい着装について学ぼう

◎背中心が
整っている



×背中心が
ずれている



◎背中やしわが少ない



× 背中やしわが多い



背中やしわは背中心から
両脇に寄せて整える

◎帯の位置がちょうどよい



◎帯の位置が
ちょうどよい



腰骨のあたり

× 帯の位置が
高い



ウエストのあたり

× 帯がゆるい



伊達じめや腰ひもが見えている



下に巻いた帯が
見えている

正しい着装について学ぼう

◎帯の形が整っている



◎帯の形が整っている



×帯の形が整っていない



×帯の形が整っていない



V. 「きもの」文化の海外発信をめざしたイギリスでのゆかた着装ワークショップ

V-1. 2009 年度の実施内容 英国在住の学生や社会人を対象のワークショップ

横浜国立大学教育人間科学部 薩本弥生

山梨県立大学人間福祉学部 斉藤秀子

大妻女子大学短期大学部 呑山委佐子

1. はじめに

政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法についての検討は、これからといえる。

そこで、プロジェクトの一環で「きもの」文化を海外へ発信するための教育プログラムを開発することを目指して上記研究メンバーのうち、薩本と斉藤が 2009 年度(英国在住の学生や社会人を対象)にゆかたの着装ワークショップを実施した。その概要、活動内容を紹介する。

本研究ではグローバル化に対応し、海外での「きもの」着装ワークショップによる体験学習を通して、海外の子どもたちに日本の「きもの」文化を紹介し、「きもの」を通じた日本理解と文化交流の促進に貢献していくことを目指している。

2. 研究方法

1) ゆかたの着装 DVD 作成

着装 DVD の作成は、和裁を専門とし着装を含めて長期にわたり教育・研究を行ってきた分担者(呑山)を中心に、以下の手順で行った。平成 21 年 7 月に、大妻女子大学のビデオ収録スタジオにおいて男女ひとえ長着(ゆかた)の着装の仕方、女子のみ、たたみ方についても撮影を実施し、8~9 月に日本語版、英語版ナレーションの吹きこみを行い、9~10 月に編集を行い、男女ゆかたの着装・たたみ方の DVD を完成させた (Fig.1)。



Fig.1 ゆかたの着装ビデオおよび編集作業風景

2) 着装ワークショップ実施方法

2009 年 10 月に海外での授業実践の準備としてイギリスのラフバラにて日本人会とラフバラ大学 Nigel Zanker 氏の協力により、現地の大学生および社会人対象【イギリス在住日本人 7 名(男 1 名、女 6 名)、非日本人 19 名(男 5 名、女 14 名)】にゆかたの着装のワークショップ (Fig.2)を行い、①日本の現代・伝統文化に関するアンケート、②開発した英語版着装ビデ



Fig.2 ゆかたの着装ワークショップ

オを見て、③ゆかたの着装・たたみ方ビデオの評価、着装後に、④着装感アンケートを実施した。

3. 研究結果

①日本の現代および伝統文化に関するアンケートの結果

<日本文化に関する習熟度>

日本文化に関する習熟度の客観評価を目的におよび家電メーカーおよび自動車の認知度に対する正答率を算出し、外国人と日本人で平均値の差の検定をした結果、Fig.3 に示すように家電で有意確率 $p<0.001$ で有意に、Fig.4 に示すように自動車で $p<0.01$ で有意に日本人の正答率が高かった。家電正答率 75%以上か日本の自動車正答率 100%の人は日本人と同等の習熟度があると仮定し、UK 在住の非日本人を日本文化習熟群と非習熟群の 2 群に分類した。有効回答数 18 人中 7 名（男 3 名、女 4 名）が習熟群、11 名（男 2 名、女 9 名）が非習熟群となった。日本の来日経験とのクロス集計とカイ二乗検定の結果、有意に非習熟度群は来日経験無しの人に多かった。

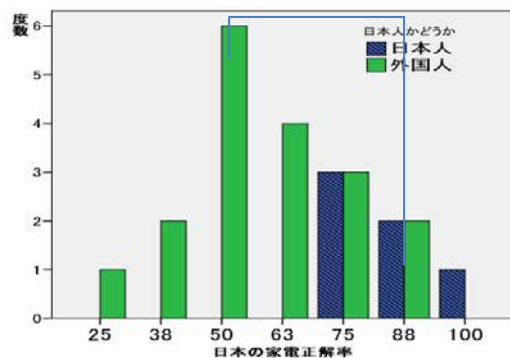


Fig.3 日本家電正答率(***: $p<0.001$)

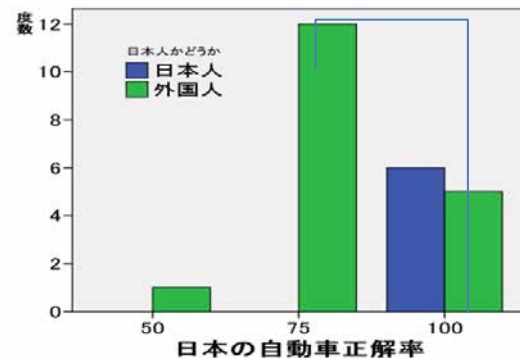


Fig.4 日本自動車正答率(**: $p<0.01$)

<日本文化（現代、伝統）への知識、情報の入手元、実際の体験>

外国人の現代文化への認知度では（複数回答可）、Fig.5 のように有効回答数 17 人中、キャラクターグッズ (100%)、ゲーム(94%)、漫画・アニメ (77%) の順に高く、次いで日本のデザイナーズ (65%) および若者ファッション(53%)が入り、半数以上に日本ファッションが注目されていた。

情報の入手元は、Fig.6 に示すようにインターネット(88%)とテレビ (83%) が主であった。日本の現代文化の経験では、8 割近くがいずれかを経験していた。内訳は、ゲーム(90%)、漫画・アニメ(84%)、キャラクターグッズ(68%)と続き、4 番目に日本のデザ

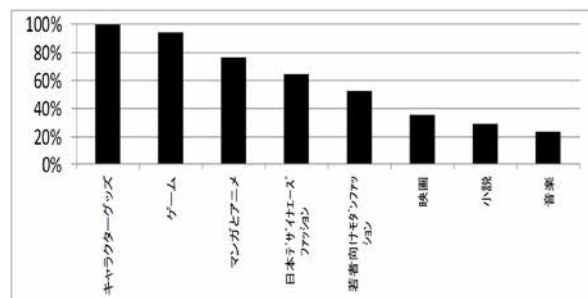


Fig.5 日本現代文化の認知度

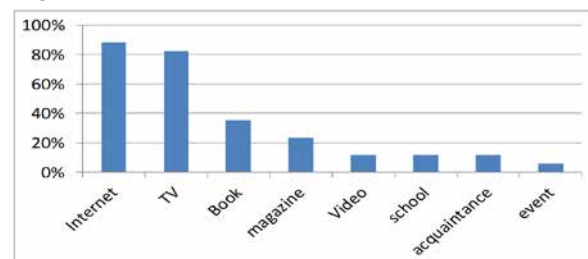


Fig.6 日本現代文化の情報入手手段

イナーズファッション(58%)が入った。

日本の音楽、映画、小説も 50%前後は経験していた。クロス集計とカイ二乗検定の結果、日本文化習熟度と現代文化の経験とは相関がなかった。

伝統文化の認知度では(複数回答可)、空手(100%)の次に柔道、きものが同数(90%)で、きものの日本の伝統文化としての認知度は高かった(Fig.7 参照)。

情報の入手元は、テレビ(88%)に次いで学校(65%)が占め、伝統文化の場合、学校が情報の発信源として貢献していた(Fig.8 参照)。

日本の伝統文化の経験については、有効回答数が 5 人と少数で、内訳は、陶器については 100%の人が経験していたが、きものの着経験者は 2 名のみだった。

<きものに関する知識、着経験>

外国人の 8 割以上がきものを見たことがあったが、着用経験者は、前述のように 2 名のみで、いずれも女子で、男子には経験者はいなかった。

日本人も含め 26 人全員を対象にし、きものについて学びたいことでは(複数回答可)、着つけの仕方が最も多く

(83%)、次に帯の結び方で(75%)、着つけを学びたい人が多かった。次にきものの柄、パターン、歴史、きものの構成、産地、染めと続いた。

②ゆかたの着・たたみ方ビデオの評価

ゆかたの着・たたみ方のビデオを見た後の理解度の評価では、帯結び>着つけ>畳み方の順に理解が難しく、難易度を高く感じていた。

③ゆかた着後ゆかたに関する興味関心、理解、習熟度と着感

<ゆかたの着・たたみ方に関する興味関心、理解、習熟度>

ゆかたの着体験後、着つけ、帯結び、たたみ方とも、興味は高く、日本人、外国人で有意差がなかったが、理解度、習熟度は、帯結び>着つけ>畳み方の順で十分でないと感じていた。特に帯結び(Fig.10-a)と身頃の着付け(Fig.10-b)については、外国人の方が日本人よりも有意に、理解度が低く、習熟度も低いと感じていた。

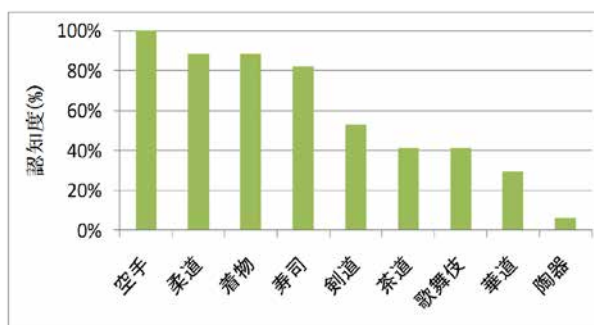


Fig.7 日本の伝統文化認知度

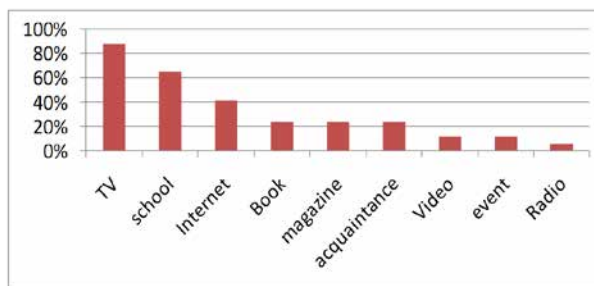


Fig.8 日本の伝統文化情報入手手段

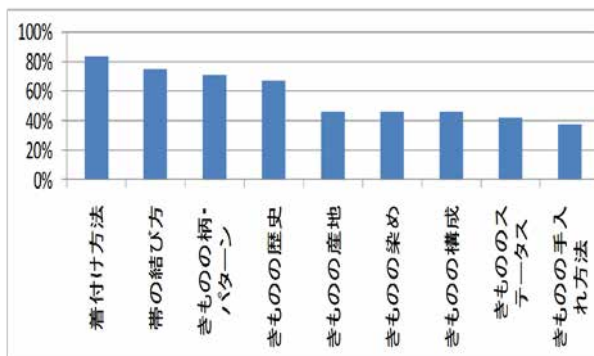


Fig.9 きものについて学びたいこと

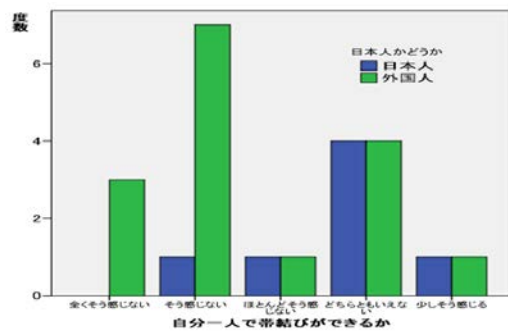


Fig.10-a 帯結びの習熟度 (p<0.05 で有意)

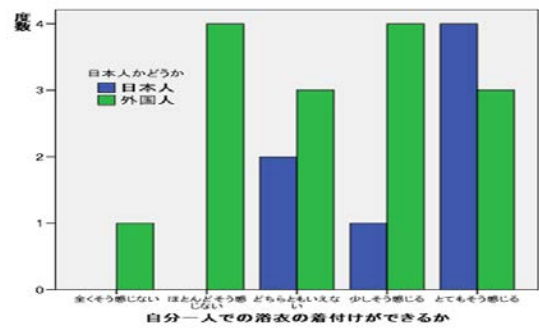


Fig.10-b 身頃着付けの習熟度 (p<0.05 で有意)

< 着 装 感 >

着装後の気持ちを 7 件法で 7 項目について回答を Fig.11 に示す。

ゆかたでは食べ物がのどを通らないほどの拘束感はありませんが、窮屈さや歩きにくさを感じている。一方で、優雅な気分、高揚感や、うれしさなどもそれ以上に感じていることが分布から読み取れた。

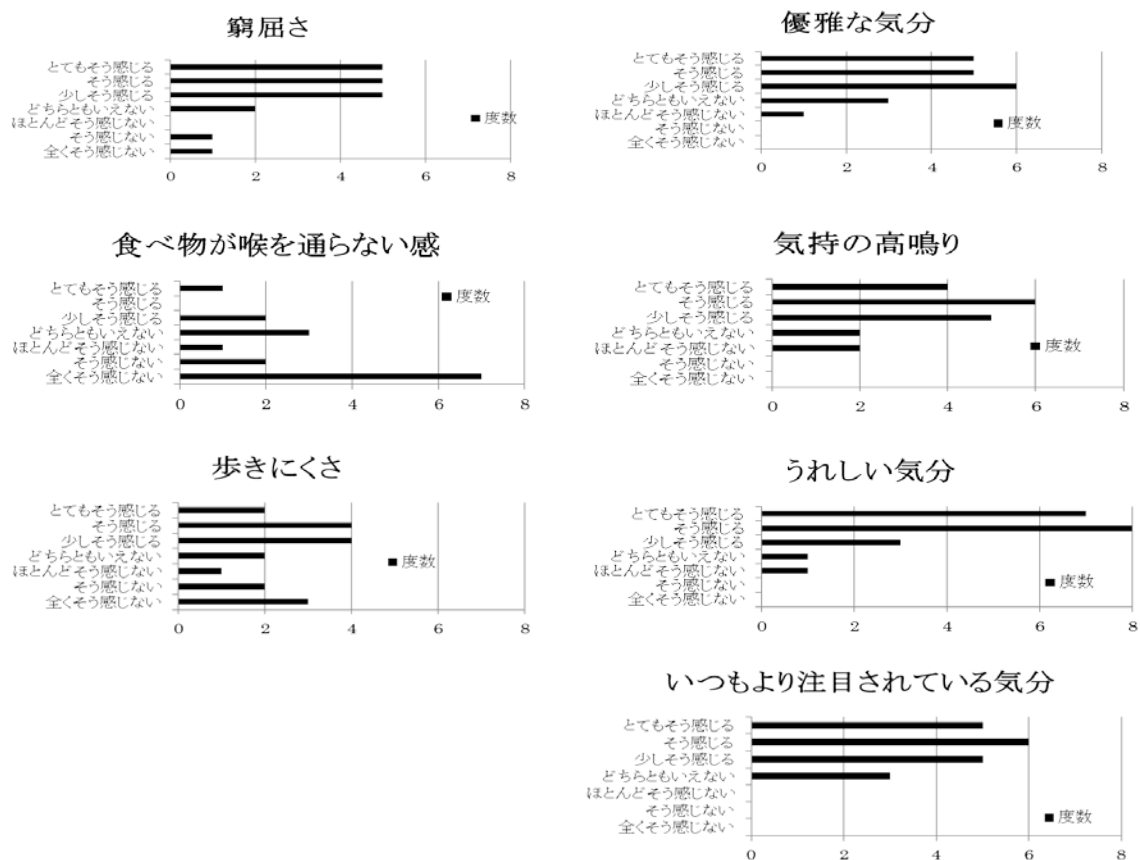


Fig.11 着装ワークショップ体験後の着装感

イギリス在住の日本人を除いた被験者のデータを対象に着つけの自己評価・感想 7 項目の関連性を考察するため、これらを対象に探索的因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。項目内容と固有値 1.0 を基準に因子数を決定した。2 因子解が妥当とされた。第 2 因子までの累積寄与率は 79.1% であった。

以上の手続きにより単純構造の 2 因子解が得られた結果を Table1 にまとめた。

第 1 因子は窮屈感、歩行困難感、注目され感からなり「拘束感因子」と命名した。第 2 因子はうれしい気分、優雅な気分からなり「高揚感因子」と命名した。高揚感と、食欲減退感とは両方の因子に因子負荷量が大きく表れたため中間因子と解釈した。

外国人でもゆかたの着装により、拘束感を感じながらも同時に高揚感を感じていることが確認された。

4. まとめ

以上のように、外国人にとってもゆかたの着装は気分を高揚させ興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の海外発信に一定の効果があることが推察された。学校教育はその発信源としての貢献が見込まれた。

写真は、ラフバラ大学の報告の取材を受けた際の、着装後の着装ワークショップ参加者の写真である。なお、着装ワークショップの様子は、以下のラフバラ大学のホームページに紹介されている。

http://www.lboro.ac.uk/service/publicity/news-releases/2009/142_JapaneseTeachers.html



Table 1 探索的因子分析結果探索的因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	因子命名
窮屈感	. 983	. 154	拘束感因子
歩行困難感	. 863	-. 028	
注目され感	. 616	. 136	
高揚感	. 727	. 615	中間因子
食欲減退感	. 440	. 810	
うれしい気分	. 118	. 907	高揚感因子
優雅な気分	-. 057	. 898	
累積寄与率		79.10%	

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

V. 「きもの」文化の海外発信をめざしたイギリスでのゆかた着装ワークショップ

V-2. 2010 年度の実施内容 現地中学生対象のワークショップ

横浜国立大学教育人間科学部 薩本弥生

山梨県立大学人間福祉学部 斉藤秀子

1. はじめに

プロジェクトの一環で「きもの」文化を海外へ発信するための教育プログラムを開発することを目指してプロジェクトメンバーのうち、薩本と斉藤が、現地の中学生対象のゆかた着装ワークショップを実施した。その概要および活動内容を紹介する。



2. 研究方法

1) 着装ワークショップ実施方法

前年のラフバラ大学でのゆかたの着装ワークショップに参加した Stephens 氏（当時、現職教員大学院修士課程在籍）を Zanker 氏から紹介いただき、協力校として Stephens 氏が所属するラフバラから自動車で 50 分位の所にある Burton on Trent の Blessed Robert Sutton School で中学生を対象に英語版着装 DVD を用いたゆかた着装ワークショップを行った。対象は 15 歳のクラス (Year10:35 名) と 12 歳のクラス (Year8:20 名) の 2 クラスである。着装ワークショップに先立って Stephens 氏を通じて事前に①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを実施してもらい、当日は②開発した英語版着装 DVD を見せて説明した後に (Fig.1) 着装ワークショップを実施した。その様子を Fig.2 に示す。その後、③着装感アンケートを実施した。

協力校 Stephens 氏と



Fig.1 中学生に着装法を説明する様子



Fig.2 英国中学生の着付け実習



a. Year10 (15 歳)



b. Year8(12 歳)

Fig.3 ゆかたを着装し、嬉しそうにポーズをとり集合写真に納まる中学生たち

3. 研究結果

①日本の現代および伝統文化に関するアンケートの結果

＜日本文化（現代、伝統）への知識、情報の入手元、実際の体験＞

対象が中学生 Year10とYear8の2学年であったため、学年間の比較を行う。

現代文化への認知度では（複数回答可）、Fig.4のように有効回答数中（Year8：19人、Year10：28人）の割合で示す。全般にYear8の認知度が高いが、どちらもゲーム、漫画・アニメ、キャラクターグッズの順に認知されていた。

情報の入手元は、テレビ、インターネットが主であったが、次に本、学校と続き、学校が一定程度、貢献していた（Fig.5）。

伝統文化の認知度では（複数回答可）、寿司が、空手、着物、柔道の順に認知度が高く特にYear8で着物が日本の伝統文化として認知されていた（Fig.6）。

情報の入手元は、Year8ではテレビに次いで学校（65%）が占め、伝統文化の場合、学校が情報の発信源として貢献していた（Fig.7）。

日本の伝統文化の経験については、寿司、空手、着物、柔道と認知度と同様の順番になっており、特に今回のワークショップの経験を含めて回答しているのか、Year8で着物の経験者がYear10と比べ多かった。

＜着物に関して学びたいこと＞

着物について学びたいことを質問した回答では（複数回答可）、参加者を学年でクロス集計した結果をFig.8に示す。着つけ関連の項目（きつめの仕方、帯の結び方）が1番目、3番目に多く、着つけを学びたい人が多かった。2番目は着物の柄、パターンで、染め、歴史、着物の手入れ、産地、きものの構成などが続いた。全体にYear8がYear10よりも回答率が高かった。

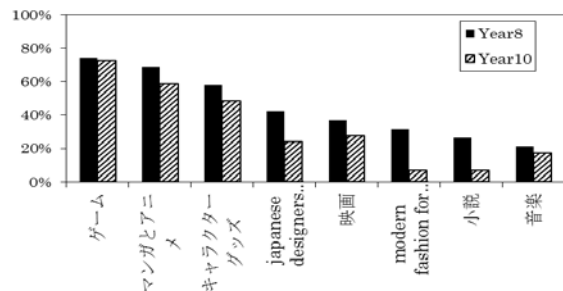


Fig.4 日本現代文化の認知度

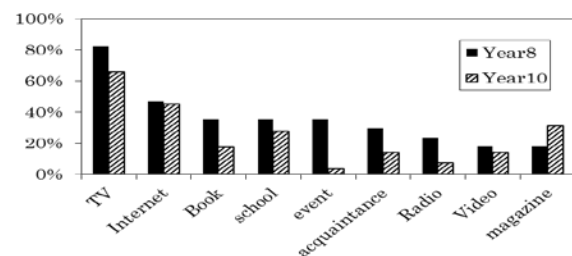


Fig.5 日本現代文化の情報入手手段

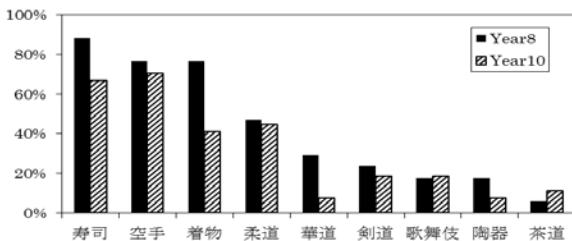


Fig.6 日本伝統文化の認知度

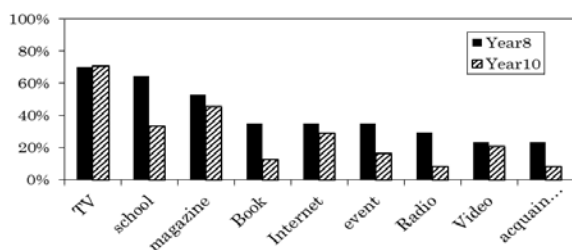


Fig.7 日本伝統文化の情報入手手段

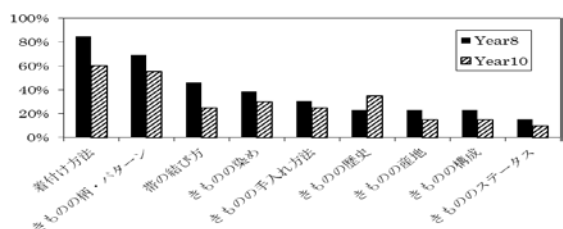


Fig.8 着物について学びたいこと

②ゆかた着装後のゆかたに関する興味関心、理解、習熟度と着装感

<着装感>

着装後の気持ちを7件法で7項目についての回答を、学年をパラメータにクロス集計した結果を Fig.9 に示す。

ゆかたの着装感として食べ物がのどを通らないほどの拘束感、いずれの学年もほとんど感じていないものの、窮屈さや歩きにくさは感じている。一方で、優雅な気分、高揚感や、うれしさなどもそれ以上に感じていることが分布から読み取れた。Year10の方がYear8よりも、うれしさ、気持ちの高まり、注目されている感じなどの高揚感がより高い傾向がみられた。15歳前後という自我・自尊心の芽生えがより顕著となるYear10の方が、Year8よりも、自己表現に意識が高い可能性が示唆された。最初に実施したYear10の方が時間を十分にかけワークショップを実践できたことが寄与した可能性もある。

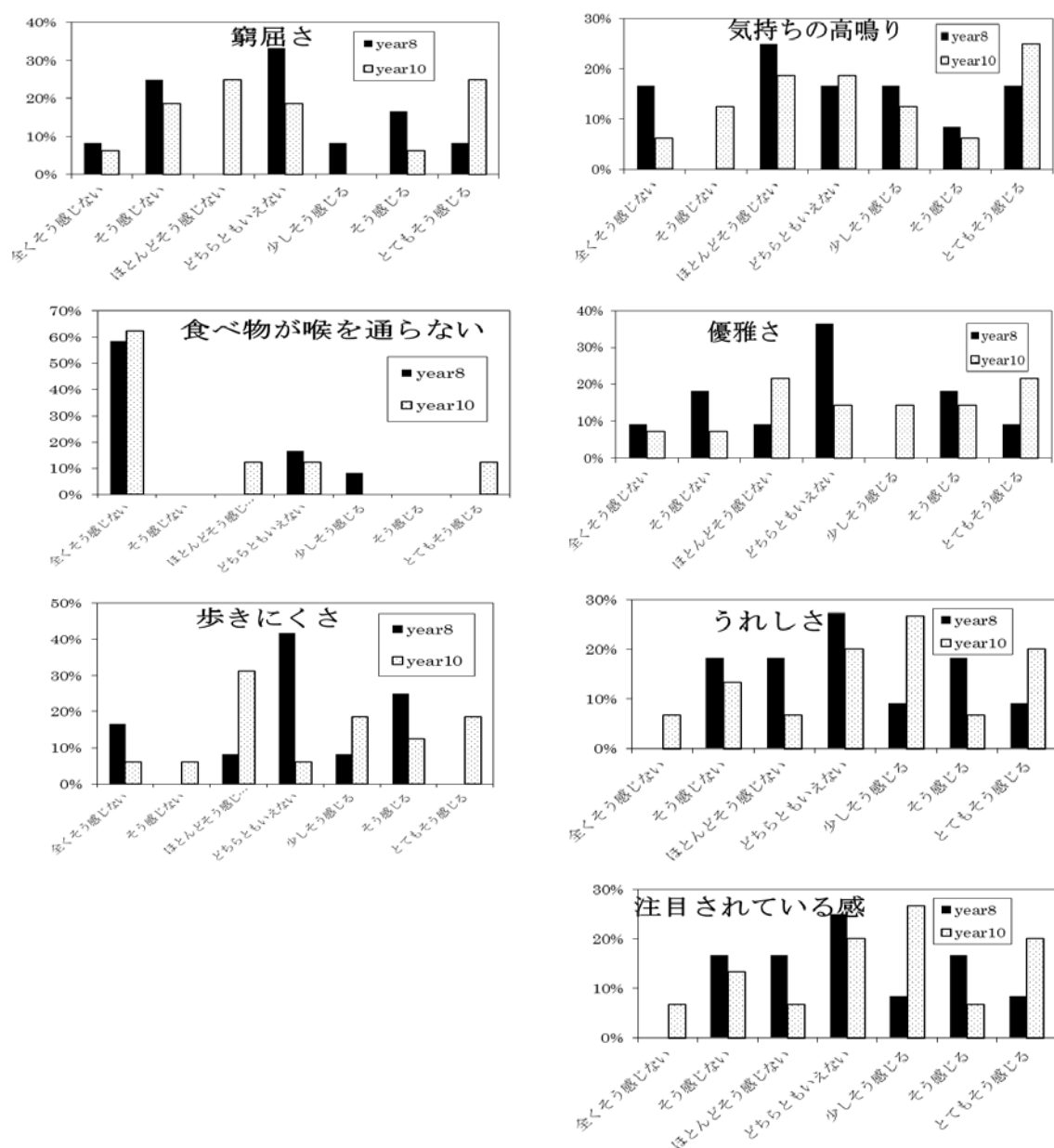


Fig.9 着装ワークショップ体験後の着装感

着つけ後の着装感の自己評価 7 項目の関連性を考察するため、これらを対象に探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。

項目内容と固有値 1.0 を基準に因子数を決定した。3 因子解が妥当とされた。第 3 因子までの累積寄与率は 77.0%であった。以上の手続きにより単純構造の 3 因子解が得られた結果を Table1 にまとめた。第 1 因子は気持ちの高まり、うれしい気分、優雅な気分からなり「高揚感因子」と命名した。第 2 因子は窮屈な感じ、歩きにくい感じからなり「拘束感因子」と命名した。第 3 因子は注目された感じ、食べ物が喉を通らない気分からなり、「興奮感因子」と命名した。英国の中学生でもゆかたの着装により、拘束感を感じながらも高揚感を感じていることが確認された。

Table 1 着装感の探索的因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	第 2 因子	因子命名
気持ちの高鳴り	. 976	-. 094	-. 138	高揚感
うれしい気分	. 858	. 133	. 115	
優雅な気分	. 831	-. 004	. 062	
窮屈な感じ	-. 115	1. 000	-. 031	拘束感
歩きにくい感じ	. 135	. 782	-. 137	
注目された感じ	. 004	. 121	. 941	興奮感
食べものが喉を通らない気分	-. 020	-. 275	. 555	
累積寄与率		77.00%		

<着付け練習意欲と着装外出意欲>

着付けワークショップ後に「着付けをもっと練習したいか」を質問した結果、Fig.10 に示すように Year10 の方が、若干意欲が高い傾向がみられた。

「ゆかたを着て出かけたか」に関しては、Fig.11 に示すように性差が顕著で女子の方が出かけた人が多いが多かった。男子では Year10 の方が出かけた人が多いが多かった。着装感で高揚感が Year10 の方が高い傾向が若干見られたので、そのことが寄与したと思われる。

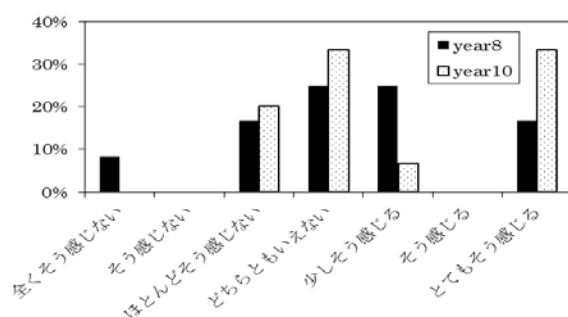


Fig.10 着付け練習意欲

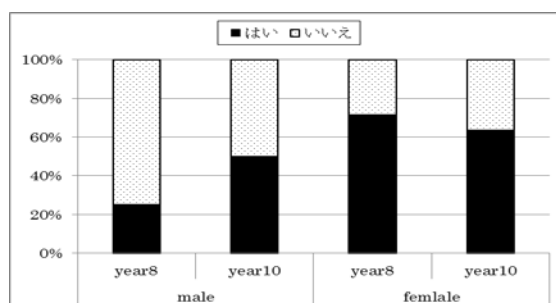


Fig.11 ゆかたを着て出かけたか

<ゆかたの着装・たたみ方に関する興味関心、理解、習得意識>

ゆかたの着装体験後、着つけ、帯結び、たたみ方についての興味、理解度、習得意識に関する回答を Fig.11 に示す。全般に着付け>帯結び>たたみ方の順に自己評価が高い傾向であった。着付けの理解は若干高いが、興味、習得意識は理解よりも低かった。帯結びに

関しては着つけよりも理解意識が低かった。たたみ方に関しては十分な時間が取れなかったこともあり、興味、理解、習得意識ともに低かった。Year10 の女子が全般的に高めで Year8 の男子が低めの自己評価の回答であった。

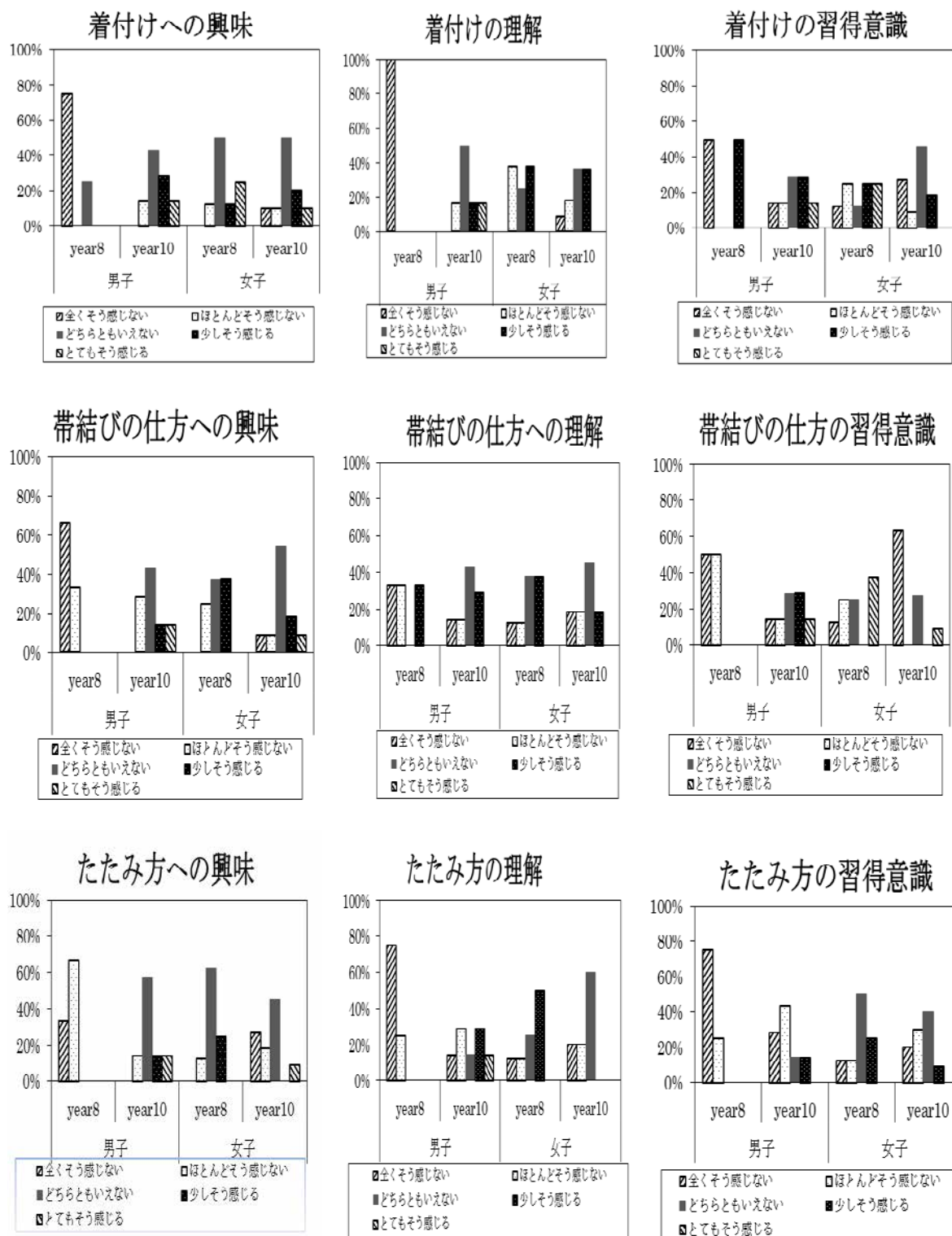


Fig.12 ゆかたの着装・たたみ方に関する興味関心、理解、習得意識

ゆかたの着装・たたみ方に関する興味関心、理解、習得意識の自己評価 9 項目の関連性を考察するため、これらを対象に探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。項目内容と固有値 1.0 を基準に因子数を決定し 2 因子解が妥当とされた。第 2 因子までの累積寄与率は 60.80%であった。以上の手続きにより単純構造の 2 因子解が得られた結果を Table2 にまとめた。第 1 因子はゆかたの着付け・たたみ方の理解と習得意識からなり「理解・習得因子」と命名した。第 2 因子はゆかたの着装・たたみ方への興味からなり「興味・関心因子」と命名した。因子間には 0.44 の相関があった。

4. まとめ

本年度は、イギリスの中学校で Year8(12 歳)と Year10(15 歳)を対象にゆかたの着装ワークショップを実施した。

本年度の実践およびアンケート調査の結果から、海外の中学生は、ゆかたの着装体験を通じて、日本の伝統文化としての「きもの」文化に直接触れ、高揚感を感じ、興味・関心を高めたことが明らかになった。ゆかたの着付けの仕方の理解、習得意識の高い生徒は興味関心も高い相関がみられ、自分で着装できるように意欲付けすることがきもの文化への興味関心の喚起できることが示唆された。

ゆかたの着装体験ワークショップを含む「きもの」文化を海外に紹介する教育プログラムの開発は、新学習指導要領の意図を汲むものであり、国際交流に寄与できることを実感した。国際交流でゆかたや着物の着装体験を海外の方に実施する試みは他でも見られるが、自分で着装するのではなく、誰かに着つけてもらうことが多い。本研究では、開発した着装 DVD や我々の手助けの元に自分自身でゆかたの着装を試みってもらうところが特徴である。今後、教材や実践内容の充実から着装による高揚感からゆかたや着物に関する興味関心が一層高まることを期待している。なお、2010 年度の英国での着装ワークショップの様子は、以下の横浜国立大学のホームページに紹介されている。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1195/detail.html>

Table2 理解・習得・興味の探索的因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	因子名
着付けの習得意識	. 897	-. 062	理解・習得
帯結びの習得意識	. 878	-. 105	
たたみ方の習得意識	. 821	-. 049	
帯結びの仕方の理解	. 756	. 164	
たたみ方の理解	. 614	. 203	
着付けの理解	. 388	. 325	
帯結びの仕方への興味	-. 188	1. 036	興味関心
ゆかたのたたみ方への興味	. 104	. 660	
着付け法習得への興味	. 228	. 435	
累積寄与率		60.8%	
I 理解・習得因子	1		
II 興味関心因子	0.44	1	



ワークショップ後の写真（Year10の女子）

V. 「きもの」文化の海外発信をめざしたイギリスでのゆかた着装ワークショップ

V-3. 2011 年度の実施内容 英語版パンフを用いた現地中学・大学生対象ワークショップ

横浜国立大学教育人間科学部 薩本弥生

埼玉大学教育学部 川端博子

山梨県立大学人間福祉学部 斉藤秀子

大妻女子大学短期大学部 呑山委佐子

1. はじめに

2009年度より3年間のプロジェクトで「きもの」文化を世界へ発信するための教育プログラムの開発・実践を目指して海外での授業実践のためイギリスのラフバラに赴き、日本人会およびラフバラ大学の Design & Technology Department の共同研究者 Zanker 先生の協力により現地の中学生、大学生および社会人対象に授業研究を行ってきた。



Fig.1 参加した日本スタッフと現地協力校教員

2011 年度はプロジェクトメンバーのうち、薩本と川端および両大学他の学生 9 名の総勢 11 名 (Fig.1 参照) でイギリスに出かけ中学生と大学生を対象にゆかた着装ワークショップを実践してきた。その概要、活動内容を紹介する。

2. 研究方法

1) ゆかたを題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材（英語版）作成

テーマ学習教材（英語版パンフレット）の作成は、「きもの」文化に造詣が深い分担者（呑山・斉藤）が、以下の手順で行った。平成 22 年度に、着装に加え、色、模様、染め方、歴史など、「テーマ学習」の内容を吟味し、受講年齢にあっているか、日本の伝統文化を伝えることができるか、実際の着装の仕方の図示の方法などを検討し、ゆかたに焦点を絞った「テーマ学習」教材を作成した。日本語版教材をもとに平成 23 年度には海外向けに内容を厳選し、英語版 “Introduction of Yukata” のテキスト教材を作成した。引用した図表・写真等はすべてオリジナルとした (Fig.2)。

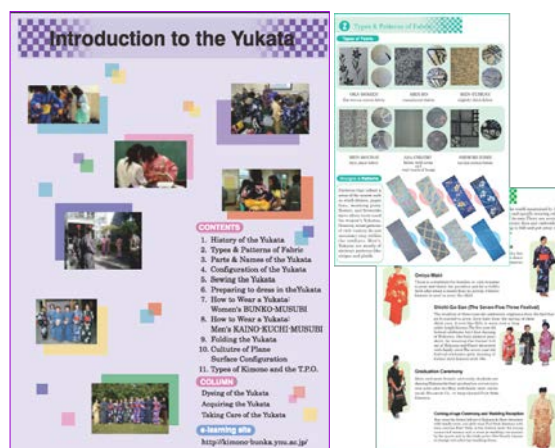


Fig.2 英語版教材の表紙と内容ページの一例

2) 現地中学校での中学生対象の着装ワークショップ実施方法

昨年に引き続き、2011 年 10 月 11 日に Burton on Trent にある Blessed Robert Sutton

School で Year10（15 歳）の 2 クラス（各 20 名）の中学生を対象に各々 2 時間かけてゆかたの着装ワークショップを実施した。

最初に英語版“Introduction of Yukata”のテキスト教材（Fig.2）を用いてゆかたの文化面の紹介をした（Fig.3 参照.）。

次に、学生が英語での説明を加えて着装を示範し（Fig.4）、その後、教員および TA の学生が着付けを手伝いつつ、ゆかたを実際に着装してもらった（Fig.5）。

男女で着装終了までの時間差があるため、当日は折り紙で手裏剣を作成するワークショップも学生の発案で実施し（Fig.6）、そちらも好評だった。

日本に帰ってきてから中学校の生徒達から感謝の気持ちをつづったカードと手作りのブックエンドのしおりが中学校の協力教員を通じて届いた。



a. きもの文化の紹介



b. 教材を見て受講する生徒達

Fig.3 ゆかたの着装ワークショップ



a. 男物の着付け示範



b. 女物ゆかた着付けの示範

Fig.4 ゆかたの着付けの示範



Fig.5 ゆかた着装風景



Fig.6 折り紙の手裏剣づくりワークショップ



Fig.7 Blessed Robert Sutton School の生徒達から届いた感謝状

3) ラフバラ大学での大学生対象の着装ワークショップ実施方法

中学校での実施の翌日（2011年10月12日）にラフバラ大学の Design School の大学院生 18 名を対象に同様のワークショップを行った。こちらでもゆかたの歴史・文化、構成の男女差等の説明後に着装ワークショップを実施後し、最後にたたみ方の示範を行い、各自たたんでもらった(Fig.8)。ワークショップの最後に学生の1人が振り袖姿を披露し、正装の着物のアピールも行い好評だった(Fig.9)。最後の質疑応答の時間帯には成長儀礼と着物の話や着物の色についての決まり事などについて質問があった。



Fig.8-a 構成の男女差



Fig.8-b たたみ方の示範



Fig.9 振り袖姿の披露

ワークショップに先立ち①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを実施し、ワークショップ後に、②着装感アンケートを実施した。以下の写真は各々中学校、大学で着装ワークショップを終えた参加者の集合写真である (Fig.10)。



Fig.10-a 中学校での集合写真



Fig.10-b 大学での集合写真

3. 研究結果

1) 日本の現代および伝統文化に関するアンケートの結果

外国人の現代文化への認知度について複数回答してもらい、Fig.11のように大学生と中学生で認知度を比較する。有効回答数は大学生：13人、中学生：35人で、以下%で示す。

全般に大学生の認知度が高く、キャラクターグッズ、漫画・アニメ、ゲームが7割を超えて高い。中学生ではゲームが最も認知されているが、大学生では漫画・アニメなどの現代文化がより知られていた。

日本のデザイナーズファッションは大学生には 54%と半数以上に認知されているが、中学生には 8%で音楽や小説と同じく認知度は低かった。映画は大学生 38%、中学生 31%で若い世代に 3 割強程度には、知られていると思われる。

情報の入手元は、イベントと雑誌が大学生、中学生ともに主であったが、中学生では知り合いからの情報も 40%で影響が大きかった (Fig.12)。

伝統文化の認知度では(複数回答可)、大学生、中学生とも柔道、空手、寿司に次いで「きもの」が(大学生:73%、中学生:66%)認知されており、両世代に日本の伝統文化として認知されていた (Fig.13)。

情報の入手元は、大学生ではテレビ、ビデオ、ラジオ、本、インターネットに次いで学校 (36%) が占め、伝統文化の場合、学校が情報の発信源として貢献していたが、中学校では 14%に留まっていた。イベントや雑誌は現代文化と比べて情報源としての寄与は小さかった (Fig.14)。

2) きものに関する質問

着装前に「きものを着てみたいか」と質問した回答は大学生 (95%)、中学生(97%)と両者とも 95%以上が着てみたいと回答したが、「自分一人できものを着てみたいと思うか」では両者とも意欲に散らばりがあり、有意差はなかった (Fig.15)。

きものについて学びたいことでは(複数回答可)、大学生では「きもの」の格を意味するステータス、帯の結び方、歴史、構成、染めと続いたが、中学生では、構成、歴史、産地と、学びたい内容にかなり差があった (Fig.16)。

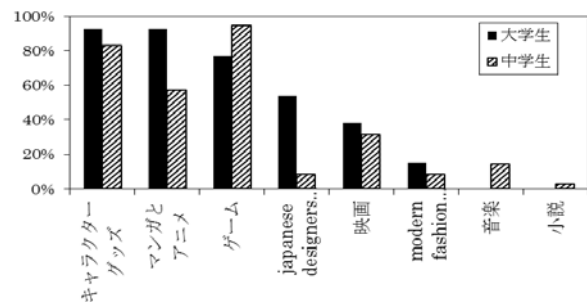


Fig.11 日本の現代文化の認知度

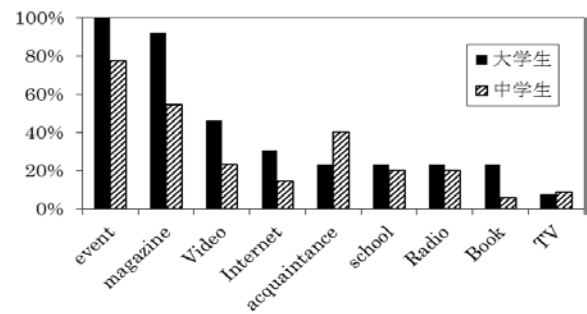


Fig.12 日本の現代文化の情報入手手段

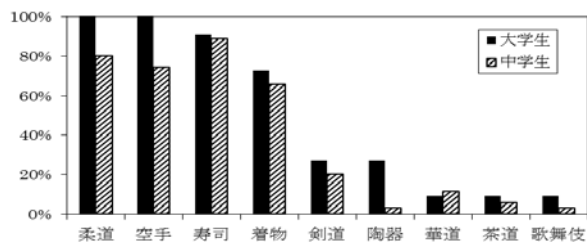


Fig.13 日本の伝統文化認知度

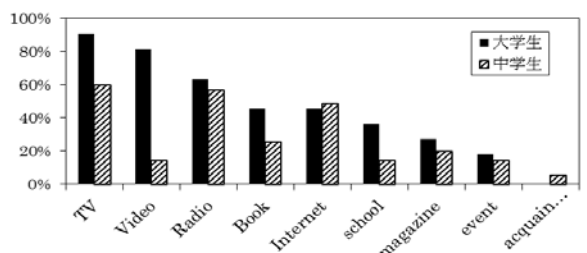


Fig.14 日本の伝統文化情報入手手段

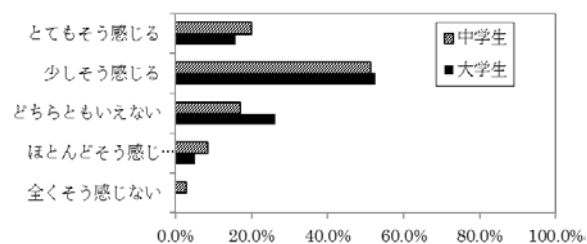


Fig.15 一人できものを着てみたいと思うか

3) ゆかた着装後のゆかたに関する興味関心、理解、習熟度

ゆかたの着装体験後、おはしより、着つけ、帯結び、たたみ方への興味・関心、理解度、習熟度に対し、平均値の差の検定を行ったところ、すべての項目で大学生と中学生間の差は有意でなかった。一方、男女ではほとんどの項目で有意で女子の方が平均値が高かった (Fig.17)。着装後に「ゆかたを着てどこかに出かけてみたいか」という質問には、男女とも否定的で特に女子

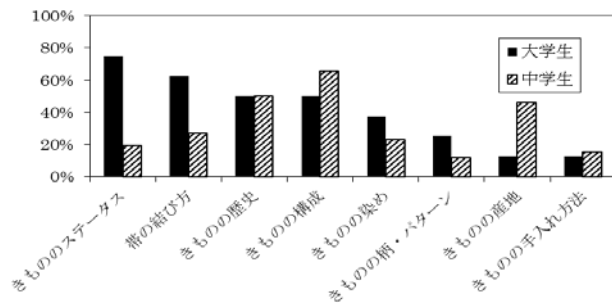


Fig.16 「きもの」について学びたいこと

で低かった。着装前にはほとんどが着たいと回答したが、実際に着装してみると日本人と違って外国人では日本人の民族服であるゆかたを着て出かけたとは思わないようである。

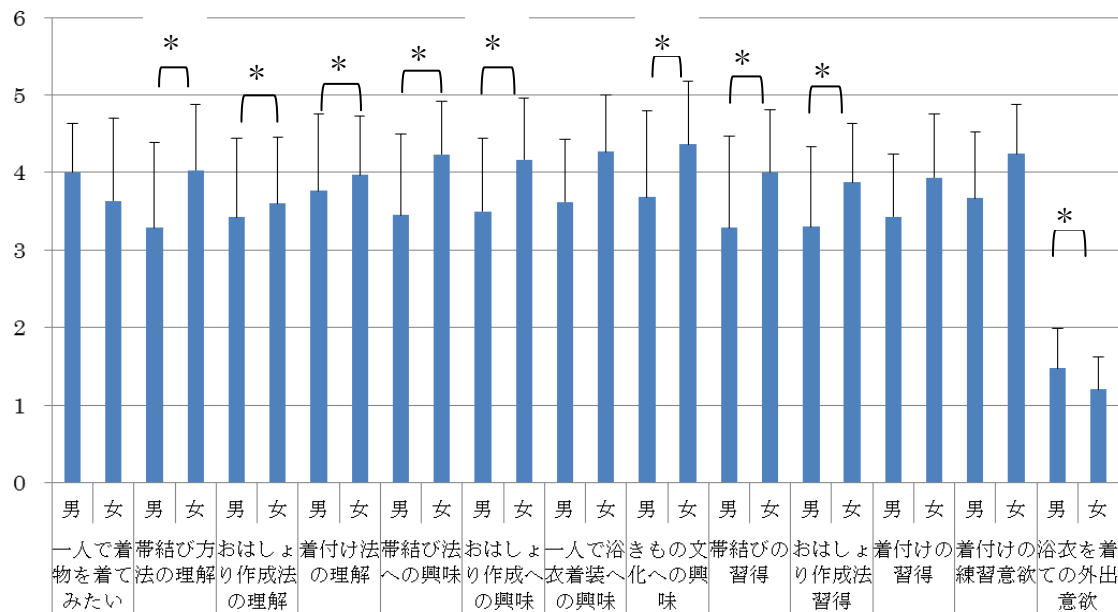


Fig.17 ゆかたの着装への興味関心、理解、習熟度の男女による平均値の差 (*:p<0.05 で有意)

4) 着装感

着装後の気持ちを 7 項目について 5 件法による回答を男女および大学生と中学生間で平均値の差の検定を行ったところ、男女差のみが数項目で有意となった (Fig.18)。

ゆかたでは食べ物がのどを通らないほどの拘束感や歩きにくさはあまり感じていなかったが、女子では有意に窮屈さを感じていた。一方で、優雅な気分や、うれしさでも、女子では、それ以上に感じていることが明らかとなった。

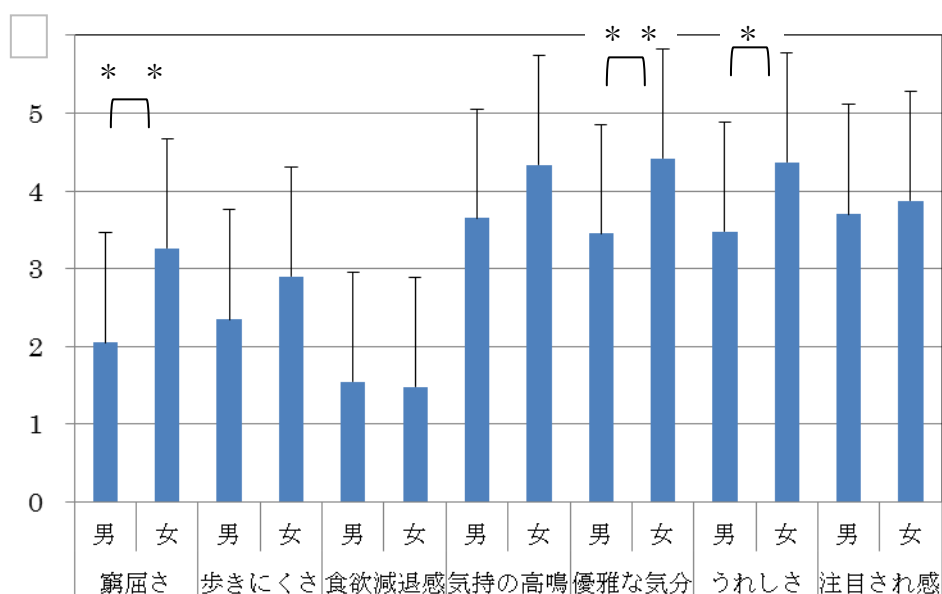


Fig.18 ゆかたの着装感の男女による平均値の差 (*:p<0.05 で有意、**:p<0.01 で有意)

中学生、大学生の着つけの自己評価・感想7項目の関連性を考察するため、これらを対象に探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。項目内容と固有値 1.0 を基準に因子数を決定した。2 因子解が妥当とされた。第 2 因子までの累積寄与率は 67.4% であった。以上の手続きにより単純構造の 2 因子解が得られた結果を Table1 にまとめた。

Table 1 探索的因子分析結果探索的因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	因子命名
高揚感	.981	-.119	高揚感因子
うれしい気分	.879	.151	
優雅な気分	.798	.067	
注目され感	.727	-.060	
窮屈感	-.092	.662	拘束感因子
歩行困難感	.039	.655	
食欲減退感	-.088	-.230	

累積寄与率 67.40%

第 1 因子は高揚感、うれしい気分、優雅な気分、注目され感からなり「高揚感因子」と命名した。第 2 因子は窮屈感、歩行困難感、食欲減退感からなり「拘束感因子」と命名した。外国人の大学生でも中学生でもゆかたの着装により、拘束感を感じながらも同時に高揚感を感じていることが確認された。

4. まとめ

以上のように、外国人にとってもゆかたの着装は気分を高揚させ興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の海外発信に一定の効果があることが推察された。学校教育は大学でその発信源としての貢献が見込まれたが、中学校ではさらなる貢献が望まれる。

以上、3年間のプロジェクトで本研究の目的に沿って研究を実施し、着装DVDの英語版の作成とe-Learning への応用、イギリスにおけるゆかたワークショップや授業実践、「きもの」文化に関して生徒・教師が学べるようなテキスト教材の作成など、着実に成果を上げてきたといえる。

VI. 「きもの」文化の海外発信をめざした中国でのゆかたの着装ワークショップ

横浜国立大学教育人間科学部 薩本弥生

大妻女子大学短期大学部 呑山委佐子

山梨県立大学人間福祉学部 斉藤秀子

埼玉大学教育学部 川端博子

1. はじめに

本研究では日本の伝統文化の一つである「きもの」文化を海外へ発信するための教育プログラムを開発し、海外での「きもの」着装ワークショップによる体験学習を通して、海外の人たちに日本の「きもの」文化を紹介し、「きもの」を通じた日本理解と文化交流の促進に貢献していくことをめざして活動してきた。2010 年度に中国上海在住の学生と社会人を対象にした「きもの」文化に関するゆかたの着装ワークショップを実施した。研究統括の薩本が企画し、メンバーの呑山、斉藤、川端および TA の学生が参加した。本プロジェクトが主催し、日本文化サロン「人文雅集－益田屋」が共催、在上海日本国総領事館広報文化センター、文化女子大学文化ファッション研究機構、大妻女子大学、山梨県立大学地域研究交流センター、横浜国立大学の後援で行った。以下にその活動内容を紹介する。



参加したメンバーの写真

2. 研究方法

1) 中国語版のゆかたの着装・たたみ方の DVD 作成

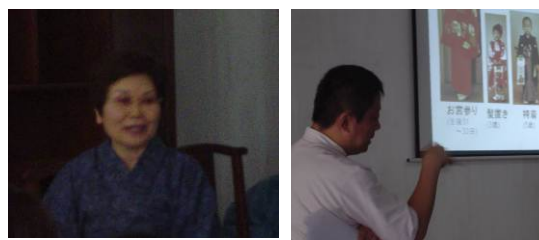
「中国でのゆかたの着装ワークショップ実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献する」という目的の達成のために、ワークショップ実施に先立ち、日本語版 DVD の中国語翻訳版作成を試みた。和裁を専門とし着装を含めて長期にわたり教育・研究を行ってきた呑山が監修し、中国語教育を専門とする王氏と水原氏に翻訳およびナレーションを委託した。2010 年 7 月に、大妻女子大学のビデオ収録スタジオにおいて中国語版ナレーションの吹きこみを行い、8 月に編集し、男女ゆかたの着装・たたみ方の中国版 DVD を完成させた (Fig.1)。



Fig.1 ゆかたの着装ビデオおよび編集作業風景

2) 着装ワークショップ実施方法

2010 年 9 月 24 日 (金) に魯迅公園内にある日本文化サロン「人文雅集－益田屋」(上海) にて、若い女性を中心とした中国人、在中日本人の参加者約 40 人を対象に



a. 講演する呑山氏

b. 通訳する邵陽氏

Fig.2 講演の様子

「ゆかた着装ワークショップ in 上海」を開催した。

冒頭、吞山が「人文雅集－益田屋」代表・邵陽氏の通訳を交えて、きものの歴史と文化に関する講演を行った(Fig.2 と 3)。その後、男女別に中国語版の DVD 上映でゆかたの着方を学んでもらった。プ



Fig.3 講演に聴きいる参加者と鲁迅公園

ロジェクトメンバーと TA の学生が着つけを手伝いつつ、全員がゆかたの着装を体験した。ワークショップに先立ち、①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを行い、ワークショップ後に②開発した中国語版ゆかたの着装・たたみ方ビデオの評価、着装後にしばらく会場内や会場のある鲁迅公園をゆかたで散策し、記念撮影した後に (Fig.4)、③着装感アンケートを実施した。2009 年 10 月にイギリスで実施したワークショップ時のアンケート結果と比較を行う。



Fig.4 着装ワークショップ後に記念撮影する参加者たち

3. 研究結果

①日本の現代および伝統文化に関するアンケートの結果

<日本文化（現代、伝統）への知識、情報の入手元、実際の体験>

現代文化への認知度では、漫画・アニメ (94%)、小説 (75%)、音楽 (69%) の順に高く、次いで日本の若者ファッション (53%)、ゲーム (50%) などが入り、半数以上に日本の現代文化が認知されていた(Fig.5)。中国人ではマンガ・アニメ、小説、音楽の順に注目されている。全般に今回の被験者では中国人の方が英国人よりも全般的な認知度が高かったが音楽とゲームは英国人の方で認知度が高かった。

情報の入手元は、テレビ (94%) とインターネット (88%) が主であった (Fig6)。

日本の現代文化の経験では、7 割以上が体験しており、内訳は漫画・アニメ (86%)、小説 (78%)、日本の音楽 (57%) の順であった。

伝統文化の認知度では、柔道、茶道に次いで

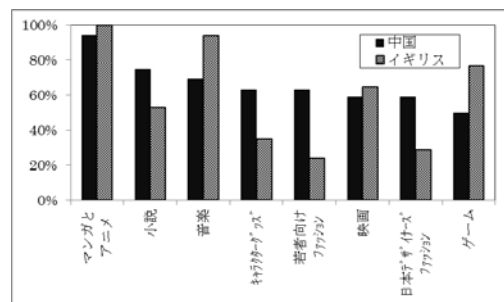


Fig.5 日本の現代文化の認知度

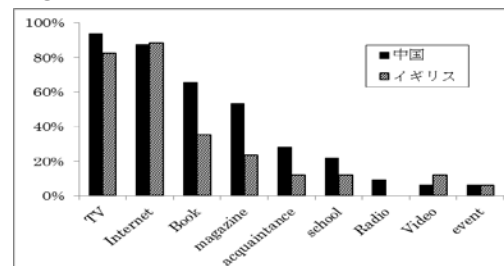


Fig.6 日本の現代文化の情報入手手段

華道と同率できもの（87%）が認知されていた（Fig.7）。全体に日本の伝統文化に関する認知度は高かった。参加者には中国茶のサークルに関わる親日派の人が多かったため、茶道、華道、きものなどの認知度は8割から9割と高く、日本の伝統文化と認知している人が多かった。日本の伝統文化の経験については、6割が経験していた。内訳は、茶道、陶器（50%）に次いできもの、華道（44%）であった。

一方、イギリス人は茶道、華道、陶器に関しては知らない人が多かった。

情報の入手元は、テレビ（94%）、インターネット（74%）、本（65%）が上位であった（Fig.8）。イギリスでは伝統文化の場合、TV に次いで学校を媒体して伝統文化の情報を得ているが（65%）、中国では、学校（26%）であり、イギリスほど情報の発信源として貢献していなかったとみなされる。

<きものに関する知識、着装経験>

きもの着装経験に関しては、中国人では男子の半数、女子の1/3が着たことがあったが、イギリス人では、経験者が女子の15%で男子では全く経験者がいなかった（Fig.9）。中国人の方が全体にきものに関する経験や興味が高い集団であるといえる。

きものについて学びたいことでは、歴史と柄・パターンについてが最も多く（87.5%）、次に着つけ方法（84.4%）、帯の結び方（75%）で、着つけを学びたい人がかなり多かった。次に、きものの構成、産地、きものの格、手入れ、染めと続いた（Fig.10）。

②ゆかたの着装・たたみ方ビデオの評価

ゆかたの着装・たたみ方のビデオを見た後の理解度については、帯結び、着つけの順に、理解が難しく感じていた。たたみ方は説明時間が人によっては十分取れなかったため、回答のばらつきが大きくなった。自由記述では、分かりやすいとする評価がある一方で、ゆかた自体の着つけ、帯結び、たたみ方ともに、ビデオでの一度の視聴では理解が難しく、教員の実演やスローモーション、文書での細部の説明等を望む記述もみられた。

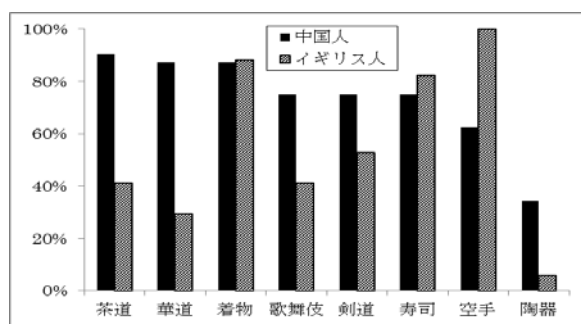


Fig.7 日本の伝統文化認知度

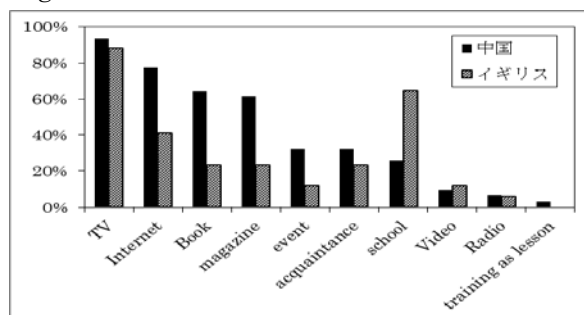


Fig.8 日本の伝統文化情報入手手段

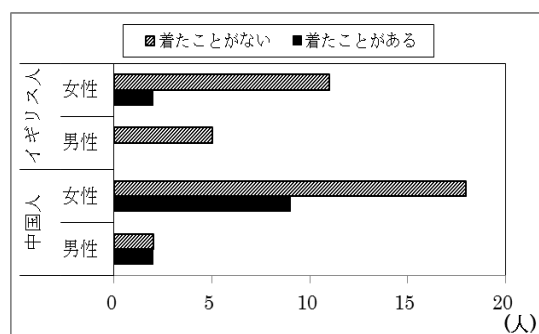


Fig.9 きもの着装経験

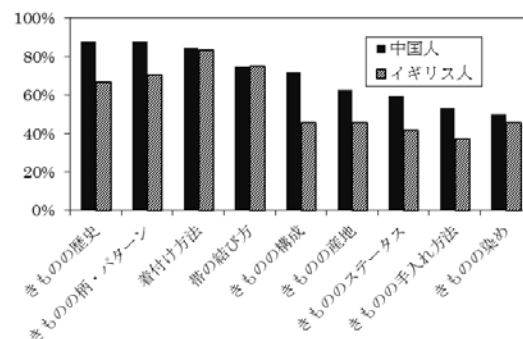


Fig.10 きものについて学びたいこと

③ゆかた着装後のゆかたに関する興味・関心、理解、習熟感と着装感

<ゆかたの着装・たたみ方に関する興味・関心、理解、習熟感>

ゆかたの着装体験後、着つけ、帯結び、たたみ方とも、興味は高かったが、理解度、習熟感は、帯結び、身ごろ、畳み方とも十分でないと感じていた。

着付けの習得意欲度で上位と低位の2群に分け、身ごろの着付け、帯結び、たたみ方各々の興味・関心、理解度、習熟感について平均値の差の検定をしたところ、帯結びについてはすべての項目で（Fig.11-a）、たたみ方については理解、習得意識で（Fig.11-b）上位群が有意に興味・関心が高く、理解、習熟感が高かった。着付けの習熟意欲が高いことが興味・関心、理解、習熟感に影響を与えることが明らかとなった。

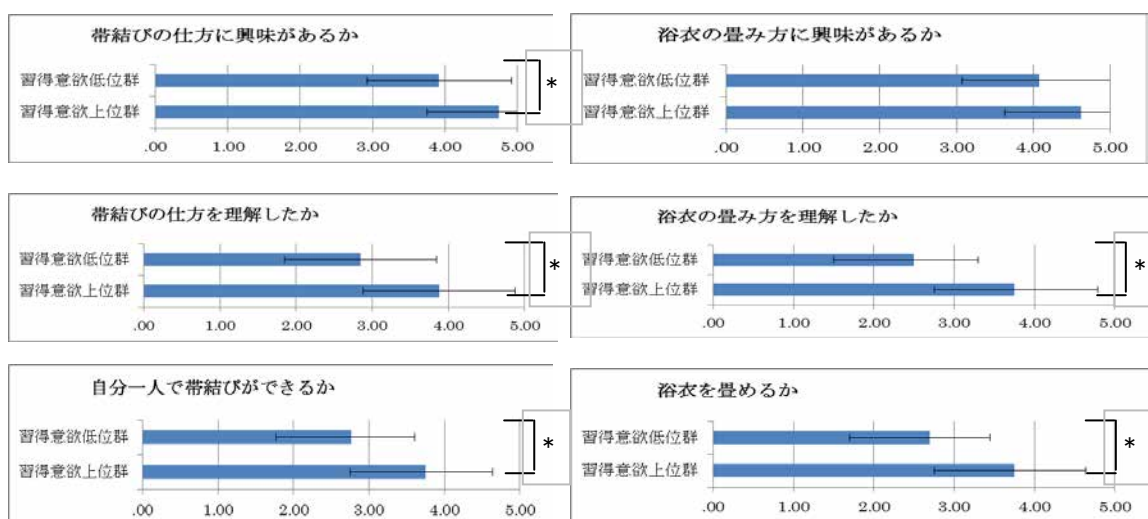


Fig.11-a 帯結びについて

Fig.11-b たたみ方について

Fig.11 着付け習得意欲が興味・理解・習熟感に及ぼす影響(*:p<0.05)

<着装感>

着装後の気持ちを7件法で7項目についての回答を Fig.12 に示す。

着装ワークショップ後にアンケートに回答しなかった参加者が多かったため、十分なデータが収集できなかったが、窮屈さや食事がのどを通らない感じや歩きにくさ等の拘束感を感じていた一方で、優雅な気分、気持ちの高鳴り、うれしさ、いつもより注目されている感じなども感じていることが分布から読み取れた。

着装感7項目の関連性を考察するため、これらを対象に探索的因子分析（重みなし最小二乗法・プロマックス回転）を行った。項目内容と固有値1.0を基準に因子数を決定した。3因子解が妥当とされた。第3因子までの累積寄与率は95.8%であった。

以上の手続きにより単純構造の2因子解が得られた結果を Table1 にまとめた。第1因子：高揚感と第2因子：拘束感、第3因子：立ち振る舞い因子の3因子が抽出された。拘束感や立ち振る舞い因子よりも高揚感が勝っていることが示唆された。

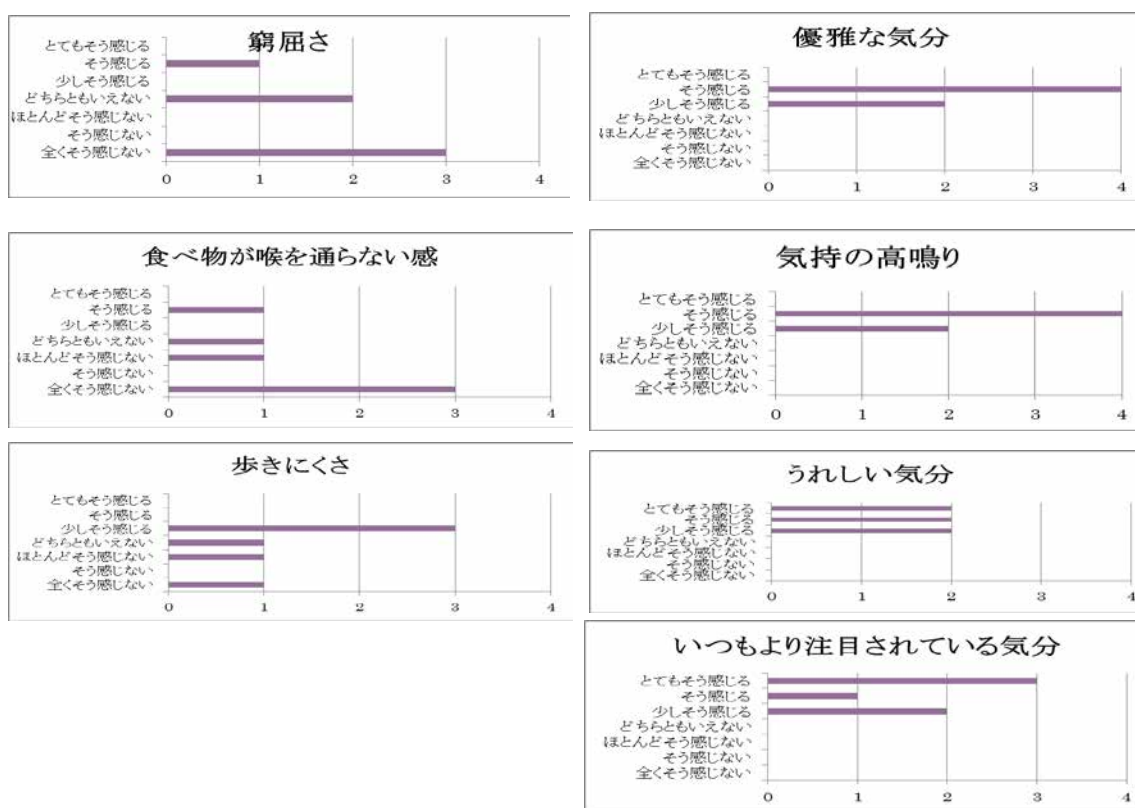


Fig.12 着装ワークショップ体験後の着装感（横軸：人数）

Table 1 探索的因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	因子命名
気持ちの高鳴り	1	-0.046	-0.089	高揚感因子
注目されている感じ	0.916	0.031	0.236	
うれしかったか	0.85	-0.074	-0.26	
窮屈だったか	-0.122	1.053	-0.045	拘束感因子
食物が喉を通らない	0.016	1.014	-0.085	
歩きにくかった	-0.199	-0.188	0.977	立ち振舞い因子
優雅な気分	0.206	0.322	0.714	
累積寄与率		95.80%		
I 高揚感因子	1			
II 拘束感因子	0.31	1		
II 立ち振舞い因子	0.04	0.43	1	

4. まとめ

以上のように、中国人にとってもゆかたの着装は気分を高揚させ興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の海外発信に一定の効果があることが推察された。きもの文化に興味が高

い人が多かった。今回の対象者の多くが中国の茶道を習っている人たちであったためと思われる。きものの着つけ習得意欲が特に高い人が半数近くいて、ゆかたについても意欲、理解、習得とも高かったので、ゆかたの着装体験によりきもの文化への興味を刺激することが効果的であることが示唆された。中国では学校教育で日本文化をあまり取り上げておらず、日本の文化の発信源としてテレビやインターネットが上位を占めていた。さらなる理解のためには学校教育の貢献が望まれる。一方、日本の文化の発信源としてテレビとインターネットが上位を占めていたことから本プロジェクトのe-learningサイトが役立つことを望む（e-learningサイト：<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp>）。

なお、上海での着装ワークショップの様子は、以下の横浜国立大学および大妻女子大学のホームページに紹介されている。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1085/detail.html>（横浜国立大学）

<http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/university/news/2010/2010-1004-1641-4.html>（大妻女子大学）

また、研究成果は（社）日本家政学会第63回大会で平成23年6月に口頭発表した。

謝辞：本研究を遂行するにあたり、下記の方の協力を得た。ここに感謝の意を表す。

文化ファッション研究機構、大妻女子大学総合情報メディア教育開発センター、日本文化サロン「人文雅集－益田屋」代表：邵陽氏、在上海日本国総領事館広報文化センター：徳増かおる氏、ゆかた着装ワークショップに参加して下さった皆様。



着装ワークショップ前半で着つけを終了した参加者との集合写真



「人文雅集－益田屋」代表・邵陽さんと日本スタッフ

Ⅶ. 海外でのゆかたワークショップの意義と課題

山梨県立大学人間福祉学部 斉藤秀子

1. 日本の「きもの」文化と、その海外への発信について

日本の「きもの」文化は、これまで、日常着あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら育まれてきた伝統文化の一つである。「着物」という言葉は、元来「着る物」の意味であったが、幕末に洋服が入ってくると洋服に対する和服を指す言葉となり、ここでは、着る物という意味ではなく、和服を意味する言葉として「きもの」と表現している。また、日本の「きもの」は日本の生活文化として理解される。この生活文化について、川崎ら¹⁾は、自分たちの日常をいかに快適にするかという欲求を原動力とする知的活動と行動様式であるとし、明治期からの生活文化の変遷を論じ、平成時代について、人間主体の幸福を追求する時代と位置づけ、私たちは現代に生き、過去と未来の間の生活文化を形成している、と述べている。さらに、日本家政学会編「生活文化論」²⁾には、生活とは生活要求（欲求）の実現過程であり、生活文化は環境に照応したものにならざるをえないとある。

「きもの」、そしてこれに関わる文化は、日本の夏は高温高湿、冬は低温低湿という環境で、変遷しつつ形成され、継承されてきた。また、海外への日本文化の影響として、19世紀の「ジャポニズム」があり、「きもの」をはじめとする伝統工芸が博覧会を通じて海外に伝わり、ヨーロッパで日本趣味の潮流が生まれたことが知られている。杉野ら³⁾は、服飾文化を論じるにあたり、人間の文化としての服飾について、その特徴を深く極め、同時に、文化の中の服飾について、その多様な在り方に広く理解を及ぼすことに、主たる目標をおく、と述べている。また、服飾文化には、人間文化の中で独特の有り方を示すに至る「文化としての服飾」と、他の文化の諸領域と複雑に関連し、交流し、多彩な展開の有様を指す「文化のなかの服飾」という二つの側面があるとしている。日本の「きもの」文化は、もちろん「文化としての服飾」として位置付けられる。また、19世紀ヨーロッパの日本趣味「ジャポニズム」は、交流と展開の一つと位置づけられ、ヨーロッパでの新しい文化の潮流を生み出した「文化のなかの服飾」といえる。では、本研究の日本の文化としての服飾を海外で紹介するゆかたワークショップは、どのように位置付けられるのだろうか。「ジャポニズム」にみられる、海外での新しい文化の形成をもたらすことだろうか。そのヒントは、先に述べた、川崎らの「人間主体の幸福を追求する時代」という言葉にあるかもしれない。

2. 海外でのゆかたワークショップの意義と問題点

政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし日本の伝統文化を伝え、発信する方法についての検討は十分ではない。

そこで、まず、ゆかたの着装、たたみ方のDVDの日本語版、そして英語版が作成され、日本での研究授業および海外でのワークショップのためのゆかた、帯等が準備された。本研究でのワークショップの特徴は、参加者一人一人がゆかたを実際に自分で着装することあり、参加者用のゆかた、帯等を準備する必要がある、また、実施する研究者はゆかたの着装指導ができることが条件となる。

第1回目のイギリスでのワークショップは、研究者2名により実施、イギリス在住日本

人 7 名、非日本人 19 名の男女を対象とした。はじめに、DVD で着装の概要を示し、着装を行った。対象人数が多くなく、研究者 2 名で対応することができたが、着装の技能面の評価には至らなかった。また、準備するゆかたのサイズバリエーションの必要性が示された。アンケート調査では、ゆかたの着装は気分を高揚させ、興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の海外発信の効果が示された。第 2 回目、イギリスでのワークショップは、研究員 2 名により実施、中学生の 15 歳クラス 35 名、12 歳クラス 20 名の男女を対象とした。ここでも、日本の伝統文化に直接触れ、高揚感を感じ、興味・関心を高めることが示された。ゆかたの準備については、前回のワークショップでの経験を踏まえ、ゆかた選択にあたりサイズがわかりやすい工夫をし、帯と帯板、ひもを一括して袋に入れて準備した。ここでの実践は、12 歳、15 歳の低年齢層を対象としており、人数も多く、2 名の研究者では対応に苦慮するところがあり、また着装の技能面の評価には至らなかった。ゆかた着装・たたみ方 DVD の利用方法について、いつ、どのように見せると効果的に問題が残った。第 3 回目、中国でのワークショップのために中国語版のゆかたの着装・たたみ方の DVD を作成した。このワークショップは研究者 4 名により実施され、学生 2 名が TA として参加した。対象は若い女性を中心とする 40 名であった。ここでの特徴は、ゆかた着装の前に、きものの歴史と文化に関する講演を行ったことである。イギリスと同様、ゆかたの着装は気分を高揚させ、興味・関心を喚起し、日本の伝統文化の海外発信に一定の効果が示された。第 4 回目のワークショップ時には、新しくテキスト教材“Introduction of Yukata”を作成、持参した。研究員 2 名および学生 9 名の TA により、中学校の 15 歳 20 名、2 クラス述べ 40 名を対象とした。男女での着装の時間差を利用して折り紙で手裏剣を作成するワークショップ、また、成人女子の盛装である振袖の着装パフォーマンスを実施した。これまでのワークショップ同様、ゆかたの着装は気分を高揚させ、興味・関心を喚起することが示された。

このように、計 4 回の海外のゆかた着装ワークショップにより、このような実践が参加者の気分を高揚させ、日本の「きもの」に対する、興味・関心を喚起することが示された。一方、作成された DVD 教材やテキスト教材の利用の方法、ワークショップの実施者の人数や TA、ゆかたや帯の特にサイズバリエーションについての検討が必要であることが示された。また、日本におけるゆかたを題材とした研究授業ではゆかた着装の評価が実施されているが、海外ワークショップにおいては評価には至ってなく、その必要性を含めて、検討が必要である。また、ゆかた着装のみならず、「きもの」についての講演や、振袖の着装パフォーマンス、折り紙ワークショップの実施など、ワークショップのバリエーションについての検討も必要である。今後、このような観点でのディスカッションを通し、海外でのワークショップの在り方について何らかの提案ができるよう検討を進める必要があろう。また、世界で利用できる e-Learning 教材利用の啓もう活動により、さらなる「きもの」文化の発信が期待される。では、このワークショップで得られるものは何か、それは、新しい文化に触れることの喜びであり、このことが文化の発信と交流をもたらすのではないだろうか。

参考文献

- 1) 川崎衿子、茂木美智子共編著「生活文化を考える」光生館 2-5 (2002)
- 2) 日本家政学会編「家政学シリーズ 21 生活文化論」朝倉書店 1-5 (1991)
- 3) 杉野正、小池千恵「服飾文化論」放送大学教育振興会 9-10 (1994)

謝 辞

本報告書の発刊に際し、服飾文化共同研究拠点文化学園大学文化ファッション研究機構、文化学園服飾博物館に感謝申し上げます。また、本研究の遂行にご協力いただいた下記の皆様に、感謝の意を表します。

文化学園服飾博物館学芸室室長・植木淑子氏

文化女子大学・水原寿里氏

大妻女子大学総合情報メディア教育開発センター山田光栄氏

大妻女子大学助手・興儀由香里氏、同大学学生・松田美波氏

翻訳家・増田久美子氏

イラストレータ・下田麻美氏

横浜国立大学非常勤講師・角田麻里氏・王凌氏

横浜国立大学教育人間科学部マルチメディア文化課程・山本光氏

横浜国立大学非常勤講師・森隆一氏、同大学学生・竹内達哉氏ら

横浜国立大学学生・浅沼絵利香氏、遠藤亮将氏、遠藤侑氏、大西一恵氏、川村友希氏、黒濱菜々美氏

千葉県立保健医療大学・井上裕光氏

埼玉大学学生・松井萌恵氏、小林由実氏

千葉県立流山南高等学校家庭科・仲田郁子教諭

私立吉祥女子高等学校家庭科・樋浦陽子教諭・山根晶子教諭、

私立洗足学園中学校家庭科・山口香教諭

埼玉大学教育学部附属中学校・加藤順子教諭

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校家庭科・中尾由美子教諭

(前)横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校家庭科・葛川幸恵教諭

横浜国立大学教育人間科学部附属中学校家庭科・菅田浩美教諭

川崎市立金程中学校家庭科・長谷川伸子教諭

浜松織物染色加工協同組合事務局長・曾布川之宏氏

二橋染工場専務・二橋教正氏

「人文雅集－益田屋」代表・邵陽氏

在上海日本国総領事館広報文化センター・徳増かおる氏

Design& Technology Department・Nigel Zanker 氏

ラフバラ町日本人会代表・篠沢久二子氏と浴衣着装ワークショップに参加して下さった皆様

Blessed Robert Sutton School の Stephens 氏および浴衣着装ワークショップに参加して下さった生徒たち

「きもの」文化の伝承と発信のための 授業実践研究最終報告書

発行年月日 2012 年 5 月 29 日

発 行 文化ファッション研究機構 平成 21-23 年度服飾文化共同研究
『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発
ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー』研究グループ

研究代表者 薩本弥生（横浜国立大学）

共同研究者 川端博子（埼玉大学）、堀内かおる（横浜国立大学）
扇澤美千子（茨城キリスト教大学）、斉藤秀子（山梨県立大学）
呑山委佐子（大妻女子大学短期大学部）

編 集 薩本弥生

連 絡 先 薩本弥生 〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2

印 刷 社会福祉法人東京コロニー コロニー印刷

〒165-0023 東京都中野区江原町 2-6-7